4 物語2

単元のねらい

◆昔の人の恋のあり方について理解し、歌物語に親しむ。
◆同じ和歌を主題とした異なる物語を読み比べる。
◆想像力を働かせ、人物の心情を考える。

・恋と愛をテーマとした章段から、平安期の人々の生き方を読み取り、和歌が軸となって展開する歌物語に親しむ。
・同じ和歌を主題とした「筒井筒」（伊勢物語）と「沖つ白浪」（大和物語）を読み比べ、それらの共通点や相違点を指摘させる。
・視点を変えて物語を書き換えることで、人物の心情をより深く捉えさせ、想像力を豊かにする。

歌物語を通して、我が国の文化と精神史を学ばせ、ものの見方、感じ方、考え方を豊かにすることをねらいとしている。

単元の構成

比較的平易な歌物語である「伊勢物語」より、四教材を取り上げた。「芥川」はいかにも王朝的な説話で当時の愛というものの一つの形を示している。「東下り」は愛と旅がテーマになっており当時の風習、習慣なども興味深く学ぶことができる。「筒井筒」は幼なじみの恋の成就という前半と男を想う妻の歌が男の愛を取り戻したという後半から成る。「梓弓」は男と女の愛情の問題を主題としている。また、読み比べ教材として「筒井筒」と同じ和歌を主題とする「大和物語」より、「沖つ白浪」を取り上げた。

「古文の窓３　平安文学の恋」では、「かいま見」や「懸想文」「露顕」など、平安文学における恋の始まりから結婚までの過程と文化について解説している。

「単元の言語活動４　視点を変えて、物語を書き換える」では、女の視点で語られている「梓弓」のその後の物語を、男の視点で書き

換えることを通して、物語への理解を深める。

物語2

教材のねらい

1　選定の理由

「伊勢物語」の中から「芥川」「東下り」「筒井筒」「梓弓」の四段と、「筒井筒」の読み比べ教材として「大和物語」「沖つ白浪」を学ぶ。「芥川」はいかにも王朝的な説話で当時の愛というものの一つの形を示している。「東下り」は愛と旅がテーマになっており当時の風習、習慣なども興味深く学ぶことができる。「筒井筒」は幼なじみの恋の成就という前半と男を想う妻の歌が男の愛を取り戻したという後半から成る。「沖つ白浪」は「筒井筒」の後半部分とほぼ同じ内容でありながら、さまざまな点で異なった点があり、興味深い。「梓弓」は男と女の愛情の問題を主題としている。これらは多くの人に愛好され後世の文学に大きな影響を与えた。みずみずしい歌物語の世界を味わい我が国の文化や美意識を学習するのにふさわしい教材である。

2　指導のねらい

内容を理解させ、歌物語の特徴を捉えさせ、我が国の文化史・文学史のうえでの位置を把握させる。物語としての主人公たちの青春期の行動を読み取らせ、生徒自身の人生観の確立に寄与させる。

3　単元の目標

目標について、別表「単元の目標一覧」をご確認ください。

4 評価規準

学習指導要領との対応等	評価規準例	〔知識・技能〕								力等〕
		(1)ア	(1)ウ	(1)エ	(1)オ	(2)イ	(2)ウ	(2)エ		B (1)ア
		言葉には、文化の継承、発展、創造を支える働きがあることを理解している。	我が国の言語文化に特徴的な語句の量を増し、それらの文化的背景について理解を深め、語感を磨き語彙を豊かにしている。	文章の意味は、文脈の中で形成されることを理解している。	枕詞や序詞、掛詞、縁語などの我が国の言語文化に特徴的な表現の技法とその効果について理解している。 序詞などの我が国の言語文化に特徴的な表現の技法とその効果について理解している。	古典の世界に親しむために、作品や文章の歴史的・文化的背景などを理解している。	古典の世界に親しむために、古典を読むために必要な文語のきまりや、古典特有の表現などについて理解している。	時間の経過や地域の文化的特徴などによる文字や言葉の変化について理解を深め、古典の言葉と現代の言葉とのつながりについて理解している。 時間の経過による文字や言葉の変化について理解を深め、古典の言葉と現代の言葉とのつながりについて理解している。	「読むこと」において、文章の種類を踏まえて、内容や構成、展開などについて叙述を基に的確に捉えている。
	芥川	○	○	○		○	○	○		○
	東下り	○	○	○	○	○	○	○		○
	筒井筒	○	○	○		○	○	○		○
	沖つ白浪	○	○	○		○	○	○		○
	梓弓	○	○	○			○	○		○
	古文の窓３					○				
	単元の言語活動４	○								

〔思考力・判断力・表現〕			〔主体的に学習に取り組む態度〕
B(1)イ	B(1)エ	B(1)オ	
「読むこと」において、作品や文章に表れているものの見方、感じ方、考え方を捉え、内容を解釈している。	「読むこと」において、作品や文章の成立した背景や他の作品などとの関係を踏まえ、内容の解釈を深めている。	「読むこと」において、作品の内容や解釈を踏まえ、自分のものの見方、感じ方、考え方を深めている。	進んで昔の人の恋のあり方について理解し、歌物語に親しみ、副詞の呼応などについて理解し、学習課題に沿って、第三段落があることの構成上の効果について考えようとしている。
○	○		○
○	○		
○	○		
○	○		
○	○		
			○
○		○	

進んで昔の人の恋のあり方について理解し、歌物語に親しみ、「ば」の用法を理解し、学習課題に沿って、「から衣」「駿河なる」「名にし負はば」の三首の和歌に共通する人物の心情を考えようとしている。

粘り強く昔の人の恋のあり方について理解し、歌物語に親しみ、内容や構成、叙述を基に人物の心情を考え、学習課題に沿って、同じ和歌を主題とした異なる物語を読み比べようとしている。

進んで昔の人の恋のあり方について理解し、歌物語に親しみ、係り結びについて理解し、学習課題に沿って、「そこにいたづらになりにけり」という結末が「梓弓」をどのように印象付けているか話し合う。

進んで昔の人の恋のあり方について理解し、歌物語に親しみ、今までの学習を生かして、想像力を働かせ、人物の心情を考えようとしている。

■言語活動例との関連（【　】は関連する指導要領の言語活動例）

「筒井筒」言語活動１　同じ和歌を主題とした異なる物語を読み比べる。【〔思・判・表〕B(2)ウ】

単元の言語活動４　視点を変えて、物語を書き換える。【〔思・判・表〕B(2)エ】

物語2

指導計画案

	指導上の重点目標	学習活動	指導上の留意点
導入	【芥川】 1 物語の中における和歌の役割を確認し、歌物語を鑑賞する。	❶「伊勢物語」について調べてきたことを発表する。知技 ❷ 主人公のモデルとされる在原業平について調べてきたことを発表する。知技	❶ 歌物語であることを確認させる。 ❷ 国語便覧、系図などを利用させる。
展開		❶「芥川」を音読する。思判表 ❷ 重要古語の意味・用法を確認する。知技 →「言葉と表現」1・2 ❸ 現代語訳し、段落ごとに内容を確認する。知技 思判表 ❹ 男と女の境遇と事件の展開について考える。思判表 →「学習のポイント」1 ❺ 明かされた事件の真相について考える。思判表	❶ 韻律に注意させる。 ❸「え得まじかりける」「盗み出でて」などの語句に注意させる。 ❺ 事件の真相として語られている内容について確かめさせる。
まとめと発展		❶「白玉か」の歌に込められた男の心情について考える。思判表 →「学習のポイント」2 ❷ 第三段落があることによる効果を話し合う。主態 →「言語活動」1	❶ 和歌が物語の頂点にあることを確認させる。 ❷ 第三段落があるのとないのとでは物語の印象がどのように変わるかを考え、整理させる。
展開	【東下り】 1 登場人物の心情と和歌との関係に注意し、物語を鑑賞	❶「東下り」を音読する。思判表 ❷ 重要古語の意味・用法を確認する。知技 →「言葉と表現」1	❶ 韻律に注意させる。

する。 2　三首に共通する心情を考える。		
【筒井筒】 1　和歌に表現された男と女の心情を把握し、物語を鑑賞する。 2　和歌に表現された女の心情と、それに対する男の行動を把握し、物語を鑑賞する。 3　「沖つ白浪」と読み比べをし、それぞれの作品の作風の違いについて考える。	**展開** ❶「筒井筒」を音読する。思判表 ❷ 重要古語の意味・用法を確認する。知技 →**「言葉と表現」1** ❸ 現代語訳し、段落ごとに内容を確認する。知技 思判表 ❹「筒井筒」「くらべこし」の歌に込められた男と女の心情を理解する。（「古文の窓3」を参照する）知技 思判表 →**「学習のポイント」1** ❺「風吹けば」の歌の修辞を確認し、女の心情を理解する。知技 思判表 ❻ 大和の女と高安の女の詠んだ歌、振る舞いや性格について比較する。思判表 →**「学習のポイント」2** **まとめと発展** ❶「筒井筒」と「沖つ白浪」を読み比べ、作風の違いについて考察する。主態 →**「言語活動」1**	❸ 現代語訳し、段落ごとに内容を確認する。知技 思判表 →**「学習のポイント」1** ❹「から衣」「駿河なる」の歌の修辞を確認する。知技 **まとめと発展** ❶ 男の心情の推移を「から衣」「駿河なる」「名にし負はば」の三首の歌を追って考える。思判表 主態 →**「言語活動」1** ❹ 修辞については脚注、「和歌の修辞」を活用されたい。 ❶「都」との関連において捉えさせる。 ❶ 韻律に注意させる。 ❷「井」の持っていた意味などにも触れる。 ❸ 男と女の心情に注意させる。当時の結婚形態について触れる。 ❹「筒井筒」という語の現代での意味にも触れる。 ❺ 女の人物像を具体的に描かせる。 ❻ それぞれの女が歌に込めた心情を読み取る。 ❶ グループを作り、「筒井筒」と「沖つ白浪」で描写が違う部分をあげさせる。
【梓弓】 1　四首の歌に表れた男女の心情を読み取り、女の哀切な死を読み味わう。 2　女の死という結末について考える。	**展開** ❶ 梓弓とは何かを想像する。知技 ❷ 全文を音読する。思判表 ❸ 重要古語の意味・用法を確認する。知技 →**「言葉と表現」1**	❶ 言葉から来るイメージを描かせる。 ❷ 音読は単語を意識させ、和歌は韻律にも注意させる。範読を聞かせた後、単独読みや一斉読みなどをさせる。音読を聞く態度も養わせたい。 ❸ 四首の枕詞・序詞、「わぶ」「うるわしみす」「よる」「かぬ」の意味を辞

❹ 現代語訳する。知技 思判表

❺ 四首の歌を解釈する。思判表

❻ 男の歌に表された何が、女の気持ちを変化させ、後を追わせたのかを考える。

❼ 血文字で歌を書きつけた女の心情を考える。

❽ 女の死という結末の印象を話し合う。主態

→「言語活動」1

❾ 女（男）の生き方について考える。思判表

書で調べさせ、古語と現代語の意味の違いに着目させる。「かなし」「いたづらに」など、主題にかかわる語句の意味にも注意させる。また、係り結びの用法を確認させ、女の困惑した心情を強調していることに気づかせる。

❹ 三人（男（夫）・女・新しい男）の関係を明確にしたうえで、物語の流れをつかませる。

❺ 女・男それぞれの心情を読み取り、解釈に生かさせる。

❻ 男（夫）の女への思いやりが、新しい男と生きようとしていた女に、男との深い愛を思い起こさせたことに気づかせる。

❼ 女の情の深さ、無念さ、諦念などを読み取らせる。

❽ 女の死が必然のものとして感じられるのは、生の純粋さ、燃焼度の高さによることを気づかせる。女の生きる世界は男との過去でしかなく、死をもって終わることしかなかったことを理解させる。

❾ 〝もし自分が女（男）だったら〟と仮定した短い感想文を書かせて、それぞれの心情をより深く読み取らせる。それぞれの感想文を発表し合い、さらに考えさせる。

【単元の言語活動４　視点を変えて、物語を書き換える】

1「女」の視点で描かれている「梓弓」を「男」の視点に書き換える。

2　立場の異なる登場人物の視点で物語を捉え直し、物語への理解を深める。

導入	1 「梓弓引けど」「あひ思はで」のそれぞれの歌を詠んだときの「女」の心情を、表の中に整理する。思判表	1 和歌の前までの物語のストーリーを踏まえたうえで、二つの和歌に込められた「女」の心情を考える。
展開	2 「梓弓引けど」「あひ思はで」のそれぞれの歌に対して、「男」はどのような心情を抱いたかを想像し、表に書き込む。思判表 主態 3 「男帰りにけり。」以下を「男」の物語に書き換える。思判表 ❶ グループを作り、ひとりひとりが考えた「男」の心情についてグループ内で発表し、意見をまとめる。 ❷ グループでまとめた意見に従って、「男」の心情に基づいた「男」の行動を考える。 ❸ 「男帰りにけり。」（六九・11）以下を「男」の視点の物語に書き換える。	2 「女」の二つの和歌に対して、それを元の男が目にしていたらどのような気持ちを抱くのかを想像してみる。その際に1で考えた和歌に込められた「女」の心情も参考にする。 ❶ グループを作った後、それぞれで元の男の心情を考える。個人の作業終了後、場面ごとに心情を検討し、グループの意見をまとめる。 ❷ 物語では大まかな行動しか示されていないので、もう少し詳細な行動や心理を付け加えて行く。 ❸ 「男帰りにけり」以下の部分は「女」の描写しかない。それと並行している元の男の物語を、現代語でよいので書いていく。
まとめと発展	4 「男」の視点の物語を発表する。知技 思判表 主態 ❶ グループでまとめた「男」の物語を発表する。 ❷ 発表を聞いて、共感できる点をあげる。	4 視点を変えるという考え方があることに気付かせることを重視したい。 ❷ それぞれのグループの発表を聞いて、共感できる点をメモさせる。その中で自分たちが考えられなかった行動や心情があった場合にはその妥当性を検討させる。

伊勢物語

作者

作者は未詳。古来諸説があるが、その代表的なものは以下のとおりである。(1)業平の自作（「袋草子」「流布本奥書」）、(2)伊勢の作（「流布本奥書」）、(3)業平の自記に伊勢が補筆（「和歌知顕集」）、(4)業平の遺稿を近親者が整理補筆（「伊勢物語注」）、(5)業平の日記に後人が増補（「彰考館蔵伊勢物語鈔」）、(6)在原一門の作（「和歌浦鶴」）「考証伊勢物語詳解」）、(7)紀貫之の作（折口信夫）、(8)具平親王の撰（「真名伊勢物語」に六条宮撰とある。橘守部）。

(1)(2)(3)は古くから唱えられているが、江戸時代に賀茂真淵により否定された。池田亀鑑著「伊勢物語に就きての研究　研究篇」によると、「もし、強ひて編者の名を求むるならば、やはり業平に最も関係の深い人、即ち在原一族の人々によつて成されたものとするのが穏当であらう。」とある。現在では、段階的に複数の作者の手に成るもの、とする説が有力である。

出典

▼底本

新日本古典文学大系「竹取物語　伊勢物語」（秋山虔校注、平成九〔一九九七〕年、岩波書店）によった。新大系本の底本は学習院大蔵定家筆本を用いている。

▼諸本

「伊勢物語」は異本が多く、池田亀鑑著「伊勢物語に就きての研究　校本篇」によれば、四十三種を五系統七類に分類している。(1)定家本（a天福本、b武田本、c流布本）、(2)古本、(3)大島本、(4)塗籠本、(5)真名本に分かれる。天福本は、天福二（一二三四）年定家七十三歳のときに書写したもので、最も信頼できるものであると言えよう。

▼書名

「伊勢物語」は歌物語で、一巻から成る。「伊勢物語」という書名は、古く「枕草子」七八段「頭中将のすずろなるそら言を聞きて」の条や「源氏物語」絵合巻に見える。また、「源氏物語」総角巻に「在五が物語」、「更級日記」に「在中将」、「狭衣物語」に「在五中将の日記」などとある。いずれも「在原氏の五男、近衛の中将業平の物語」という意味で名付けられたものである。

「伊勢物語」の名称についても諸説があり、(1)伊勢の作または補筆からとする説（「愚見抄」「直解」「拾穂抄」）、(2)「ひがごと物語」の意味だとする説、当時の諺に「伊勢人はひがごとす」とあったことより生まれたと考えられたもの（「袋草子」「古今集註」「童子問」）、(3)「男女の仲らいを書いた物語」とする説、「いせ」は「妹夫」で男女の仲らいを言う（「伊勢物語題号考」）、(4)

「似而非（えせ）物語」の音転とする説（加納諸平ら）、(5)「昔、男」が伊勢の斎宮に使いする六十九段が全編文中最も注目されるからとする説（「童子問」「古意」など）、(6)原本では伊勢斎宮の記事が巻頭にあったからとする説（「袋草子」「童子問」「考証伊勢物語詳解」など）。これらの説の中では、(5)(6)の、六九段が愛の物語である「伊勢物語」の中心をなすという説は説得力があるが、他の平安朝物語の「落窪物語」や「源氏物語」などのような、その理由の判然とした書名に比べて、断定しがたい。

▼成立

成立時期は不明である。家集形式の「古本業平集」が原型で、他の説話や歌が加えられ、次第に業平の一代記ふうに説話化されていったものかと思われる。あるいは、「古今和歌集」成立の延喜五（九〇五）年以前かと推定されるのは、「枕草子」や「源氏物語」に「伊勢物語」という名称が見られるからである。ただし、現存の形になったのは、「後撰和歌集」の天暦五（九五一）年頃かそれ以後のことであろう。

▼内容

伝本によって異同はあるが、歌を中心にしたおよそ百二十五段の小話から成る短編集である。各段とも多く「昔、男ありけり」で始まり、各小話の中に一首または数首の歌が出てきて、その多くが在原業平の歌である。また、話の中に出てくる事柄も、明らかに業平のことであると推定されるものが多いことから、「男」とは、業平をモデルとしているものと思われる。また、全編はこの「男」の「初冠」から「辞世歌」まで一代記のような構成をとり、統一感をもたせている。

およそが年次を追って構成されており、また、その中にはグループのようにまとまった段も見られる。例えば、二条の后（三〜六段）、東下り（七〜九段）、伊勢斎宮（六十九〜七十五段）、昔男の歌才（七十八〜八十一段）、惟喬親王（八十二〜八十五段）などの物語である。しかし、反面、全体の物語の脈絡は緊密とは言えない面も多い。「昔、男」という不特定人称によって、一個の人間では体験しえない多面的な人生が次々と語られている。

「昔、男」の生涯を記すという統一感をもたせ、歌によって実在の業平の情熱を印象づけながら、多面的な人生を描き、「みやび」の精神を具体的言動に即して追求していると言えよう。

主題は、三分の一以上が男女の恋愛談である。そのほか、親子・主従・友人間の様相や、宴会・旅行・述懐なども取り上げられている。それらの小話には、美しい「まこと」の心と「みやび」の精神が表れている。

▼表現

文章は短句の積み重ねによって、簡素素朴で、かつ、優雅である。語意の用法の平淡さや、文脈の論理的な明快さを欠く点はあるが、情景描写の的確さや余情あふれる表現などが、それらの欠点を補ってあまりある。後の物語はこの物語を範とし、歌人必読の書とも言われ、後世の文学に与えた影響は大きい。

参考文献

※ 教師用

▽注釈書

日本古典全書「竹取物語　伊勢物語」南波浩
朝日新聞社　昭三十五
校注古典叢書「伊勢物語」片桐洋一他　明治書院　昭四十六
「伊勢物語全釈」森本茂　大学堂書店　昭四十八
「伊勢物語全訳注」（講談社学術文庫）阿部俊子
講談社　昭五十四
「新版伊勢物語」（角川ソフィア文庫）石田穣二
角川学芸出版　昭五十四
新編日本古典文学全集「竹取物語　伊勢物語　大和物語　平中物語」片桐洋一他　小学館　平六
新日本古典文学大系「竹取物語　伊勢物語」秋山虔他
岩波書店　平九
新潮日本古典集成「伊勢物語」〈新装版〉渡辺実　平二十九

▽研究書

「伊勢物語に就きての研究」（校本篇・研究篇）池田亀鑑
大岡山書店　昭八・九　同復刊　有精堂　昭三十三
「伊勢物語に就きての研究」（補遺篇・索引篇・図録篇）
大津有一　有精堂　昭三十六
「伊勢物語の研究」（研究篇・資料篇）片桐洋一
明治書院　昭四十三・四十四
「平安文化史論」目崎徳衛　桜楓社　昭四十三
「伊勢物語総索引」大野晋・辛島稔子編　明治書院　昭四十七
「伊勢物語生成序説」市原愿　明治書院　昭五十二
「伊勢物語の新研究」片桐洋一　明治書院　昭六十二
「伊勢物語私記」金田元彦　風間書房　平二
「伊勢物語と古典文学」福井貞助　風間書房　平十二
「伊勢物語の文芸史的研究」原国人　新典社　平十三

▽入門書・研究案内

鑑賞日本古典文学「伊勢物語　大和物語」片桐洋一
角川書店　昭五十
図説日本の古典「竹取物語　伊勢物語」片桐洋一
集英社　昭五十三
鑑賞日本の古典「伊勢物語　竹取物語　宇津保物語」藤岡忠美
尚学図書　昭五十六
研究資料日本古典文学「物語文学」大曾根章介
明治書院　昭五十八

❊生徒用

「伊勢物語」（岩波文庫）大津有一　岩波書店　昭三十九
「恋する伊勢物語」（ちくま文庫）俵万智　筑摩書房　平七
「文法全解　伊勢物語」（古典解釈シリーズ）雨海博洋
旺文社　平八
「伊勢物語」（角川ソフィア文庫　ビギナーズ・クラシックス）
坂口由美子　角川学芸出版　平十九
「伊勢物語」（笠間文庫　原文&現代語訳シリーズ）永井和子
笠間書院　平二十
「NHKまんがで読む　古典伊勢物語」細村誠
金の星社　平二十三
「心にグッとくる日本の古典」黒澤弘光・竹内薫
NTT出版　平二十三
「現代語訳　竹取物語　伊勢物語」田辺聖子

岩波書店　平二十六
「伊勢物語」在原業平　恋と誠（日経プレミアムシリーズ）
日本経済新聞出版　令二

図版解説

〈燕子花図屏風〉

根津美術館蔵。江戸時代前期（一八世紀）。屏風。紙本金地着色六曲一双。尾形光琳（一六五八〜一七一六）筆。「伊勢物語」九段「東下り」で、燕子花の名所、八橋にて詠まれた和歌を背景に、燕子花の群生を、隻の対象も計算しつつ、濃淡の群青と緑青によって強烈に描く。物語の登場人物を描かずに、象徴となる背景や持ち物・小道具などの意匠によってその作品を表現する技法を留守模様と言う。⇩ P 57

〈伊勢物語絵巻（模本）〉

東京国立博物館蔵。天保九年（一八三八）成立。絵巻。三巻。狩野晴川院養信（一七九六―一八四六）らによる完本の模本。「芥川」の場面は中巻第六図。女を背負って芥川を行く景、暗雲雷鳴の中、女を隠し入れた建物の前で弓を背負って戸口を守る景、鬼が女を食われるのを見て驚き嘆く景の、三つの場面を一つの異時同図として描いている。⇩ P 58〜59

〈伊勢物語図屏風〉

大和文華館蔵。江戸時代中期。六曲一双。金地着色。右隻に三河の国の八橋に咲くかきつばたを眺めながら都をしのぶ一行が、左隻には紅葉の布引の滝を訪れて歌を詠む一行の光景が描かれている。⇩ P 61

〈業平東下り図〉

五島美術館蔵。江戸時代前期（一八世紀）。一幅。紙本著色。尾形光琳筆。在原業平と童子、従者の一行が京都から東国へ下る途中、富士山の麓を馬に乗って通過する場面を描く。もとは六曲一双に描かれたうちの一扇で、それを掛軸に改装した作品と言われる。⇩P63

〈奈良絵本『伊勢物語』〉

國學院大學図書館蔵。江戸時代前期。一巻二軸。上軸に五十段分、下軸に二十九段分の絵がある。挿絵は井筒ごしに井戸を覗く幼い男女が描かれる。⇩P65

大和物語

作者

作者は未詳。古来、在原滋春、花山院、敦慶親王ゆかりの女房大和あるいは伊勢などの諸説があるが、古く「袋草紙」に「作者不審」とあるとおり、作者を特定する根拠は見当たらない。近年の研究では、作中の主要な人物の関係や素材と語り手のつながりなどから、作者というより、作品の世界を作り上げた歌語りの場を解明し、そこから作者像を導き出そうとしている。宇多法皇とそれにつながる人々の社交圏に属する人々の歌語りが多く、同代の勅撰集「後撰和歌集」に対して、私的な世界への傾斜が強いことから、その歌語り圏の女流たち、例えば、兵衛の命婦とその娘の大和、伊勢とその娘の中務（なかつかさ）などをあげて、作者像を確定しようとする考究がなされている。

出典

▼底本

新編日本古典文学全集「竹取物語　伊勢物語　大和物語　平中物語」（片桐洋一他校注、平成六〔一九九四〕年、小学館）によった。新編全集の底本は、為家本（前田家本）を用いているが、これは、江戸時代以降流布本となった二条家本の系統に属する善本である。

「大和物語」は異本が多いが、二条家本系統のものが一般に読まれ、現行の活字本も、ほとんどがこの系統のものである。為家本は、大系本のほか、柿本奨「大和物語の注釈と研究」の底本となり、定家自筆本系統の伝為氏本が「日本古典全書」の、天福本が「日本古典文学全集」の底本となっている。二条家本以外の諸本（六条家本系統と呼ばれることもある）には、御巫（みかなぎ）本・鈴鹿本があり、本文の異同や相当量の附載説話で注目される。他に、勝命本と言われる、正治二（一二〇〇）年の奥書を持つ本の転写本の系統の本があり、諸本との関係が重要視されている。

▼書名

「大和物語」という呼称は、平安時代末期の歌学書（前記の「袋草子」など）で見られるようになるが、別名はない。その由来については、作者または作者と仮託された人（女房大和）の名前によるとする説、大和は地名で、「伊勢物語」に対して付けられたとする説、唐の物語に対して日本の物語、あるいは大和歌に関する物語とする説などがあるが、いずれも定説と言える段階にはない。

▼成立

成立時期を限定できる外部資料はない。作中人物の呼称などで、八十一段に、天暦八（九五四）年崩御の穏子皇后を「故后の宮」としていることを除くと、他は全て天暦五（九五一）年までであるこ

とから、成立時期の上限をその年とするのは、諸説ほぼ一致している。八十一段の「故」文字などを後人の補筆とみるかどうか、また、成立後の説話の付加や本文・章段の改訂などをどのように推定するかで分かれるが、天暦五年を大きく下らない時期には、かなりまとまった形で成立していたと考えられており、複数の手による何回かの増補改訂を経て、一条天皇期に、現行の流布本の形になったとするのが、成立時期についての大枠となっている。

▼内容

歌にまつわる小さな物語や説話を集めた歌物語集で、現行の流布本は百七十三の章段から成る。「伊勢物語」が、百二十五の章段を在原業平と想定させるある男の一代記となるように構成してあるのや、「平中物語」が平中の歌語りを集めたものになっているのに対して、「大和物語」は特定の人物に限らず、実在の人物に限っても百人を越える人々の話を集めている。物語の配列も、部分的に同じ人物に関するものを続けたり、主題・主情の連想で続けたりする部分はあるものの、全体として構成と言えるようなものはない。

百七十三の章段を、普通、百四十段までを第一部、百四十一段以降を第二部として、二部に大別している。第一部は、語り手にとって近い過去、あるいは同時代の人物たちの歌にまつわる話を事実として物語ったものから成る。この実在の人物は、天皇、皇族、公卿・殿上人、僧侶、女房など、百余人に及ぶが、それらの人物は、宇多天皇とその周辺につながる人々を主としている。敦慶親王、藤原定方、藤原兼輔、源宗于（むねゆき）、源公忠、平兼盛、元良親王らと、それらとゆかりのある、俊子、監の命婦、大和、伊勢らの女房・歌人たちがそれである。これらの人々は、多く「後撰和歌集」の作者であるが、「後撰和歌集」がより権勢の立場にあった人の作が多いことと対照的に、内容においても、風流韻事に傾いており、それも、恋の悲哀、旅や死の別れの悲しみ、人生の不如意というような哀感を基調としている。

それに対して、第二部は昔物語と言うべき、伝説や伝説的な人物の逸話が集められている。すなわち、生田川、蘆刈、猿沢の池の采女、浅香山、処女塚、姨捨、良少将の出家の話などがそれで、ここでは、地方に伝わる、哀しくも優しい人の心を歌い上げる話が多い。

▼表現

「大和物語」は、「伊勢物語」が簡潔優雅な文体によって醇乎（じゅんこ）たる叙情的香気に満ちているのに対し、散文的、叙事的で、現実に起こった歌語りを叙述するという傾向が強い。その点、説明的でややくどい文体だと評されたりもするが、現実の多様で雑駁なありように対応する説話的な写実性であるともいえるわけで、物語文学の可能性を内包して、次代につないだ作品と評価できるのである。

参考文献

❊ 教師用

▽注釈書

日本古典文学大系「竹取物語　伊勢物語　大和物語」阿部俊子・今井源衛　岩波書店　昭三十二

日本古典全書「大和物語」南波浩　朝日新聞社　昭三十六

日本古典文学全集「竹取物語　伊勢物語　大和物語　平中物語」高橋正治　小学館　昭四十七

「大和物語諸注集成」雨海博洋　桜楓社　昭五十八

新典社校注叢書5「校注大和物語」柳田忠則編　新典社　昭六十三

新編日本古典文学全集「竹取物語　伊勢物語　大和物語　平中物語」高橋正治　小学館　平六

▽研究書

「大和物語」（塙選書）高橋正治　塙書房　昭三十七

「大和物語総索引」塚原鉄雄他　笠間書院　昭四十五

「歌語りと歌物語」雨海博洋　桜楓社　昭五十一

「大和物語の注釈と研究」柿本奨　武蔵野書院　昭五十六

「大和物語の世界」尾崎左永子　書肆フローラ　平十一

▽入門書・研究案内

鑑賞日本古典文学「伊勢物語　大和物語」片桐洋一　角川書店　昭五十

研究資料日本古典文学「物語文学」久保田淳他編　明治書院　昭五十八

「大和物語研究の現段階」迫徹明　国語と国文学　昭五十四・二

「大和物語」上　下（講談社学術文庫）雨海博洋他　講談社　平十八

❊ 生徒用

新明解古典シリーズ3「伊勢物語　大和物語」桑原博史監修　三省堂　平二

新潮古典文学アルバム3「竹取物語・大和物語・宇津保物語」藤井貞和・大岡信　新潮社　平三

新編日本古典文学全集「竹取物語　伊勢物語　大和物語　平中物語」片桐洋一他　小学館　平六

「大和物語」上　下（講談社学術文庫）雨海博洋他　講談社　平十八

「心にグッとくる日本の古典2」黒澤弘光・竹内薫　NTT出版　平二十四

芥川

（第六段）

要旨

昔、身分違いの女を幾年も求婚し続けてやっと盗み出した男がいた。逃げる途中雷雨に遭い、女を蔵の中に隠すが、中にいた鬼に女を食われてしまった。男は悲しんで、「いっそ露のように私も消えてしまったらよかった。」と歌を詠んだ。これは後の二条后が入内以前に、その美貌から男に盗み出されたところ、兄たちによって連れ戻され、それを鬼の仕業だと言ったのだった。

構成

段落	ページ・行	段意
第一	初め～P五八・6〈男に問ひける。〉	ある男が、手に入れることができそうにない高貴な女を、やっとのことで盗み出し、芥川の辺りへ連れて行ったところ、女は露を見て、「あれは何か。」と尋ねた。
第二	P五八・7〈行く先多く、〉～P五九・7〈消えなましものを〉	夜が更け雷雨になったので、男は一夜明かすため女を蔵の中に入れ、自分は戸口で警護をしていた。その間、中にいた鬼が女を一口に食べてしまったが、男は雷の音で女の叫び声に気づかなかった。夜が明けて事態が分かった男は、たいそう嘆き悲しんだが、どうすることもできない思いを歌に詠んだ。
第三	P五九・8〈これは、〉～終わり	これは後に二条后となる女が、従姉妹にあたる女御のそばに仕えるようにしていたところ、その美しさから、男が盗み出して連れ出したのだが、后の兄たちが聞きつけて取り返した。それを鬼の仕業だと言ったのだった。后がまだ若く、入内前のこととか。

品詞分解と現代語訳

（表示は略号で示した。略号については略号一覧参照。）

①昔、男 | あり | けり。 ②女の | え | 得 | まじかり | ける | を、
ラ変・用 | 過・終 | 格助・同格 | 副 | ア下二・終 | 打推・用 | 過・体 | 格助・対象

年 | を | 経 | て | よばひわたり | ける | を、 | からうじて | 盗み出で
格助・経時 | 八下二・用 | 接助・単接 | ラ四・用 | 過・体 | 接助・単接 | 副 | ダ下二・用

て、 | いと | 暗き | に | 来 | けり。 ③芥川 | と | いふ | 川 | を
接助・単接 | 副 | 形ク・体 | 格助・時間 | カ変・用 | 過・終 | 格助・引用 | 八四・体 | 格助・経場

率 | て | 行き | けれ | ば、 | 草 | の | 上 | に | 置き | たり | ける
ワ上一・用 | 接助・単接 | カ四・用 | 過・已 | 接助・順偶 | 格助・体修 | 格助・場所 | カ四・用 | 存・用 | 過・体

露 | を、 | 「かれ | は | 何 | ぞ。」 | と | なむ、 | 男 | に | 問ひ
格助・対象 | 代 | 係助・提示 | 代 | 係助・強意 | 格助・引用 | 係助・強意（係） | 格助・対象 | 八四・用

けり。
過・体（結）

④行く先 | 多く、 | 夜 | も | 更け | に | けれ | ば、 | 鬼 | ある | 所
形ク・用 | 係助・同類 | カ下二・用 | 完・用 | 過・已 | 接助・順理 | ラ変・体

と | も | 知ら | で、 | 神 | さへ | いと | いみじう | 鳴り、 | 雨 | も
格助・引用 | 係助・同類 | ラ四・未 | 接助・打接 | 副助・添加 | 副 | 形シク・用（ウ音） | ラ四・用 | 係助・列挙

いたう | 降り | けれ | ば、 | あばらなる | 蔵 | に、 | 女 | を | ば
副（ウ音） | ラ四・用 | 過・已 | 接助・順理 | 形動ナリ・体 | 格助・場所

奥 | に | 押し入れ | て、 | 男、 | 弓、 | 胡籙 | を | 負ひ | て | 戸口
格助・帰着 | ラ下二・用 | 接助・単接 | 男 | 弓 | 胡籙 | 格助・対象 | 八四・用 | 接助・単接

に | を | り、 | はや | 夜 | も | 明け | なむ | と | 思ひ | つつ | ゐ
格助・場所 | ラ変・用 | 副 | 係助・強意 | カ下二・未 | 終助・他願 | 格助・引用 | 八四・用 | 接助・継続 | ワ上一・用

①昔、ある男がいた。②女で手に入れられそうもなかった人を、幾年にもわたって求婚し続けたが、やっとのことで盗み出して、とても暗い夜に（逃げて）来た。③芥川という川（のほとり）を連れて行ったところ、草の上に置いていた露を（見て）、（女は）「あれは何か。」と、男に尋ねた。

④目的地までまだ遠く、夜も更けてしまったので、鬼がいる所とも知らないで、（そのうえ）雷までもとてもひどく鳴り、雨も激しく降ったので、荒れ果ててがらんとした蔵に、女を奥のほうに押し入れて、男は、弓や、胡籙を背負って戸口にいて、早く夜が明けてほしいと思いながら腰を下ろしていたところ、鬼が、早くも一口で（女を）食べてしまった。⑤「あれえっ。」と（女は）悲鳴を上げたが、雷が鳴る

たり　ける　に、　鬼、　はや　一口　に　食ひ　て　けり。　⑤「あな
存・用　過・体　接助・単接　副　格助・手段　八四・用　完・用　過・終　感

や。」　と　言ひ　けれ　ど、　神　鳴る　騒ぎ　に、　え　聞か　ざり
間助・詠嘆　格助・引用　八四・用　過・已　接助・逆確　ラ四・体　格助・理由　副　カ四・未　打・用

けり。　⑥やうやう　夜　も　明けゆく　に、　見れ　ば、　率　て　泣け
過・終　副　係助・強意　カ四・体　接助・順理　マ上一・已　接助・順偶　ワ上一・用

て　来　し　女　も　なし。　⑦足ずり　を　し　て　泣け
接助・単接　カ変・未　過・体　係助・強意　形ク・終　格助・対象　サ変・用　接助・単接　カ四・已

ども、　かひなし。
接助・逆確　形ク・終

⑧白玉　か　何ぞ　と　人　の　問ひ　し　とき　露
係助・疑問　代　係助・疑問　格助・引用　格助・主格　八四・用　過・体

と　答へ　て　消え　な　まし　ものを
格助・引用　八下二・用　接助・単接　ヤ下二・用　強・未　不可願・体　終助・詠嘆

⑨これ　は、　二条后　の、　いとこ　の　女御　の　御もと
代　係助・提示　格助・主格　格助・体修　格助・体修

に、　つかうまつる　やう　にて　み　給へ　り
格助・場所　ラ四・体(謙)語り手→いとこの女御　格助・状態　ワ上一・用　八四・已(尊)語り手→二条后　完・用

ける　を、　かたち　の　いと　めでたく　おはし　けれ　ば、
過・体　接助・逆接　格助・主格　副　形ク・用　サ変・用(尊)語り手→二条后　過・已　接助・順理

盗み　て　負ひ　て　出で　たり　ける　を、　御兄人　堀河の大臣、
マ四・用　接助・単接　八四・用　接助・単接　ダ下二・用　完・用　過・体　格助・単接

太郎国経の大納言、　まだ　下臈　にて　内裏　へ　参り
副　格助・状態　格助・方向　ラ四・用(謙)語り手→内裏

やかましさのために、（男は）聞くことができなかった。⑥次第に夜も明けていったので、（男は蔵の奥を）見ると、連れて来た女がいない。⑦（男は）地に足をこすって（じだんだを踏んで）泣いたけれども、どうしようもない。

⑧白玉か…あれは真珠かしら、何かしら、とあの人が聞いたとき、あれは露だよ、と答えて、その露のように私も消えてしまったらよかったのに。

⑨これは、二条后が、従姉妹の女御のおそばに、（女房のようにして）お仕え申し上げるようにしていらっしゃっていたが、顔立ちがとても美しくていらっしゃったので、（男が）盗み出して背負って連れ出したところ、兄上の堀河の大臣、ご長男の国経の大納言が、まだ身分も低い者で宮中へ参上なさると、ひどく泣く人のいるのを聞きつけて、引きとどめて取り返しなさっ

給ふ　に、　いみじう　泣く　人　ある　を　聞きつけ　て、　とどめ　て　取り返し　給う　て　けり。⑩それ　を、　かく　鬼　と　は　いふ　なり　けり。まだ　いと　若う　て、　后　の　ただに　おはし　ける　とき　と　や。

八四・体（尊）語り手→基経・国経　接助・単接　形シク・用（ウ音）　カ四・体　ラ変・体　格助・対象　カ下二・用　接助・単接　マ下二・用　接助・単接　サ四・用　八四・用（ウ音）（尊）語り手→基経・国経　完・用　過・終　代　格助・対象　副　格助・引用　係助・強意　八四・体　断・用　過・終　副　副　形ク・用（ウ音）　接助・単接　格助・主格　形動ナリ・用　サ変・用（尊）語り手→二条后　過・体　格助・引用　係助・疑問

たのだった。⑩それを、このように鬼（の仕業だ）と言うのであった。まだとてもお若くて、后が（入内以前の）普通の身分でおいでだったときのことか。

学習活動のポイント

学習活動のポイント

❶「伊勢物語」について調べてきたことを発表する。知技(1)ア・(2)イ

❷主人公のモデルとされる在原業平について調べてきたことを発表する。知技(2)イ

■導入

❶予習の段階で調べる活動を取り入れることも必要である。図書館などの活用のし方を併せて指導できるとよい。歌物語というジャンルに属すること、在原業平がモデルらしいことなど、基本的なことが出てくればよい。

【評価】言葉には、文化の継承、発展、創造を支える働きがあることを理解しているか、確認する。

・古典の世界に親しむために、作品や文章の歴史的・文化的背景などを理解しているか、確認する。

❷業平については、系図を探してくることを指示する。また、百人一首の作者の一人である、程度でよい。

【評価】古典の世界に親しむために、作品や文章の歴史的・文化的背景などを理解しているか、確認する。

■展開

学習活動のポイント

❶「芥川」を音読する。思判表B(1)ア
❷重要古語の意味・用法を確認する。知技(1)ウ・(2)ウエ
→「言葉と表現」1・2
❸現代語訳し、段落ごとに内容を確認する。知技(1)エ 思判表B(1)ア
❹男と女の境遇と事件の展開とについて考える。思判表B(1)イ
→「学習のポイント」1
❺明かされた事件の真相について考える。思判表B(1)イ

❶音読は授業に入る前の体慣らしである。その授業の範囲・内容の予告であり、授業の態勢を早く作るために効果的である。毎時間音読から授業に入る。

【評価】 文章の種類を踏まえて、内容や構成、展開などについて叙述を基に的確に捉えているか、音読により、確認する。

❷重要古語は古語辞典をしっかり引いてこさせる。ここで、もう一度辞書の引き方を確認しておく。

【評価】 我が国の言語文化に特徴的な語句の量を増し、それらの文化的背景について理解を深め、語感を磨き語彙を豊かにしているか、ペーパーテストにより、確認する。

・古典の世界に親しむために、古典を読むために必要な文語のきまりや、古典特有の表現などについて理解しているか、ペーパーテストにより、確認する。

・時間の経過や地域の文化的特徴などによる文字や言葉の変化について理解を深め、古典の言葉と現代の言葉とのつながりについて理解しているか、ペーパーテストにより、確認する。

❸現代語訳は、一語一語を丁寧に押さえ、そのうえで全体の筋や内容が把握できるように工夫させる。

【評価】 文章の意味は、文脈の中で形成されることを理解しているか、現代語訳により、確認する。

・文章の種類を踏まえて、内容や構成、展開などについて叙述を基に的確に捉えているか、現代語訳により、確認する。

❹物語としての展開を読み取って行く。登場人物の人物像などは、自由に話し合わせたい。

【評価】 登場人物の行動や心情、また、古代における男と女の行動や考え方について、作品や文章に表れているものの見方、感じ方、考え方を捉え、内容を解釈しているか、感想をノートにまとめさせる、鑑賞文を書かせる、発表させるなどにより、確認する。

❺前段までの物語との整合性を確かめる。この部分の有無によって、物語の印象がどのように異なってくるか、生徒なりの評価も述べさせてみたい。

【評価】 物語の顚末について、作品や文章の成立した背景や他の作品などとの関係を踏まえ、内容の解釈を深めているか、意見発表により、確認する。

■まとめと発展

学習活動のポイント

❶「白玉か」の歌に込められた男の心情について考える。思判 表B(1)エ
→「学習のポイント」2

❷第三段落があることの効果を話し合う。主態
→「言語活動」1

❶鬼に女を奪われた男の後悔と嘆きの歌であるが、男の心情の頂点でほとばしり出た感情が歌になっていることに注意させる。歌物語はこのように、物語の軸に歌が据えられており、いわば歌が中心の筋立てになっていることを読み取らせる。話し合いをさせる場合は、少人数のほうが効果的である。

【評価】歌に詠まれた男の心情について、作品や文章の成立した背景や他の作品などとの関係を踏まえ、内容の解釈を深めているか、歌の暗唱や訳の発表などにより、確認する。

❷第三段落があるのとないのとでは物語の印象がどのように変わるかを考え、整理させる。

【評価】進んで昔の人の恋のあり方について理解し、歌物語に親しみ、副詞の呼応などについて理解し、学習課題に沿って、第三段落があることの構成上の効果について考えようとしているか、話し合いにより、分析する。

指導上の注意点と発問例

●五八ページ

問　**「女の」（2行目）の「の」を文法的に説明せよ。**

答　格助詞で同格を表す。

補　「…デ」と訳す。「の」の前と後で表現されているものが同じであることを表しており、ここは、「女」と「手に入れられそうもなかった人」とが同じ。

問　**「え得まじかりけるを」（2行目）の「え」を文法的に説明せよ。**

答　下に打消の語（この場合は「まじ」）を伴って、不可能の意味を表す副詞。

問　**「よばひわたりける」（3行目）の「わたる」を文法的に説明せよ。**

答　動詞の連用形に付いて、「（時間的に）…し続ける」、「（空間的に）一面に…する」の意を表す補助動詞。この場合は前者で、「求婚し続けた」。

問　**「盗み出でて」（3行目）とあるが、なぜそのようにしなければならなかったのか、説明せよ。**

答　女がかなり身分の高い姫君であったため、連れ去らない限り、身分に阻まれ、想いを遂げることは不可能と思われたから。

問　(1)**「率て」（5行目）**、(2)**「ゐたり」（11行**

語句の研究

●五八ページ

2昔、男ありけり　「昔」は、説話や物語文学の冒頭の常套用語。語っている現在に対してある過去の時期の意で、遠い昔の意ではない。「伊勢物語」の各段は、大部分が「昔、男ありけり。」という文で始まっている。「伊勢物語」は、この「男」を在原業平として、その歌語りを業平の一代記となるように配列した歌物語だが、題材となった歌語りの全てが業平に関わるものではない。業平は阿保親王（平城天皇の皇子）の第五子、母は伊登内親王（桓武天皇の皇女）であるから、父系・母系共に皇孫に当たる（「本朝皇胤紹運録」）。天長二（八二五）年に生まれ、翌三年在原姓を賜って臣籍に下った。仁明・文徳・清和の三帝に仕えたが、藤原氏の全盛時に当たり、その圧迫を受けた。藤原長良の娘高子（二条后）に恋したが、清和帝の后となったため、失恋して東国に流浪したと伝えられる。紀有常の娘を妻とし、有常の妹静子を母とする惟喬親王と親交し、藤原氏の圧迫による不運を慰め合った。そのことはこの物語の随所に見られる。「けり」は過去回想の助動詞で伝承回想の意。

2女のえ得まじかりけるを　「女で手に入れられそうもなかった人を」。女はかなり高貴な身分の女性。「の」は同格の格助詞。「え」は後に打消表現を伴って不可能の意を表す副詞。打消推量を表す助動詞「まじ」の連用形「まじかり」と呼応している。

3よばひわたりけるを　「求婚し続けたが」。「よばふ」は、動詞「呼ぶ」に上代の継続の助動詞「ふ」の付いたもの。「言い寄る、求婚する」。「わたる」は「ずっと…し続ける」の意を添える補助動詞。「え得まじかりける」と分かっていても、求婚し続けたところに男の思いの深さが表れている。

3からうじて　やっとのことで。ようやく。副詞「からくして」のウ音便。

4芥川　所在不明。架空の川と考えられる。現在の大阪府高槻市を流れる川という説もあるが、そうであるとすれば摂津国の歌枕。

5胡籙　矢を差して背中に負う武具。平安時代には朝廷で儀仗用などに用いられていた。平安時代末頃から衛府の随身や武士の使用していたものを指して「えびら」と呼ぶようになったものと思われる。（「日本国語大

目）のそれぞれの意味を答えよ。

問 答 (1)連れて行く　(2)座っている

問 「草の上に…問ひける。」（5行目）とあるが、女がそのように尋ねたのは、なぜか。

答 露を見たことがないほどの深窓の姫君だったから。

問 「となむ、男に」（6行目）の「なむ」と「明けなむ」（五八・11行目）の「なむ」との違いを説明せよ。

答 前者の「なむ」は強意の係助詞。後者は他に対する願望の終助詞。

補 後者は「な＋む」で二語ということも考えられるが、意味上終助詞と考える。「語句の研究」参照。

問 ◉「神」（8行目）とは、ここでは、何のことか。

補 答 雷のこと。

神は、「神鳴」すなわち「雷」のことで、人力の及ばない恐るべきものとされていたことがうかがえる。

問 「神さへ」（8行目）の「さへ」は、どのようなことの上に付け加えているか。

補 答 夜が更けてしまったこと。

ここでは雨が降ってきたそのうえに、という意味ではないことに注意する。前に延べたことに付け加えていると考えるのが自然である。男が足止めせざるを得ない状況に

辞典第二版」）

3盗み出で　「出づ」は「中から外に出す」の意を添える補助動詞。

6かれは何ぞ　女は「露」も見たことがないほどの深窓に育った人なのである。ここで、女が男に気を許していることが分かる。男は同意のうえで女を連れ出したのである。

7鬼　本来目に見えないものであるが、後には人に害を与える異形の恐ろしい怪物として想像された。一口で人を飲むとされ、この話によって、甚だしい危難に遭うことを「鬼一口」というようになったと言われる。

8神さへ　「さへ」は添加の副助詞。「夜が更けただけではなく、そのうえ雷まで」の意。たたみかけるような文のつながりが緊迫感を高めている。

11夜も明けなむ　カ行下二段動詞「明け」が未然形とも連用形とも取れるので、「なむ」が①他に対する願望の終助詞（未然形接続）なのか、②完了（強意）の助動詞「ぬ」の未然形と推量の助動詞「む」の結合体（連用形接続）なのか、形の上からは識別できない。ここは内容から判断し①と見て「夜が明けてほしい」と解すべきであろう。係助詞「も」には「雨も上がってほしい」という意も言外に込められていると考えられる。男の意識は全て外に向いている。

●五九ページ

1あなや　感動詞「あな」＋間投助詞「や」から成る感動詞。

3明けゆく　「ゆく」は「次第に…する」の意を添える補助動詞。

4率て来し　ここまで「けり」を使って述べられてきたが、ここで「率て来し」と直接体験の過去を表す助動詞「き」を使用していることに注意する。ここは男の気持ちになって述べられており、「確かに連れて来たのに」という驚きを表していると考えられる。これが次の「足ずりをして泣けども、かひなし。」という身もだえするような後悔につながり、最後の絶唱のような歌で悲しみの最高潮に至るのである。

4足ずりをして　「足ずり」は、足を地面にすりつけて、激しい悔しさ、悲しさ、もどかしさなどを表す身体的表現。

6白玉か…　「白玉か何ぞ」は草の上に置いていた露を「かれは何ぞ。」と男に聞いた、そのことを指す。露は、はかなく美しいものの象徴で、女を表す一方、女と共に逃げ

追い込まれていっていることを表している。

問 **男が戸口にいたのはなぜか。**

答 女を追手から守ろうとしたため。

補 高貴な女性を盗み出してきたのだから、当然追っ手が考えられる。外からの敵を防ごうとしただけで、中に気が回らなかったことが男の後悔を増幅することになる。

問 **[易]「明け」という形で考えられる活用形を全て答え、それぞれの活用形の場合、「なむ」はどのように解釈できるか、文法的に説明せよ。** [1]

[中]文脈に注意して、現代語訳せよ。 [2]

[中]なぜそのように思ったのか。 [3]

答 [1]・未然形の場合…他に対する願望を表す終助詞・連用形の場合…完了（強意）の助動詞＋推量の助動詞　[2]早く夜が明けてほしい　[3]雷や雨がひどく、恐ろしかったし、一刻も早く逃げたかったから。

●五九ページ

問 **「足ずりをして」（4行目）とは、どのようにしたのか。**

答 地に足をこすった。じだんだを踏んだ。

問 **「足ずりをして」（4行目）には、男のどのような心情が表れているか。**

答 何年も思い続けたうえで、やっと連れ出した、男にとってはかけがえのない女性を、うかつにも失ってしまった嘆きと悲しみ。

補 「語句の研究」参照。

問 **「白玉か」の歌（6行目）について、[易](1)「白玉か何ぞ」は、本文中のどの部分と対応しているか。**

[易](2)「人」とは誰か、本文中の語句で答えよ。

[中](3)「白玉か」（6行目）の歌には、男のどのような心情が込められているか。

答 (1)「かれは何ぞ。」　(2)女　(3)大切な女を失ってしまった悲しみと、深い絶望感。

問 **「つかうまつる」（9行目）とあるが、誰が誰に「つかうまつる」のか。**

答 女（後の二条后＝高子）が、いとこの女御（文徳天皇女御の明子）に。

補 「つかうまつる」は「仕ふ」の謙譲語で、お仕え申し上げる、お仕えする、の意味。地の文であるから、語り手からいとこの女御に対する敬意を表す。

問 **「鬼とはいふなり」（12行目）とあるが、鬼の正体は何であったのか。**

答 女（後の二条后＝高子）の兄の、堀河の大臣（基経）や太郎国経の大納言（国経）ら。

た短い夢のような時間も表している。「白玉」は真珠。「消えなましものを」は、「消えてしまえばよかったのに」の意。「なまし」は、強意（確述）の助動詞「ぬ」の未然形に、実現不可能な願望を表す助動詞「まし」が付いたもの。ここは連体形。あの瞬間に消えてしまっていたら、こんなに悲しい目には遭わなかったのに、という男の嘆きの絶唱。

7消えなましものを　消えてしまえばよかったのに。「消ゆ」は「露」の縁語。「ものを」は逆接の意を含む詠嘆の終助詞。接続助詞とする解釈もある。

8二条后　藤原長良の娘、高子。清和天皇の女御。陽成天皇の母。三段から登場し、そこでも帝に仕える以前に男に懸想されたと語られている。

むかし、男ありけり。懸想じける女のもとに、ひじき藻といふものをやるとて、

思ひあらばむぐらの宿に寝もしなむひじきものには袖をしつつも

二条の后の、まだ帝にも仕うまつりたまはで、ただ人にておはしましける時のこととなり。

8いとこの女御　藤原良房（長良の弟）の娘、

明子。文徳天皇の女御。染殿の后とも。藤原冬嗣の娘の順子が入内して文徳天皇を産んだのに続き、明子が清和天皇を産むに及び藤原氏の外戚としての地位は不動のものとなる。（「日本国語大辞典第二版」）

10御兄人　兄上たち。

13堀河の大臣　藤原基経。長良の三男で良房の養子となる。後の摂政関白太政大臣。京を流れる堀川の東に邸宅があったため「堀河の大臣」と呼ばれた。

11太郎国経の大納言　藤原国経。長良の長男。

15ただにおはしけるとき　（入内する前の）普通の身分でいらっしゃったとき。三段末尾に見える「ただ人にておはしましける時に」に相当する語り方である。（鈴木日出男「伊勢物語評解」）

鑑賞

「更級日記」の竹芝伝説や、「大和物語」第一五五段などと同様、この段も身分の高い姫君を盗んで逃げていく物語である。ここで男が恋い慕う相手は、高貴な家柄に生まれた、これまで草の上に置いた露さえも目にしたことのないような深窓の姫君だった。男は姫君を連れ去ることで、身分に阻まれ、かなわなかった長年の想いを遂げようとしたが、途中雷雨をしのぐために立ち寄った蔵で、そこに棲みついていた鬼に姫君を食べられてしまう。こうした不条理とも言える展開が、姫君の不在を知った男の姿をいっそう悲痛なものに見せている。ところで、「白玉か」の歌がもともと業平の歌であったとする確証はない。「新古今和歌集」では、哀傷部に業平の歌として載っているが、それは「伊勢物語」を資料としているのだろう。本来、別人による恋の歌の可能性もあり、「白玉か何ぞ」というのは、露ではなく涙を歌ったものかもしれない。たまたまこうした略奪婚的な話と結び付いて伝えられているから、我々はそれにのっとった解釈をするわけだが、「伊勢物語」の理解としては、もちろんそれでよいのであろう。姫君を失い、一人残されたことに気づいたとき、今度は「消えなましものを」と自らの死を望む、そうした男の深い悲しみと、いまだ尽きぬ恋心とを、この歌から読み取るべきである。

この話には、後日談がある。女は二条后藤原高子で、その兄弟が取り戻したのを鬼と言ったのだ、とある。一種の付会の説で後人のものと思われる。現実の二条后と業平との間に、物語に語られるような恋愛関係があったかどうかさえ、かなり疑わしいのである。しかし、現存する「伊勢物語」は本話のように、業平らしき男と二条后との間の交渉とその後日談を語る話が、三・四・五・二十六・二十九・六十五・七十六・百・百六段にまで及んでおり、物語の軸の一つであるかのようになっている。仮に「古今和歌集」の時代から二人の恋があたかも真実であるかのように伝えられていたにしても、本話に後段部分が加わっていることをまるで興醒めだとみるか、悲劇に真実味を与えているとみるかは意見の分かれるところであろう。「白玉か」の歌の解釈も含め、多面的な鑑賞の可能性を有する奥深さも本話の魅力なのである。

《板書例》　話の展開

男―長年求婚
女―高貴な身分
盗み出す
激しい雷雨の中・雨宿り（女、蔵の中）
女―鬼に食われる
男―悲嘆に暮れ、歌を詠む
白玉か…

事件の真相
女―入内前の二条后
鬼―二条后の兄たち
連れ戻される

《板書例》「白玉か」の歌

- 女を失った絶望感
- 昨日の女の問いに答えなかった悔い

深い学びのために

学習のポイントの解答例

1 **「かれは何ぞ。」（五八・6）とあるが、この言葉から女がどのような身分であるか、考えてみよう。**

【答】 高貴な身分。

▼ポイント▲ 高貴な身分で、外に、まして闇夜に出ることなどないので、川辺の草の上に降りた露が何かも分からないのである。

2 **「白玉か」の歌には、男のどのような心情が込められているか、話し合ってみよう。**

【答】 大事にしていた女は消えてしまった、いっそ私も消えてしまったらよかったのに、という女に対する限りない恋心から、それを失ってしまった悲しみ、深い絶望感が、そこには感じられる。

▼ポイント▲ 「あの白く光るのは何。」と女に問いかけられたとき、男は追っ手から逃げるのに必死で答えるような余裕はなかった。しかし、女を失った今、そのようなやりとりですらもう望めなくなってしまったことを痛感し、女と一緒にいたあの瞬間に戻って、幸せな状態のときに、露が消えるのと同じように死んでしまえばこんな悲しみを味わうことはなかったのにと思う。「露」が、ここでは、一つのキーワードになっており、はかなさの象徴となっている。これは、結局手に入れることのできなかった女を表すと同時に、女と共に逃げた夢のような短い時間も表していると言える。なお、地の文ではあるが、「足ずりをして泣けども、かひなし。」の部分にも男の心情が示されており、参考になる。

3 **各段落の内容を簡潔に説明してみよう。**

【答】
・第一段落（初め～〈男に問ひける。〉）
ある男が、手に入れることができそうにない高貴な女を、やっとのことで盗み出し、芥川の辺りへ連れて行ったところ、女は露を見て、「あれは何か。」と尋ねた。
・第二段落（〈行く先多く、〉～〈消えなましものを〉）
夜が更け雷雨になったので、男は一夜明かすため女を蔵の中に入れ、自分は戸口で警護をしていた。その間、中にいた鬼が女を一口に食べてしまったが、男は雷の音で女の叫び声に気づかなかった。夜が明けて事態が分かった男は、たいそう嘆き悲しんだが、どうすることもできない思いを歌に詠んだ。
・第三段落（〈これは、〉～終わり）
これは後に二条后となる女が、従姉妹にあたる女御のそばに仕えるようにしていたところ、その美しさから、男が盗み出して連れ出したのだが、后の兄たちが聞きつけて取り返した。それを鬼の仕業だと言ったのだった。后がまだ若く、入内前のこととか。

言葉と表現の解答例

1 **次の傍線部「なむ」を、それぞれ文法的に説明してみよう。**

(1)「かれは何ぞ。」となむ、男に問ひける。（五八・6）

(2) はや夜も明けなむと思ひつつ居たりけるに（五八・11～五九・1）

【答】 (1) 係助詞（強意）　(2) 終助詞（他に対する願望）

▼ポイント▲ (1)「なむ」が直前の語「かれは何ぞ。」を強調している。結びの語は「ける」。(2)識別については、「語句の研究」参照。

2 **本文中から、副詞の呼応を用いた表現を、二か所指摘してみよう。**

【答】 え得まじかりける（五八・2）、え聞かざりけり（五九・2～3）

▼ポイント▲ どちらも副詞「え」と打消の語の呼応で、それぞれ「…できそうにない」「…できない」と訳す。

言語活動の解答例

1 **第三段落（五九・8～13）があることによって、どのような効果があるか、話し合ってみよう。**

（意図）一話の物語として評価したとき、第三段落があるのとないのとでは、物語全体の印象がどのように変わり得るのか考え、整理することで、「伊勢物語」の鑑賞を豊かにする観点を共有し、今後の参考にできるようにする。

（手順）

1　物語の展開を踏まえ、悲恋に終わった原因について考える。

二人の恋の成就を阻んだものが異なることを確かめる。鬼であれば、人知の及ばぬところからの不条理な横槍であるが、兄たちであるとすれば、権勢を握る藤原氏の政治的な目論見ということになる。

2　第三段落があることによって明確になったことを明らかにする。

鬼の仕業にしてしまうよりも物語の真実味が増すという効果を指摘する声も多く聞かれようが、むしろ平安京の怪異譚としてあった方がよいという向きもあるかもしれない。女が後の二条后であったとなると、主人公に擬せられる業平の出自から、藤原氏の専横とそれに抗う存在としての男という構図も見えてきて、恋する二人がロミオとジュリエットのようにも映るだろう。もちろん第三段落ありの姿こそが物語の真の姿であるかのような誤解を与

えることなく、多様な意見を求めたい。

（ゴール）現存「伊勢物語」が、業平の歌語りから様々な曲折を経て成立していることを理解するためのきっかけとなるような意見交換の場となれば成功であろう。現実の業平と高子には十七才もの年齢差があるわけであるが、たとえばそうしたことをはじめとした背景事情への関心がより高められたり、あるいは「白玉か」の歌に戻って、歌の詠まれた事情や解釈についてあらためて考えてみたくなるようなまとめ方ができるよう工夫したい。

（上野　正史）

東下り

（第九段）

要旨

昔、都を捨てて友人とともに東国に下った男がいた。その旅の途中、三河の国八橋、駿河の国宇津の山、武蔵の国隅田川などで、旅情や都の人への思慕の念を歌に託して詠んだ。

構成

段落	ページ・行	段意
第一	初め～P六一・11〈ほとびにけり。〉	ある男が、安住の地を求めて東国に旅立ち、やっと三河の国の八橋にまでたどり着いた。そこで「かきつばた」の折句に旅情を託して詠み、一行も同じ思いに泣いた。
第二	P六一・12〈行き行きて〉～P六二・7〈塩尻のやうになむありける。〉	さらに東へ進み、駿河の国の宇津の山を越えてゆくとき、修行者に出会い、それに都への文を言づけた。また、初めて見る富士山に驚き、歌に詠んだ。
第三	P六二・8〈なほ行き行きて〉～終わり	さらに進んで隅田川に着いた。舟に乗るときに都鳥を見て、いよいよ都を恋しく思うあまり歌を詠んだ。一行も同じ思いに泣いた。

品詞分解と現代語訳

（表示は略号で示した。略号については略号一覧参照。）

①昔（むかし）、男（をとこ）　あり　けり。　②その　男（をとこ）、　身（み）を　要（えう）なき　ものに

ラ変・用｜過・終　　代　　格助・体修　　格助・対象　　形ク・体　　格助・資格

①昔、ある男がいた。②その男は、我が身を必要のない人間と思い込んで、

思ひなして、京には、あらじ、東の方に
サ四・用｜接助・単接｜格助・場所｜係助・区別｜ラ変・未｜打意・終｜格助・体修｜格助・方向

住むべき国求めにとて行きけり。③もとより友と
マ四・終｜適・体｜マ下二・用｜格助・目的｜格助・引用｜カ四・用｜過・終｜副｜格助・資格

する人、ひとりふたりして行きけり。④道知れる人も
サ変・体｜格助・相手｜カ四・用｜過・終｜ラ四・已｜存・体｜係助・同類

なくて、惑ひ行きけり。⑤三河の国八橋といふ所に
形ク・用｜接助・理由｜カ四・用｜過・終｜格助・引用｜八四・体｜格助・帰着

至りぬ。⑥そこを八橋といひける は、水行く川
ラ四・用｜完・終｜代｜格助・対象｜格助・引用｜八四・用｜過・体｜係助・提示｜カ四・体

の蜘蛛手なれば、橋を八つ渡せる に より
格助・主格｜断・已｜接助・順理｜格助・対象｜サ四・已｜存・体｜格助・対象｜ラ四・用

て なむ、八橋と いひける。⑦その沢のほと
接助・単接｜係助・強意(係)｜格助・引用｜八四・用｜過・体(結)｜代｜格助・体修

りの木の陰に下りゐて、乾飯食ひけり。
格助・体修｜格助・場所｜ラ上二・用｜ワ上二・用｜接助・単接｜八四・用｜過・終

⑧その沢に、かきつばた いと おもしろく 咲きたり。⑨それ
代｜格助・体修｜格助・場所｜副｜形ク・用｜カ四・用｜存・終｜代

を見て、ある人の いはく、「かきつばた、と いふ
格助・対象｜マ上一・用｜接助・単接 連｜格助・主格｜格助・引用｜八四・体

五文字を句の上に据ゑて、旅の心を
格助・対象｜格助・体修｜格助・場所｜ワ下二・用｜接助・単接｜格助・体修｜格助・対象

詠め。」と言ひければ、詠める。
マ四・命｜格助・引用｜八四・用｜過・已｜接助・順理｜マ四・已｜完・体

都にはいるまい、東国の方に住むのによい国を探しに（行こう）と考えて出かけて行った。③以前から友としている人、一人二人とともに行った。④道を知っている人もいなくて、迷いながら行った。⑤三河の国の八橋という所に着いた。⑥そこを八橋といったのは、水の流れる川が蜘蛛の足のように（幾筋にも）分かれているので、橋を八つ渡してあることによって、八橋というのであった。⑦その沢のほとりの木の陰に（馬から）下りて座って、乾飯を食べた。⑧その沢に、かきつばたがとても美しく咲いている。⑨それを見て、ある人が言うことには、「かきつばた、という五文字を和歌の各句の頭に置いて、旅の心を詠め。」と言ったので、（男が）詠んだ（歌）。

⑩から衣　着　つつ　なれ　に　し　つま　し　あれ　ば
（枕）　カ上一・用　接助・反復　ラ下二・用　完・用　過・体　副助・強意　ラ変・已　接助・順接

はるばる　き　ぬる　旅　を　し　ぞ　思ふ
副　カ変・用　完・体　格助・対象　副助・強意　係助・強意（係）　八四・体（結）

と　詠め　り　けれ　ば、　みな人、　乾飯　の　上　に　涙
格助・引用　マ四・已　完・用　過・已　接助・順接　格助・体修　格助・場所

落とし　て、　ほとび　に　けり。
サ四・用　接助・理由　バ上二・用　完・用　過・終

⑪行き　行き　て、　駿河の国　に　至り　ぬ。　⑫宇津の山　に
カ四・用　カ四・用　接助・単接　格助・帰着　ラ四・用　完・終　格助・帰着

至り　て、　わが　入ら　む　と　する　道　は、　いと
ラ四・用　接助・単接　代　格助・主格　ラ四・未　意・終　格助・引用　サ変・体　係助・提示　副

暗う　細き　に、　蔦、楓　は　茂り、　もの心細く、　すずろなる　め
形ク・用（ウ音）　形ク・体　格助・添加　係助・提示　ラ四・用　形ク・用　形動ナリ・体

を　見る　こと　と　思ふ　に、　修行者　会ひ　たり。　⑬「かかる
格助・対象　マ上一・体　格助・引用　八四・体　接助・単接　八四・用　完・終　連

道　は、　いかで　か　いまする。」　と　言ふ　を　見れ
係助・区別　副　係助・疑問（係）　サ変・体（結）（尊）修行者→男　格助・引用　八四・体　格助・対象　マ上一・已

ば、　見　し　人　なり　けり。　⑭京　に、　その　人　の
接助・順偶　マ上一・用　過・体　断・用　詠・終　格助・場所　代　格助・体修

御もと　に　とて、　文　書き　て　つく。
格助・対象　格助・引用　カ四・用　接助・単接　カ下二・終

⑮駿河　なる　宇津の山べ　の　うつつ　に　も　夢　に
格助・対象　在・体　格助・体修　格助・場所　係助・列挙　格助・場所

⑩から衣…衣服が着ているうちに萎れるように、馴れ親しんだ妻が（都に残って）いるので、はるかに遠くまでやって来た旅をしみじみと思うことだ。

と詠んだので、皆、乾飯の上に涙を落として、（乾飯が、水にもどす必要のないほどに）ふやけてしまった。

⑪どんどん進んで行って、駿河の国に着いた。⑫宇津の山に着いて、自分が分け入って行こうとする道は、とても暗く細いうえに、蔦や、楓が茂り、何となく心細く、思いがけなくつらい目に遭うことだと思っていると、修行者が（この男たちに）出会った。⑬「このような道に、どうしていらっしゃるのですか。」と言う修行者を見ると、（都で）見知った人であったよ。⑭都に、あの恋しい人のお手もとにと思って、手紙を書いて（修行者に）言づけた。

⑮駿河なる…私は駿河の国にある宇津の山に着いたが、「うつ」と

も　人に　あはぬ　なり　けり
係助・列挙　格助・対象　八四・未　打・体　断・用　詠・終

⑯富士の山を　見れ　ば、　五月の　つごもり　に、　雪
格助・対象　マ上一・已　接助・順偶　格助・体修　格助・時間

いと　白う　降れ　り。
副　形ク・用(ウ音)　ラ四・已　存・終

⑰時　知ら　ぬ　山は　富士の嶺　いつ　とて　か　鹿の子まだ
ラ四・未　打・体　係助・提示　代　格助・引用　係助・疑問(係)

ら　に　雪の　降る　らむ
格助・状態　格助・主格　ラ四・終　現原推・体(結)

⑱その　山は、　ここ　に　たとへ　ば、　比叡の山を
代　格助・体修　係助・提示　代　格助・場所　八下二・未　接助・順仮　格助・対象

二十　ばかり　重ね上げ　たら　む　ほど　して、　なり　は　塩尻の
副助・程度　ガ下二・用　完・未　婉・体　格助・手段　係助・区別　格助・体修

やうに　なむ　あり　ける。
比・用　係助・強意(係)　補動・ラ変・用　過・体(結)

⑲なほ　行き　行き　て、　武蔵の国と　下総の国と　の　中
副　カ四・用　カ四・用　接助・単接　格助・並列　格助・並列　格助・体修

に、　いと　大きなる　川　あり。　⑳それ　を　すみだ川と　いふ。
格助・場所　副　形動ナリ・体　ラ変・終　代　格助・対象　格助・引用　八四・終

㉑その　川の　ほとり　に　群れゐ　て、　思ひやれ　ば、
代　格助・体修　格助・場所　ワ上一・用　接助・単接　ラ四・已　接助・順偶

限りなく　遠く　も　来　に　ける　かな、　と　わび合へ　る
形ク・用　形ク・用　係助・強意　カ変・用　完・用　詠・体　終助・詠嘆　格助・引用　八四・已　存・体

名の付く現にも夢にもあなたに逢わないことだなあ（もうあなたは私のことは思っていてくれないのだろうか）。

⑯富士山を見ると、五月の末に、雪がとても白く降り積もっている。

⑰時知らぬ…時節をわきまえない山は富士山だ。いったい今をいつと思って、あんなに鹿の子まだらに雪が降り積もっているのだろう。

⑱その山は、都で例えるならば、比叡山を二十ほど積み上げたくらいの高さで、形は塩尻のようであった。

⑲さらにどんどん進んで行って、武蔵の国と下総の国との間に（来ると）、とても大きな川がある。⑳それを隅田川という。㉑その川のほとりに集まって腰を下ろして、（都を旅立ってからの日数・行程を）思いやると、途方もなく遠くまでやって来たものだなあ、と互いに嘆き合っていると、渡し守が、

に、　渡し守、「はや　舟に　乗れ。日も　暮れ　ぬ。」と
接助・単接　副　格助・対象　ラ四・命　係助・同類　ラ下二・用　強・終　格助・引用

言ふ　に、　乗り　て　渡ら　む　と　する　に、　みな人
八四・体　接助・順理　ラ四・用　接助・単接　ラ四・未　意・終　格助・引用　サ変・体　接助・逆確

ものわびしく　て、　京　に　思ふ　人　なき　に　しも　あら　ず。
形シク・用　接助・単接　格助・場所　八四・体　形ク・体　断・用　副助・強意　補動・ラ変・未　打・終

㉒さる　折　しも、白き　鳥　の、嘴　と　脚　と　赤き、鴫
連　副助・強意　形ク・体　格助・同格　格助・並列　格助・並列　形ク・体

の　大きさ　なる、水　の　上　に　遊び　つつ　魚　を
格助・体修　断・体　格助・体修　格助・場所　バ四・用　接助・反復　格助・対象

食ふ。㉓京　に　は　見え　ぬ　鳥　なれ　ば、みな人　見知ら
八四・終　格助・場所　係助・区別　ヤ下二・未　打・体　断・已　接助・順理　ラ四・未

ず。㉔渡し守　に　問ひ　けれ　ば、「これ　なむ　都鳥。」と
打・終　格助・対象　八四・用　過・已　接助・順偶　代　係助・強意　格助・引用

言ふ　を　聞き　て、
八四・体　格助・対象　カ四・用　接助・単接

㉕名　に　し　負はば　いざ　言問はむ　都鳥　わが
格助・資格　副助・強意　八四・未　接助・順仮　感　八四・未　意・終　代　格助・主格

思ふ　人　は　あり　や　なし　や　と
八四・体　係助・提示　ラ変・終　係助・疑問　形ク・終　係助・疑問　格助・引用

と　詠め　り　けれ　ば、　舟　こぞり　て　泣き　に　けり。
格助・引用　マ四・已　完・用　過・已　接助・順理　ラ四・用　接助・単接　カ四・用　完・用　過・終

「早く舟に乗れ。日も暮れてしまう。」と言うので、（舟に）乗って（川を）渡ろうとするのだが、皆は何となく悲しくて、（それは）都に恋しく思う人がいないわけでもない（からであった）。㉒ちょうどそのとき、白い鳥で、嘴と脚とが赤い、鴫の大きさである鳥が、水の上に動き回って魚を食っている。㉓都では見かけない鳥であるので、皆見て分からない。㉔渡し守に聞くと、「これが都鳥だよ。」と言うのを聞いて、

㉕名にし負はば…都鳥という名にふさわしいのならば、さあ尋ねてみよう、都鳥よ。私が恋しいと思う人は無事でいるかどうかと。

と詠んだので、舟の中の人は皆泣いてしまった。

学習活動のポイント

学習活動のポイント

❶「東下り」を音読する。思判表B(1)ア

❷重要古語の意味・用法を確認する。知技(1)ウ・(2)ウ

↓「言葉と表現」1

❸現代語訳し、段落ごとに内容を確認する。知技(1)エ・(2)イ 思判表B(1)イ

↓「学習のポイント」1

❹「から衣」「駿河なる」の歌の修辞を確認する。知技(1)アオ・(2)エ

展開

❶最初に全文を通して音読する。教科書表紙見返しの国名地図によって、一行の通行した国々を確認する。国名と都道府県名との対比は、古文学習のうえで必要な知識となる。

【評価】歌を中心とする物語の構成を踏まえて、場面を追って、内容や構成、展開などについて叙述を基に的確に捉えているか、音読により、確認する。

❷重要古語のうち、「八橋」「かきつばた」「都鳥」などは図版での提示がよい。教科書の図版、写真を活用されたい。

【評価】我が国の言語文化に特徴的な語句の量を増し、それらの文化的背景について理解を深め、語感を磨き語彙を豊かにしているか、ペーパーテストにより、確認する。

・古典の世界に親しむために、古典を読むために必要な文語のきまりや、古典特有の表現などについて理解しているか、ペーパーテストにより、確認する。

❸現代語訳は、一語一語を丁寧に押さえながら全体の筋や内容が把握できるように工夫させ、そのうえで、物語としての展開を読み取っていく。

【評価】文章の意味は、文脈の中で形成されることを理解しているか、現代語訳により、確認する。

・古典の世界に親しむために、作品や文章の歴史的・文化的背景などを理解しているか、ペーパーテストにより、確認する。

・登場人物の行動や心情について、また、夢についての古人のものの考え方が理解できたか、感想をノートにまとめさせて発表させることにより、確認する。

❹和歌の修辞は、教科書の脚注を活用する。また、詩歌編の和歌の学習と関連をもたせられるとよい。

【評価】言葉には、文化の継承、発展、創造を支える働きがあることを理解しているか、確認する。

・枕詞や序詞、掛詞、縁語などの我が国の言語文化に特徴的な表現の技法とその効果について理解しているか、確認する。

・時間の経過による文字や言葉の変化について理解を深め、古典の言葉と現代の言葉とのつながりについて理解しているか、

確認する。

■ まとめと発展

学習活動のポイント

❶「から衣」「駿河なる」「名にし負はば」の三首の歌に共通する心情を順を追って考える。思判表B(1)エ 主態

→「言語活動」1

❶三首を並べてみて、それぞれに共通して読み込まれているものを探し出す。「つま」や「人」が出てくるわけだが、それらがどのような状況のもとに、男の胸に浮かんできたかを考えさせる。行く先々での情景に触発されて、男の心は「都」とつながっていくことを読み取らせる。

【評価】作品や文章の成立した背景や他の作品などとの関係を踏まえ、内容の解釈を深めているか、折句などの表現技巧、詠まれている男の心情などの理解を深め十分に鑑賞できたかを、歌についての感想を書かせることにより、確認する。

・進んで昔の人の恋のあり方について理解し、歌物語に親しみ、「ば」の用法を理解し、学習課題に沿って、「から衣」「駿河なる」「名にし負はば」の三首の和歌に共通する人物の心情を考えようとしているか、分析する。

指導上の注意点と発問例

● 六〇ページ

問 **男が都を離れて旅立つ理由について、**
[中]**本文に即して説明せよ。** [易]**本文中から抜き出せ。** 1 2

答 2 1自分を必要のない人間だと思い、別の場所でやり直そうと考えたから。2身を要なきものに思ひなして

問 **「身を要なきものに思ひなして」（11行目）について、**
[中]**「思ひなす」の「なす」を文法的に説明せよ。** 1
[難]**「思ひなして」には、男のどのような心情が表れているか。** 2
[中]**どのように思ったというのか。** 3

答 3 1動詞の連用形に付いて、意識的、作為的にする意を添える補助動詞。2そう思う必要はないのに、「あえて思う」という意識的、作為的な心情が表れている。3自分を必要のない人間と思った。

補 自分自身をそのように見なすデカダンスの気分をたたえている。物語としては配列上、「芥川」で盗み出そうとした女性に失恋したため、都にいても仕方がないと思ったような編まれ方になっているが、官人として行き詰まりを感じた、などと諸説ある。

語句の研究

● 六〇ページ

11昔、男ありけり　「昔」は、説話や物語の冒頭の常套用語。「宇治拾遺物語」「竹取物語」などでは「今は昔」という語句であった。この段の「男」も在原業平のことだとされる。藤原長良の娘高子（二条后）との恋に破れて東国に流浪したと伝えられ、「東下り」はその折のことだと説かれる。物語の配列的に失恋が原因ととれるようになっているが、行く先々で都に残した恋しい人のことを歌に詠んでいるので、失恋を原因とするのはおかしいとして、官人としての挫折感からとする説もある（片桐洋一）。「けり」は伝承回想の過去の意。

11身を要なきものに　「要」は原文「えう」。異本のように「ようなきもの」であれば「用」の意となる。また一説「益」「役」の意とするが、それには仮名遣いが「やう」とあるべきである。「に」は直後の「思ひなす」という知覚動詞の内容を表す格助詞。

11思ひなして　「なす」は意識的、作為的にする意を表す補助動詞。「思ひなす」は、あえてそう思ってしまう気持ちを表す。「思い込む、決めつける」。

11京にはあらじ　「には」は場所を表す格助詞「に」に、係助詞「は」が付いて強調している連語。

12求めにとて行きけり　「求めに」は「求めに（行かむ）」の意。「とて」は「京にはあらじ、東の方に住むべき国求めに」を受ける。

12もとより　「もちろん」の意であれば「ひとりふたりして行きけり」に掛かる。男がたった一人で行ったのではなく、連れがいたのはもちろんだということになる。「以前から」の意であれば「友とする」に掛かる。自分を必要のない人間だとする失意の中で都を後にするのに、「もちろん数人で」では不自然なので、ここは「以前から」の意とみるほうが妥当であろう。

12ひとりふたりして　「して」はサ変動詞「す」の連用形「し」に接続助詞の「て」が付いて一語化したもの。「す」はもともと他の動詞の意を含んで用いられることの多い動詞であるが、「て」と結び付いて次第に動作性を失い、「して」の形で格助詞および接続助詞となった。ここでは格助詞で、動作を共にする相手を表す用法。

問「東の方」（11行目）の「東」はどこを指すか、「京」（11行目）と対比させて具体的に説明せよ。

答 京から見て東の方角の意で、逢坂の関（現在の滋賀県と京都府の境にあった関所）より東の地方を指す。一般に「東国」とも言い、関東地方、長野県方面をも指す。

問「東の方に住むべき国求めに」（11～12行目）の後に省略されている表現は何か。

補答 行かむ。
省略される部分はおおよそパターンが決まっていることに気づかせる。普通は前後に同様の表現があって、省略しても想像がつく述語を省略する。

問「住むべき国」（12行目）とは、男にとってどのような所か。

答「住むにふさわしい土地」。すなわち傷心の男の気持ちを癒してくれるような別の土地。

補「身を要なきものに思ひなして」に注意させる。「要なきもの」でも受け入れてくれる土地である。

問「とて」（12行目）で受けている部分は、どこからどこまでか。

答 京にはあらじ、東の方に住むべき国求めに

問「もとより」（12行目）を「もちろん」と考えた場合と、「もとから」と考えた場合とで修飾関係はどのように変わるか。

答「もちろん」の場合は「ひとりふたりして行きけり」に掛かり、「もちろん一人ではなく」の意になり、「もとから」の場合は「友とする」に掛かって、「もとから友人であった」の意となる。

● 六一ページ

問「おもしろく咲きたり。」（3行目）とは、どのように咲いているのか。

答 美しく咲いている。

問「句の上に据ゑて」（5行目）とは、具体的にどのようにすることか。

答「かきつばた」という言葉を五七五七七のそれぞれの最初の一字に詠み込むこと。

問 右のようにして詠むことを何と言うか。

答 折句。「語句の研究」参照。

問答「から衣」（8行目）の歌に見られる修辞上の技巧をあげよ。

答 折句・枕詞・序詞・掛詞・縁語。

補 以上の修辞を駆使して、しかも即興で詠んだというところが手柄となっている。

問「はるばるきぬる旅をしぞ思ふ」（9行目）とあるが、旅をどのように思ったのか。

答 つらく悲しいものと思った。

問答「から衣」の歌に「みな人」（10行目）が「涙落とし」（10行目）たのはなぜか。

答 技巧のすばらしさもさることながら、都を遠く離れて望郷の念を詠んだその歌の内容

---

13 三河の国　現在の愛知県の東部。「三川」、「参河」とも表記する。

13 八橋　愛知県知立市内に、八橋山無量寿寺など、その遺構とされる所が数か所ある。

14 水行く川の蜘蛛手　ここでは、川が幾筋にも流れているさま。「蜻蛉日記」下巻に、「帰るさの蜘蛛手はいづこ八橋をふみみてきとも何頼むらむ」という歌がある。

● 六一ページ

2 乾飯　携帯に便利なように一度炊いた飯を干して乾燥させた飯。干し飯。乾飯でなくても、旅行用の糧食をこのように言った。この場合は後に「ほとびにけり」とあるから、乾飯だったと分かる。

3 かきつばた　アヤメ科の多年草。燕子花。杜若。花弁が燕の尾に似て長くしなやか。池沼や湿地に生じ、夏、紅や紫・白などの花を咲かせる。あやめに似ているが花も葉もあやめより大型。「万葉集」などでは美しい恋人を表す比喩として詠われている。

5 句の上に据ゑて　短歌の五七五七七のそれぞれの句頭に「か・き・つ・は・た」の五文字を置いて詠み込むこと。このような修辞技法を「折句」という。「古今和歌集」（巻十・物名）に「朱雀院の女郎花合の時

に共感したため。

補 技巧的に工夫されていることもあって、感情的に抑えられているものの、そこに詠み込まれた都にいる恋しい人への思いが、目の前のかきつばたと相まって、同じように恋しい人を都に残してきている人々の涙を誘ったと言える。「歌の力」というものの一つの姿である。

問 **「ほとびにけり」（11行目）は、何が、どうなったのか。**

答 食べるために取り出していた乾飯が、人々の涙で濡れてふやけてしまったこと。

問 **「行き行きて」（12行目）と「行く」という動詞を二つ重ねて用いた効果を述べよ。**

答 同じ動詞の連用形を重ねることで継続・進行の意味を表している。

補 どんどん行くという意味で、「行く」の強調になっている。男が都を恋しく思いつつも、それでも進んで行く様子がうかがえる。

問 **「いと暗う細きに…」（14行目）以下に描写された道は、どのような様子か。**

答 道の両側から樹木の茂った森が迫っている様子。

問 (1)**「いと暗う細きに」（14行目）と、(2)「すずろなるめを見ることと思ふに」（15行目）の「に」について、**

A(1)と(2)の「に」の違いを文法的に説明せに、をみなへしといふ五文字を句のかしらにおきてよめる」として「をぐら山みねたちならしなく鹿のへにけむ秋をしる人ぞなき」という紀貫之の歌がある。このような「折句」の一種には、各句の初めと終わりに事物の名や語句を詠み込む「沓冠（くつかむり）」と呼ばれる複雑なものもある。「合薫物（あはせたきもの）すこし」という言葉を詠み込んだ「あふさかもはてはゆきのせきもゐずだづねてとひこきなばかへさじ（逢坂もはては往来の関もゐず尋ねて訪ひこ来なば帰さじ）」（「栄花物語」巻一・月の宴）という例などがある。

8から衣…　この歌には次のような修辞上の技巧が施されている。(ア)折句＝短歌の、五七五七七のそれぞれの句頭に「か・き・つ・は・た」の五文字を置いている。(イ)枕詞＝「から衣」は「着」の枕詞。(ウ)序詞＝「から衣着つつ」は「衣服が、着ているうちにのりが柔かくなって、身体になじんでくる」意の「褻（なれ）」の序詞。(エ)掛詞＝「なれ」は、馴れと褻れ、「つま」は、妻と着物のへりの部分を表す褄、「はるばる」は、遥々と張る張る、「き」は、来と着。(オ)縁語＝「褻れ」「褄」「張る」「着」は「衣」の縁語。身につけて徐々に身体になじんでいく衣で、身近に慣れ親しんだ妻（恋人）やその温もりを表現し、そこに美しい恋人を表す「かきつばた」を詠み込んでいる。

11ほとびにけり　「乾飯」が、人々の落とした涙によって、水気を含んでやわらかくなったことを言う。乾飯は、食べるとき水でふやけさせるのだが、ここでは、涙でちょうどよい具合にふやけたという洒落。

12駿河の国　現在の静岡県の中・東部。「伊勢物語」の異本の一つ、小式部内侍本には、「駿河の国宇津の山口にいたりて」とある。

12宇津の山　現在の静岡県藤枝市と静岡市との境にある宇津ノ谷峠。「平治物語」にもその名が見える。

14いと暗う細きに　「いと暗う細きに」「すずろなるめを見ることと思ふに」の二つの「に」は、前者が添加の意の格助詞で、「暗く細いだけでも心細いのに、そのうえ、蔦、楓までも茂っていて、いっそう心細い」という意を表している。後者は、単純接続の接続助詞で、「すずろなるめを見る（思いがけなくつらい目に遭う）ことだと思っていると」の意。

● 六二ページ

1修行者会ひたり　「修行者に会ひたり」と

よ。

答 B(1)と(2)をそれぞれ現代語訳せよ。
A(1)添加の意の格助詞　(2)単純接続の接続助詞　B(1)道が暗く狭いうえ、(蔦、楓までも茂っていて)　(2)思いがけなくつらい目に遭うことだと思っていると

問 「すずろなるめを見る」(15行目)とは、どのようなことか。

答 思いがけなくつらい目に遭うこと。

問 「修行者」と「会ひたり」(1行目)は、文法的にどのような関係にあるか。

答 「修行者」が主語、「会ひたり」が述語。

補 古典では、人に偶然会ったときには、相手を主体にして表現した。

●六二ページ

問 「かかる」(1行目)は、本文中のどの部分を受けているか。

答 いと暗う細きに、蔦、楓は茂り

問 「かかる道」(1行目)とはどのような所か。

答 「かかる」は、具体的には「いと暗う細きに、蔦、楓は茂り」を受け、都から離れた「もの心細」い山道。

補 「修行者」にとっては思いがけない出会いであった。その気持ちが「このような」という語として表れている。

問 「言ふを見れば」(1行目)の(1)「言ふ」、(2)「見れば」の主語は、それぞれ誰か。

答 (1)「言ふ」　(2)男

問 ●「その人」(2行目)とは、男にとってどのような人か。

答 都に残してきた恋しい人。

問 四首ある歌のうち、「その人」(2行目)のことを詠んだ歌の初句をあげ、それぞれ歌の中で「その人」を何と呼んでいるか答えよ。

答 「から衣」＝つま　「駿河なる」＝人　「名にし負はば」＝わが思ふ人

問 「駿河なる」(3行目)の歌に用いられている修辞上の技巧を説明せよ。

答 「駿河なる宇津の山べの」は、「宇津」と「うつつ」の同音を利用して、「うつつ」を導く序詞になっている。

問 「うつつにも」(3行目)を受けるのはどの文節か。

答 あはぬなりけり

補 「うつつ」は現実。遠く旅をしてきた今、現実に会えないのは当然としても、「夢ですらも」と続く。

問 「うつつにも夢にも人にあはぬなりけり」に込められた心情は、どのようなものか。

答 恋しく思う人がすでに自分のことを忘れてしまったのではないかと嘆く心情。

問 なぜ前問のような心情であると言えるのか。

答 当時、夢の中に登場する人は自分のことをしがちだが、「に」を省略する例はないというのが通説なので、「修行者」が主語で、「会ひたり」が述語。人に予期せず偶然会ったときは、相手を「主」とする言い方をして、相手を強く意識した心情を表現した。例として、「(倭建命が)その山に登りましときに、白き猪、山の辺に会へり」(古事記)など。「修行者」は回国修行の行者。仏道修行のため、諸国を巡礼した。

1かかる道は、いかでかいまする　「は」は他と区別して取り立てて強調する意の係助詞。ここでは、修行者の意識に、「こんな辺鄙な道にどうしてこんなお方が」という気持ちがあって、「かかる道」を初めに出したのである。「いまする」という尊敬語を用いていることから、男は高貴の人で、東下りなどする人ではないはずだという余意がうかがわれる。「いかでか」は、理由や手段を問う副詞「いかで」に疑問・反語の係助詞「か」がついた連語。ここは「どうして…か」という疑問を表す。「いまする」は、「あり・居り・行く」の尊敬語「います」の連体形で、「か」の結び。「います」は上代に多く用いられ、古くは四段または下二段活用の動詞であったが、中古

思っていると解されており、「夢にもあはぬ」ことは「自分のことを忘れた」と解釈できるから。

問　**「時知らぬ山」（5行目）とは、どのようなさまを言ったものか。**

答　夏なのに雪を頂いている山の様子。

補　時節を知らない山。季節的な常識に外れた山の姿。

問　**「ここ」（6行目）とは、どこのことか。**

答　京（都）

補　話の「語り手」や「聞き手」のいる場所が物語の場面に登場してしまっている。

問　**「思ひやれば」（9行目）とは、何を「思ひや」るのか。**

答　これまでの旅のさまざまなこと。

補　この部分は、次の「限りなく遠くも来にけるかな」という会話、もしくは心内語の一部とも考えられる。「語句の研究」参照。

問　**「わび合へる」（10行目）とは、具体的にどのようにしていることですか。**

答　途方もなく遠いところに来てしまったことを、皆で互いに嘆き合っていること。

問　**「日も暮れぬ」（10行目）の「ぬ」を文法的に説明せよ。**

答　強意（確述）の助動詞「ぬ」の終止形。完了とする解釈もある。なお、打消の助動詞の場合は連体形であるので、ここは当てはまらない。

の和文ではサ行変格活用となった。よって、ここはサ行変格活用とする。

1見し人なりけり　「し」は直接体験の過去「き」の連体形。よってこの文は男の立場で書かれていると考え、「けり」は詠嘆の意でとった。「（なんと）見知った人であったよ」。また、後の「限りなく遠くも来にけるかな」（六二・9〜10）も同様に考え、この「けり」も詠嘆とした。

2京に　都に向けて。下の「とて」に掛かる。一説に、「つく」に掛かるとする。

2その人　前の歌の「つま」を指す。

2つく　伝えたり届けたりするよう頼む。言づける。「竹取物語」に、「船の帰らむにつけて賜び送れ」とある。

3駿河なる…　「うつつにも」は「夢にも」と対立関係で、下の「あはぬ」に掛かる。現実に逢えないばかりか、夢の中でも逢うことができないと訴え、「その人」がすでに自分を忘れてしまったのではないかと嘆く。当時は、相手が自分を思っていると、自分の夢枕に相手が出てくるものだという考えがあった。宇津の心細い道を通った男は、都のことを思い切るのでなく、逆に妻（恋しい人）に自分への気持ちを問いかけている。道を進むにつれ、都の思い人への恋しさが募ってきていることがうかがわれる。

4つごもりに　「つごもり」は「月籠り」のつづまった形。月末。晦日。「月立（つきたち＝ついたち）」の対立語。「に」を逆接確定の接続助詞とする説もある。

5時知らぬ…　「雪の降るらむ」の「らむ」は現在の原因推量の意を表す。「いったい今をいつだと思って、あんなに鹿の子まだらに雪が降り積もっているのだろう」。「鹿の子」は「鹿」の愛称としても用いられる語句。「鹿の子まだら」は、鹿の毛の斑点のように、全体が茶褐色で、それに白い斑点が散在するさまを思い浮かべて、富士の峰にかかっている白雪の状態をいったもの。

6比叡の山　比叡山は京都府と滋賀県との境にある。

7塩尻　海浜で製塩するために、海水を汲んで浸した砂を乾かして集め、円錐形に積んで日にさらすものをいう。乾かすと塩が結晶化し、白くなる。富士の形の美しさと、その頂きの雪からの例えと考えられる。

2思ひやれば　「都を旅立ってからの日数・行程を振り返ってみると」。「やる」は、時

はまらない。「日も暮れ」のような自然現象としての動作・作用の完了には「ぬ」が、人為的・意図的動作の完了には「つ」が用いられることが多い。

問 **補** **答** **問** **「思ふ人」（11行目）とは、どのような人か。**

恋しく思う人。愛する妻。

「語句の研究」参照。

答 **問** **「なきにしもあらず。」（11行目）という語句の成り立ちを説明しなさい。**

「なき」は形容詞「なし」の連体形、「に」は断定の助動詞「なり」の連用形、「しも」は強意の副助詞、「あら」はラ変動詞「あり」の未然形、「ず」は打消の助動詞「ず」の終止形。「あり」の意を、「なきにあらず」と二重否定の形で強調し、さらに「しも」で強めた表現。

問 **答** **問** **「白き鳥の」（12行目）の「の」を文法的に説明しなさい。**

同格の格助詞

答 **問** **どのような「鳥」（12行目）か。**

体が白く、嘴と脚とが赤い、鴫の大きさの鳥。

問 **答** **「『これなむ都鳥。』」（14行目）の「なむ」に込められた「渡し守」の気持ちを答えよ。**

「これが（有名な）都鳥だよ。」と誇らしく思う気持ち。

問 **名にし負はば」（15行目）の「し」と同じ**

空を問わずある動作の遠くまで及んでいく意の補助動詞。ここは、国境となる川岸で、それぞれが改めて都からの距離を思ったのだろう。この部分を会話の一部とすると、読点の位置は「その川のほとりに群れゐて、思ひやれば、限りなく…」となり、人々とこれまでの旅を振り返って語り合っている意となる。大きな川を前に、ますます都から遠ざかる心細さと不安感が入り交じった気持ちを共有していると考えられる。

8 武蔵の国　現在の埼玉県・東京都および神奈川県の一部。

8 下総の国　現在の千葉県の北部と茨城県の南西部。

9 すみだ川　現在の東京都東部を流れる隅田川。当時は武蔵の国と下総の国との境であった。「墨田川」、「角田川」、「住田川」とも表記される。

10 わび合へるに　「合ふ」は「互いに…する」の意を添える補助動詞。

10 日も暮れぬ　ここは、確実に起こること（日が暮れること）を強調しているとして、「ぬ」を強意（確述）の意とした。日が暮れてしまう、という完了の意でとる解釈もある。

11 なきにしもあらず　「あり」の意を「なきにあらず」と、二重否定の形で強め、さらに「しも」で強めたもの。大きな川を渡ることで、都との断絶を改めて感じ、都の妻（恋人）と二度と会うことはないかもしれないという思いが強まったのだろう。

12 さる折しも　「さる」は「みな人ものわびしくて、京に思ふ人なきにしもあらず」を受ける。副詞「さ」＋動詞「あり」から成るラ変動詞「さり」の連体形が連体詞に転成したもの。「折しも」で「ちょうどそのとき」の意。「都に残してきた思い人を思い出していたちょうどそのとき」。

12 白き鳥の、嘴と脚と赤き、鴫の大きさなる　「白い鳥で、嘴と脚とが赤い、鴫の大きさである（鳥が）」の構文。「白き鳥の」の「の」は同格を表す格助詞。連文節「白き鳥の…大きさなる」は主語であって、「遊びつつ魚を食ふ」が述語。

12 鴫　シギ科の鳥の総称。くちばしと脚が長く、水辺にすむ。

14 これなむ都鳥　下に結びの語として「なる」を補う。渡し守の誇らしげな気持ちを含む。「都鳥」はゆりかもめのこと。カモメ科の小形の鳥。冬の渡り鳥で水辺に群棲

ものを含む文節を、他の歌の中から二つ抜き出せ。

答 ・つまし　・旅をしぞ

問 **「いざ言問はむ」とは、何にどのようなことを「問」うのか、分かりやすく答えよ。**

答 都鳥に、私の恋しく思っている人は無事かどうかということを問う。

● 六三ページ

問 **「舟こぞりて泣きにけり」（1行目）とあるが、それはなぜか。**

答 「男」の詠んだ歌に、同行の人々は同じ思いに心を打たれたからである。

補 都を捨てた理由は同じではないとしても、それぞれ妻を残して遠い土地まで来ているという共通点が一行の男たちにはあり、それが人々の共感を呼んだのである。

問 **前問の理由となっている部分を本文中から探し、その初めと終わりの五字を抜き出しなさい。（句読点を含む）**

答 みな人もの〜もあらず。（11〜12行目）

する。

15 名にし負はば…　二句切れ。「わが思ふ人」は、「都の思い人」。「言問はむ」は、「都鳥への問いかけ」。「ありやなしや」は、「無事でいるかどうか」。思い人の愛情を疑った「駿河なる」の歌からさらに進んで、その人の息災すらも不安に思うという思慕の高まりと、それを鳥に尋ねるしかないほど遠くに来てしまっているということを表した歌。この歌は古来秀歌とされ、引き歌としても随所に用いられている。「都鳥」と言えば隅田川に限られるようになったのも、この歌が知られたためである。

● 六三ページ

1 舟こぞりて泣きにけり　主人公の「男」が都にいる妻（思い人）を恋い慕う歌を詠んだので、舟の人々は同じ思いに心を打たれて泣いたのである。舟の人々は、前文に「みな人ものわびしくて、京に思ふ人なきにしもあらず」と書かれているように、「男」と同様、それぞれ都に妻を残して来ていた。

鑑賞

東海道を下る旅を主題にするが、その旅は交通の不便による苦難も多く、「身を要なきものに思ひなして、京にはあらじ、東の方に住むべき国求めに」行く旅であることに、まず注意される。自分を京では生きていても仕方のない余計者と思い込む男の心は、挫折感・疎外感に満ちている。男が、僅かに、自分の生きる場があるかもしれないと期待した東国は当代の都人にとっては全くの辺境の地であった。

「貴種流離譚」という話型を用いて男のそうした心情が描き出されているが、そこには近代人にも共通する苦悩というものも読み取れるのである。旅は、三河の八橋、宇津の山、富士山、そして隅田川へと奥深く続けられるが、あるのは常に思い切って捨てて来たはずの故郷、京とともにある男の姿である。何を見ても脳裏に去来するものは、慣れ親しんだ妻の姿であり、見慣れた都の風景である。旅は、男の生きる場所が京のほかにはないことを痛切に思い知らせるものとしてあった。それでも男たちは「なほ行き行きて」隅田川に至る。大きな川の、その川辺に立つと「限りなく遠くも来にけるかな」と旅のわびしさが胸に迫る。荒涼たる風景、そこへなおも旅へと追い立てる渡し守の叱声がとぶ。都人の見も知らぬ世界にあって、この川を渡れば都と決定的に離れてしまうという不安やためらいの中、悄然と肩を落とす一行の目に、その時一羽の白い鳥が映る。その名は都鳥。ここでは、都鳥という実体は何の関係もない、ただ音だけによって故郷とつながるその鳥の名が旅愁に耐えてきた人々の心の鬱屈に火をつける。

四首ある歌のうち三首は、進むに従って、その都を遠く離れる男の旅愁と都恋しさの深まりを、極めて自然に、かつ具体的、感動的に歌っている。「から衣」の歌は、折句ということもあり、全体に理知的な抑制から出る美しさがあり、激しい感情は抑えられているが、次の「駿河なる」の歌には、せめて夢にと現れてもらって女の愛情を確認したいという、切なく求める情熱の強さが感じられる。最後には武蔵の国の隅田川に到達するのであるが、ここでは船頭の無情が契機となって、旅愁・望郷の最高潮を示すことになる。その高まりに「名にし負はば」の歌の悲愁にみちた呼びかけがあって、この物語は終結する。

歌物語は、感動や情緒の中心を歌によって描き出す物語のことであるが、文は単なる歌の「詞書」でもなければ、また歌の中の挿入でもなく、実に歌は、文のためにあり、文は歌のためにあって、いわば、「文」と「歌」は同一線上にありながら、しかもそれは対立・対等の関係でなく、両者融合、一体の姿をとっている。非凡な構成と語りがうかがえる段である。

《板書例》　男の心情の推移

「から衣」
・都へ残してきた妻への思慕の念。
←
・都から遠く離れた寂しさ。（技巧的⇓余裕）
「駿河なる」
・さらに都を離れ、山越えのもの寂しさ漂う。
←
・いっそう妻への恋しさを募らせる。
「名にし負はば」
・流浪の旅の果てにわびしさも極限に。
・妻への思慕をさらに募らせ、遠く離れた都を慕い、都鳥に問いかける。

深い学びのために

研究の解答例

1　全体を三つに分け、場面ごとに内容をまとめてみよう。

【答】・第一段落（初め～P六一・11〈ほとびにけり。〉）
ある男が、安住の地を求めて東国に旅立ち、やっと三河の国の八橋にまでたどり着いた。そこで「かきつばた」の折句に旅情を託して詠み、一行も同じ思いに泣いた。
・第二段落（P六一・12〈行き行きて〉～P六二・7〈塩尻のやうになむありける。〉）
さらに東へ進み、駿河の国の宇津の山を越えてゆくとき、修行者に出会い、それに都への文を言づけた。また、初めて見る富士山に驚き、歌に詠んだ。
・第三段落（P六二・8〈なほ行き行きて〉～終わり）
さらに進んで隅田川に着いた。舟に乗るときに都鳥を見て、いよいよ都を恋しく思うあまり歌を詠んだ。一行も同じ思いに泣いた。
▼ポイント▲　厳密には四つの部分に分けられ、そのそれぞれに和歌が一首ずつ配置されている。ここでは「駿河なる」と「時知らぬ」の歌を含む部分は場面のうえから一つと考える。

言葉と表現の解答例

1　次の傍線部の助詞「ば」の意味と用法を、それぞれ確認し、現代語訳してみよう。
(1)　**京には見えぬ鳥なれば**（六二・13）
(2)　**名にし負はばいざ言問はむ都鳥**（六二・15）

【答】(1)　接続助詞（順接の確定条件）　(2)　接続助詞（順接の仮定条件）
▼ポイント▲　(1)断定の助動詞「なり」の已然形に接続するので、接続助詞「ば」の順接の確定条件。「…ので」と訳せるので原因・理由。(2)「負ふ」というハ行四段動詞の未然形に接続する、接続助詞「ば」の順接の仮定条件。

言語活動の解答例

1　「から衣」「駿河なる」「名にし負はば」の三首の歌に共通する心情は、どのようなものか、考えてみよう。

【答】（意図）三首の和歌に共通する男の心情を、順を追って各歌を現代語訳させ、心情を読み取ることから捉えさせたい。
（手順）
1　それぞれの歌の現代語訳を確認し、心情を考える。

「から衣」
（現代語訳）
衣服が着ているうちに萎れるように、馴れ親しんだ妻が（都に残って）いるので、はるかに遠くまでやってきた旅をしみじみと思うことだ。
（心情）
都へ残してきた妻のことを思い、都から遠く離れた寂しさをしみじみと感じている。
「駿河なる」
（現代語訳）
私は駿河の国にある宇津の山に着いたが、「うつ」と名のつく現にも夢にもあなたに逢わないことだなあ（もうあなたは私のことは思ってくれないのだろうか）。
（心情）
さらに都を離れ、山越えのもの寂しさとともに、妻への恋しさを募らせている。
「名にし負はば」
（現代語訳）
都鳥という名にふさわしいのならば、さあ尋ねてみよう、都鳥よ。私が恋しいと思う人は無事でいるかどうかと。
（心情）
流浪の旅の果てにわびしさも極限になり、妻への思慕をさらに募らせ、遠く離れた都を慕い、都鳥に問いかけている。

2　三首の歌に共通する心情を考える。

（ゴール）共通して詠まれているのは、妻と都に対する思慕の念である。「から衣」の歌ではまだ余裕があり、旅の座興歌に興じつつ、心の底では都に残してきた妻への断ち切れぬ思慕の念を、旅愁と共にかみしめている。「駿河なる」の歌では、さらに都を遠く離れて旅の心労が重なるにつれ、疑心暗鬼もからんで、いっそう妻への恋情を募らせる。「名にし負はば」の歌に至って、流浪の旅の果てにわびしさの極限にまで達して、都の妻への思慕を強め、その安否を都鳥にまで問いかけざるを得なくなっている。各歌に詠まれた心情を順に追ってそれらの思いが次第に強まっていくことが理解できればよい。

▼ポイント▲　この三つの歌は妻への思慕と旅愁の心情が主題であるが、行程が進むにつれてその心情が深くなっていくという構成をとっていることに注意させる。男が歌を詠むのは川や山にさしかかった時であり、これらは京との断絶を感じさせる象徴的なものである。京からの距離を実感するその度ごとに、男は京とそこにいる恋しい人への思いを募らせ、その思いの高まりが歌になっていることを理解させたい。なお、「時知らぬ」だけが旅情を主題とするが、都では見たことのない景色を詠むことで、遠くまで来たことを強調している。

（植田　敦子）

筒井筒

（第二十三段）

要旨

幼なじみの少年少女が密かに恋心を抱き合い、ついに互いに歌で気持ちを確かめ合って結婚した。その後、生活が不如意になって男は高安の女のもとに通うようになるが、女は夫の旅の無事を祈る歌を歌い、男はその誠実さに打たれて、高安に行かなくなった。ごくまれに男が高安に行ってみると、女は自ら器に飯を盛っており、そのくだけた姿に男は幻滅して、結局その女のもとに通わなくなった。

構成

段落	ページ・行	段意
第一	初め〜P六四・12〈あひにけり。〉	昔、地方官の子供である少年と少女が物心つき、互いに恋心を抱き合い、親たちの勧める結婚話も断って、思いどおり結婚した。
第二	P六四・13〈さて、年ごろ〉〜P六五・5〈行かずなりにけり。〉	結婚後数年たって、男は高安郡に新しい女ができたが、妻が自分を快く出発させるのを不審に思い様子をうかがっていると、旅ゆく夫を気遣っている様子なので、女の真心に打たれ、以後高安の女のもとへは通わなくなった。
第三	P六五・6〈まれまれ〉〜終わり	ごくまれに男が高安の女のもとへ行ってみると、女は自ら器に飯を盛っており、以前とは違うくだけた姿に男は幻滅する。女から度々歌をもらうが、結局その女のもとに通うことはなくなった。

品詞分解と現代語訳

（表示は略号で示した。略号については略号一覧参照。）

①昔、田舎渡らひ　し　ける　人の　子ども、井の　もと
サ変・用　過・体　格助・体修

に　出で　て　遊び　ける　を、大人に　なり　に　けれ
格助・場所　ダ下二・用　接助・単接　バ四・用　過・体　接助・逆確　格助・変化　ラ四・用　完・用　過・已

ば、男も　女も　恥ぢかはし　て　あり　けれ　ど、男
接助・順理　係助・列挙　係助・列挙　サ四・用　接助・単接　ラ変・用　過・已　接助・逆確

は、この　女を　こそ　得め　と　思ひ　つつ、親の　あはすれ
係助・区別　代　格助・体修　格助・対象　係助・強意(係)　ア下二・未　意・已(結)　格助・引用　八四・用　接助・継続　格助・主格　サ下二・已

ども、聞か　で　なむ　あり　ける。③さて、この　隣の
接助・逆確　カ四・未　接助・打接　係助・強意(係)　ラ変・用　過・体(結)　接　代　格助・体修

男の　もと　より、かく　なむ。
格助・体修　格助・起点　副　係助・強意

④筒井筒　井筒に　かけ　し　まろ　が　丈　過ぎ　に　け
格助・比基　カ下二・用　過・体　代　格助・体修　ガ上二・用　完・用　過・推

らし　な　妹見　ざる　まに
定・終　終助・詠嘆　マ上一・未　打・体　格助・時間

⑤女、返し、

くらべこ　し　振り分け髪　も　肩　過ぎ　ぬ　君　なら　ず
カ変・未　過・体　係助・同類　ガ上二・用　完・終　断・未　打・用

①昔、地方を回って生計を立てていた人の子供たちが、井戸の周りに出て遊んでいたが、大人になってしまったので、男も女も恥ずかしがって（会わずに）いたけれど、男は、この女をぜひ妻にしようと思う。②女は、この男を（夫にしよう）と思い続け、親が（他の男と）結婚させようとするけれども、聞かないでいた。③そうして、この隣の男のもとから、このように（歌を贈ってきた）。

④筒井筒…井戸の井筒の高さと背比べした私の背丈は、井筒を越してしまったらしいなあ、あなたを見ない間に。

⑤女は、返しの歌として、
くらべこし…（あなたと）長さを比べてきた振り分け髪も、肩より長くなってしまった。あなたでなくて誰のために髪上げをしようか（あなた以外の人のためにはしない）。

して　たれ　か　上ぐ　べき
接助・単接　代　係助・反語（係）　ガ下二・終　意・体（結）

など　言ひ　言ひ　て、　つひに　本意　の　ごとく　あひ　に　けり。
副助・引用　八四・用　八四・用　接助・単接　副　格助・体修　比・用　八四・用　完・用　過・終

⑥さて、　年ごろ　経る　ほど　に、　女、　親　なく、　頼り　なく　なる
接　八下二・体　格助・時間　形ク・用　形ク・用　ラ四・体

まま　に、　もろともに　言ふかひなく　て　あら　む　やは　と　て、　河内
連語（名＋格助）　副　形ク・用　接助・単接　ラ変・未　推・終　係助・反語　格助・引用

の国　高安の郡　に、　行き通ふ　所　出で来　に　けり。　⑦さり　けれ
格助・場所　八四・体　接助・単接　カ変・用　完・用　過・終　ラ変・用　過・已

ど、　こ　の　もと　の　女、　悪し　と　思へ　る　気色
接助・逆確　代　格助・体修　格助・体修　形シク・終　格助・引用　八四・已　存・体

も　なく　て、　出だしやり　けれ　ば、　男、　異心　あり　て
係助・同類　形ク・用　接助・単接　ラ四・用　過・已　接助・順理　ラ変・用　接助・単接

かかる　に　や　あら　む　と　思ひ疑ひ　て、　前栽
ラ変・体　断・用　係助・疑問（係）　補動・ラ変・未　推・体（結）　格助・引用　八四・用　接助・単接

の　中　に　隠れゐ　て、　河内　へ　往ぬる　顔　にて　見れ
格助・体修　格助・場所　ワ上一・用　接助・単接　格助・方向　ナ変・体　格助・状態　マ上一・已

ば、　この　女、　いと　よう　化粧じ　て、　うちながめ　て、
接助・順偶　代　格助・体修　副　形ク・用（ウ音）　サ変・用　接助・単接　マ下二・用　接助・単接

⑧風　吹け　ば　沖つ　白浪　たつた山　夜半　に　や　君
カ四・已　接助・順恒　格助・体修　ヤ下二・終　現推・体（結）　格助・時間　係助・疑問（係）

が　ひとり　越ゆ　らむ
格助・主格

などと詠み交しあって、とうとうかねてからの望みどおり結婚した。

⑥そうして、数年たつうちに、女は、親に死なれ、生活のよりどころがなくなるにつれて、（男は、夫婦）そろって貧乏な状態でいられようか（いや、いられない）と思って、河内の国高安の郡に、通って行く所ができてしまった。⑦そうではあったけれども、この昔からの女は、嫌だと思っている様子もなくて、（男を新しい女の所へ）出してやったので、男は、（女は）浮気心があってこのような態度をとるのではあろうかと疑わしく思って、庭の植え込みの中に隠れていて、河内へ行ったふりをして見ていると、この女は、たいそうきれいに化粧をして、物思いにふけって、

⑧風吹けば…風が吹くと沖の白波がたつ、というその名の龍田山を、あの人は夜中に一人で越えているであろうか（どうかご無事で）。

と詠んだのを聞いて、（男は）このう

と　詠み　ける　を　聞き　て、　限りなく　かなし　と　思ひ
格助・引用　マ四・用　過・体　格助・対象　カ四・用　接助・単接　形ク・用　形シク・終　格助・引用　八四・用

て、　河内　へ　も　行か　ず　なり　に　けり。
接助・理由　格助・方向　係助・同類　カ四・未　打・用　ラ四・用　完・用　過・終

⑨まれまれ、　か　の　高安　に　来　て　みれ　ば、　初め
副　代　格助・体修　格助・帰着　カ変・用　接助・単接　マ上一・已　接助・順偶

こそ　心にくく　も　つくり　けれ、　今　は　うちとけ　て、
係助・強意(係)　形ク・用　係助・強意　ラ四・用　過・已(結)　係助・提示　カ下二・用　接助・単接

手づから　飯匙　取り　て、　笥子　の　器物　に　盛り　ける　を
副　ラ四・用　接助・単接　格助・体修　格助・対象　ラ四・用　過・体　格助・対象

見　て、　心憂がり　て、　行か　ず　なり　に　けり。　⑩さり　けれ
マ上一・用　接助・単接　ラ四・用　接助・単接　カ四・未　打・用　ラ四・用　完・用　過・終　ラ変・用　過・已

ば、　か　の　女、大和　の　方　を　見やり　て、
接助・順理　代　格助・体修　格助・体修　格助・対象　ラ四・用　接助・単接

⑪君　が　あたり　見　つつ　を　をら　む　生駒山　雲　な
格助・体修　マ上一・用　接助・継続　間助・強意　ラ変・未　意・終　副

隠し　そ　雨　は　降る　とも
サ四・用　終助・禁止　係助・区別　ラ四・終　接助・逆仮

と　言ひ　て　見出だす　に、　からうじて　大和人、「来　む。」
格助・引用　ハ四・用　接助・単接　サ四・体　接助・単接　副　カ変・未　意・終

と　言へ　り。　⑫喜び　て　待つ　に、　たびたび　過ぎ　ぬれ
格助・引用　ハ四・已　完・終　バ四・用　接助・単接　タ四・体　接助・逆確　副　ガ上二・用　完・已

ば、
接助・順理

えなくいとしいと思って、河内へも行かなくなってしまった。

⑨ごくまれに、あの高安（河内の女の所）に来てみると、（その女は）初めのうちは奥ゆかしく身繕っていたが、今は気を許して、自分の手でしゃもじをとって、飯を盛る器に（飯を）よそっているのを見て、（男は）嫌になって、（女の所に）行かなくなってしまった。⑩そうであったので、その女は、（男のいる）大和の方を見やって、

⑪君があたり…あなたのいる（大和の）辺りを見続けて暮らしましょう。（大和との境の）生駒山を、雲よ、隠してくれるな。たとえ雨が降ったとしても。

と詠んで外の方を見ていると、やっとのことで大和の男が「行こう。」と言った。⑫喜んで待っていたが、度々（男が来ないまま）過ぎてしまったので、

⑬君(きみ)　来(こ)　む　と　言(い)ひ　し　夜(よ)ごと　に　過(す)ぎ　ぬれ　ば
代　カ変・未　意・終　格助・引用　八四・用　過・体　格助・時間　ガ上二・用　完・已　接助・順理

頼(たの)ま　ぬ　ものの　恋(こ)ひ　つつ　ぞ　経(ふ)る
マ四・未　打・体　接助・逆確　八上二・用　接助・継続　係助・強意(係)　八下二・体(結)

男(をとこ)、住(す)ま　ず　なり　に　けり。
マ四・未　打・用　ラ四・用　完・用　過・終

と　言(い)ひ　けれ　ど、
格助・引用　八四・用　過・已　接助・逆確

⑬君来むと…あなたが、行こうと言ったその夜ごとが、むなしく過ぎてしまったので、当てにしていないけれども、あなたのことを恋し続けて暮らしています。

と（女は）歌を詠んだけれども、男は、通ってこなくなってしまった。

学習活動のポイント

展開

学習活動のポイント

❶「筒井筒」を音読する。思判表B(1)ア

❷重要古語の意味・用法を確認する。知技(1)ウ・(2)ウ
→「言葉と表現」1

❸現代語訳し、段落ごとに内容を確認する。知技(1)エ 思判表B(1)ア

❹「筒井筒」「くらべこし」の歌に込められた男と女の心情を理解する。知技(2)イ 思判表B(1)イ →「学習のポイント」1

❺「風吹けば」の歌の修辞を確認し、女の心情を理解する。知技(1)アオ・(2)エ 思判表B(1)イ

❻大和の女と高安の女を、詠んだ歌、振る舞いや性格について、比較する。思判表B(1)エ →「学習のポイント」2

❶毎時間の最初には音読をする。授業態勢への導入と考える。単独読み、一斉読みなどさまざまに試みる。和歌は、韻律にも注意させる。また、音読を聞く態度も養わせたい。

【評価】歌を中心とする物語の構成を踏まえて、場面を追って、内容や構成、展開などについて叙述を基に的確に捉えているか、音読により、確認する。

❷段落ごとに重要古語を確認していく。集落の中で「井」の持っていた意味に注意させる。「筒井」や「井筒」については教科書挿絵を参照させる。「振り分け髪」などは図で解説する。「もろともにいふかひなくてあらむやは」（六四・13）の部分はしっかり押さえさせる。和歌の「な…そ」の用法などに留意させる。助詞では間投助詞の「を」、逆接の「ものの」などを確実に押さえさせる。

【評価】我が国の言語文化に特徴的な語句の量を増し、それらの文化的背景について理解を深め、語感を磨き語彙を豊かにしているか、ペーパーテストにより、確認する。

・古典の世界に親しむために、古典を読むために必要な文語のきまりや、古典特有の表現などについて理解しているか、ペーパーテストにより、確認する。

❸現代語訳は内容を把握するために不可欠である。逐語訳にこだわりすぎず、粗筋が分かる程度でもよい。現代語訳プリントなどを用意することで代用することもできる。男と女の贈答歌に注意させ、二人の心情が十分に分かるように工夫する。

【評価】文章の意味は、文脈の中で形成されることを理解しているか、現代語訳により、確認する。

・歌を中心とする物語の構成を踏まえて、場面を追って、内容や構成、展開などについて叙述を基に的確に捉えているか、現代語訳により、確認する。

❹「筒井筒」の歌は求婚歌、「くらべこし」の歌はその受諾の返歌になっている。幼なじみの男女がほのかに抱いていた恋心を大人になって成就させたきっかけになった歌である。「筒井筒」や「たけくらべ」が幼なじみの恋の意味で用いられるのはこの物語からである。樋口一葉の小説の題名などからの話もできよう。「古文の窓3」を参照し、平安時代の恋と結婚について理解を深めさせる。

【評価】古典の世界に親しむために、作品や文章の歴史的・文化的背景などを理解しているか、確認する。

・二首の和歌について、表現技巧、男女の心情、また、古人のものの考え方が理解できたか、歌を暗唱させる、感想をノートにまとめさせて発表させることにより、確認する。

❺序詞を用いている。この歌は、女が男の身の上の安否をひたすら気遣う歌である。歌によって男の心を取り戻す、歌徳説話になっている。

【評価】言葉には、文化の継承、発展、創造を支える働きがあることを理解しているか、確認する。

・序詞などの我が国の言語文化に特徴的な表現の技法とその効果について理解しているか、確認する。

・時間の経過による文字や言葉の変化について理解を深め、古典の言葉と現代の言葉とのつながりについて理解しているか、確認する。

・和歌の表現技巧、女の心情について理解できたか、歌を暗唱させる、感想をノートにまとめさせて発表させることにより、確認する。

❻「風吹けば」「君があたり」「君来むと」の歌に込められたそれぞれの女性の心情を読み取る。

【評価】大和の女と高安の女の行動や歌について、内容の解釈を深めているか、表現技巧、詠まれている心情などの理解を深め十分に鑑賞できたかを、感想をノートにまとめさせ鑑賞文を書かせたり発表させたりすることにより、確認する。

■まとめと発展

学習活動のポイント

❶「筒井筒」と「沖つ白浪」を読み比べ、描写や作風の違いを指摘する。主態　→**「言語活動」1**

❶グループを作り、「筒井筒」と「沖つ白波」で描写が違う部分をあげさせる。まず違う点をあげさせて、全体で整理する際に、【両作品にあるが、設定が異なっている描写】【「筒井筒」にはあって、「沖つ白波」にはない描写】【「沖つ白波」にあって、「筒井筒」にはない描写】に分けると、整理しやすい。また、これらの項目を最初から与えてもよいし、始終分けずに出してもらうやり方でもよい。教室や授業の状況に併せて行いたい。課題としてあらかじめ出しておくのもよい。

【評価】粘り強く昔の人の恋のあり方について理解し、歌物語

題に沿って、同じ和歌を主題とした異なる物語を読み比べよう
に親しみ、内容や構成、叙述を基に人物の心情を考え、学習課

としているか、グループワークにより、分析する。

指導上の注意点と発問例

● 六四ページ

問　**「渡らひ」（2行目）の基本的な意味を述べなさい。**

答　行き来。暮らし向き、なりわい。

問　**「男も女も恥ぢかはして」（4行目）とあるが、「恥ぢかはして」いた理由を説明しなさい。**

答　（お互いに）好き合っていたものの、年頃になった照れくささから。

問　**「この男を」（6〜7行目）「かくなむ」（8行目）の後に、それぞれどのような語句を補ったらよいか。**

答　「この男を」→得む。「かくなむ」→詠みてやりける（言ひやりける）。

補　省略があるときは、常に補って読む習慣をつけさせる。

問　**「親のあはすれども、聞かでなむありける。」（7行目）とは、誰がどうしたというのか。**

答　親が他の男と結婚させようとしたが、女は従わないでいた。

補　古語の「あふ」には「結婚する」という意があることに注意させる。（「語句の研究」参照。）女の強い意志を読み取らせたい。

問　**「さて」（7行目）の品詞を答え、現代語訳**

語句の研究

● 六四ページ

2 田舎渡らひしける人　地方を回って生計を立てている人。地方暮らしの役人、田舎回りの行商人のこととする説がある。「渡らひ」は、動詞「渡る」に上代の反復・継続の助動詞「ふ」が付いた「渡らふ」の名詞化。「行き来」または「暮らし向き、なりわい」のこと。ここは、「髪上げ」などを行う階級ということで、地方官か。

3 井　掘り井戸。集落共有であった。大人たちはここに集まって家事などをし、子供たちもこれについて集まってきた。

4 恥ぢかはして　「かはす」は、「互いに…する」の意を添える補助動詞。

6 この男を　「この男を得む」または「この男をこそ得め」の略。前文を参照する。

7 親のあはすれども　「親が他の男と結婚させようとするけれども」。「の」は主格。「あはす」は「結婚させる」の意。この時代、年頃の女性は男性の前に姿を現したり、顔を見せることは滅多になかった。顔を合わせることはすなわち深い関係であることを意味しており、「あふ」＝「結婚」ということになった。

8 かくなむ　下に「言ひやりける」が省略されている。

9 筒井筒…　「筒井」は筒のように円形に掘り下げた井戸。「井筒」は井戸の地上の部分を木や石などで囲んだ井戸囲い。井げた。「かけ」は一般的には「はかり比べる」の意ととる。「まろがたけ」は「私の背丈」。「まろ」は自称代名詞として、中古では上下・男女・老幼を問わず用いた。「過ぎにけらしな」の「けらし」は「けるらし」の略。「けり」は歌なので詠嘆（気づきの「けり」）。「らし」は、客観的な事実や証拠に基づいて推定する助動詞。「過ぎて（越して）しまったらしいなあ。」と、推量形だが確信をもって言うのである。「妹」は男から女に対して言う親愛の語。自分が成長したことを述べて、遠回しに求婚している。

11 くらべこし…　「くらべこし」の「こ」（「く」の未然形）は「ずっと…してくる」という継続の意を添える補助動詞。「振り分け髪」は左右に分けて肩の辺りで切りそろえた子供の髪型。「たれか上ぐべき」の「上ぐ」は「髪上げをする」ことで、女子

せよ。

問 答 接続詞　そうして

問 答 **「かくなむ」（8行目）「かく」の指すものを答えよ。**

次の「筒井筒」の歌

問 答 **「筒井筒井筒にかけし」（9行目）を現代語で説明せよ。**

井戸の井筒の高さと背比べをした。

問 答 **「まろが丈過ぎにけらしな」とは、男が何を言おうとした言葉か。**

成人して妻を迎える年齢になったこと。

問 答 **「くらべこし」（11行目）とあることから、この少年少女がどのような間柄であったことが分かるか。**

無邪気な「髪の長さの比べ合い」などをして、幼時から互いに親しみ合っていた。

問 答 **「振り分け髪も肩過ぎぬ」（11行目）とは、どのようなことを意味しているか。**

その昔から年月がたち、そろそろ髪上げする、婚期が近づいたことを示している。

問 答 **「上ぐ」を分かりやすく説明せよ。**

補 「語句の研究」参照。

幼なじみの男女の間柄を「たけくらべ」ということがある。背丈や髪を通して、共有している思い出と自分たちの成長をそれぞれ表現している。

問 **「肩過ぎぬ」（11行目）の「ぬ」を文法的に説明せよ。**

補 答 完了の助動詞「ぬ」の終止形。

接続の上からは、打消の助動詞「ず」の連体形と区別がつけられないが、下の「君」にかかってはいないので、連体形でなく終止形であると分かる。終止形ならば完了の助動詞である。男の歌に対し、自分も成長したことを伝えている。

問 答 **「頼りなくなる」（13行目）とは、どのようなことか。**

「頼り」が「なくなる」こと。つまり、頼るべき者（親）が亡くなったこと。

補 現代語の「頼りない」とは異なる。下段「語句の研究」参照。

問 答 **「もろともに」（3行目）は、(1)「女と一緒にいて」と、(2)「女も男も二人とも」の二通りが考えられる。それぞれの場合の「いふかひなくてあらむやは」の現代語訳を答えよ。**

(1)女と一緒にいて、貧乏な暮らしに甘んじてはいられないと思って。(2)頼りない身になるにつれて、二人そろって、何もしないで暮らしていられようか、いやいられないと思って。

問 答 **「行き通ふ所」（14行目）とは、どのような所か。**

男が通う、妻以外のなじみの女（の家）。

の成人儀礼。成年に達した女性は、今までの振り分け髪をやめて結髪し、裳を着用する。「竹取物語」に「よきほどなる人になりぬれば、髪上げなどさうして、髪上げさせ、裳着す。」（四七・2～4）とある。「髪上げをすべき時期（婚期）が近づいたが、あなた以外の誰のために髪上げをしようか。いや、しない」の意。一説に「古来将来夫たるべき者が許嫁の女子の髪上げをする風があった」（石村貞吉「有職故実」）ともいうが、未詳。その説に従えば、「あなた以外に誰がこの髪を結い上げてくれるでしょうか（それをしてくれるのはあなたのはずです）」の意になる。「か」は反語。男の歌が幼い頃の思い出と成長を詠んでいることに対応した内容であるが、男の歌よりもより積極性が感じられる。

12言ひ言ひて　「詠み交しあって」。このように歌の贈答を続けて機も熟してきて。

13親なく　（女の）親が亡くなって。「源氏物語」梅枝巻にも「親なくて世の中かたほにありとも」という例が見られる。生活の不如意をいう。

13頼りなくなるままに　頼りとする者、特に経済的な援助者がなくなり、「生活が貧し

補 新しい妻の所。

補 うしろに「もとの女」とあるので、これが別の女の所であるとわかる。当時の結婚形態に、男が女の家に通う、いわゆる「通い婚」という形式があった。この場合、夫の面倒は妻の家がみることになる。親を失った妻は夫の面倒を見るのが困難になり、それで夫は別に通う所ができたのである。

● 六五ページ

問 「さりけれど」（1行目）の「さり」とは、何を指しているか。

答 男が別の女のもとへ通うようになったこと。

補 「さり」は副詞の「さ」にラ変動詞が付いた複合動詞「さあり」の転化したもの。

問 「悪しと思へる気色もなく」（1行目）この女が夫を送り出したのはなぜか。

答 夫を愛するあまり、女は自分の夫に対する嫉妬の心を抑えていたから。

補 答は一例であり、自由に話し合わせることもできる。同話を載せる「大和物語」では、女の胸の上に置いた水が、嫉妬でお湯になったという描写がある（「鑑賞」参照）。

問 「異心」（2行目）とは、この場合どのような心か。

答 浮気心。他の男を愛する気持ち。

補 他のことを思う心から転じて、別の異性を思う心の意となる。

くなるにつれて」。親が亡くなったことを言う。「ままに」は「…なくなるにつれて」の意。

13 もろともに言ふかひなくてあらむやは　男の言葉あるいは心中思惟と解釈するのが通説。「この女との貧乏な暮らしに甘んじてはいられない」との気持ちから、男が別の女の所へ通う口実とする説と、「二人で無為のままみっともない暮らしをしているわけにはいかない」との気持ちから、妻に負担をかけないために愛する妻のもとを離れて遠くへ出かける理由と解する説とに分かれる。また、二人一緒にいることが不運のもとだから、それぞれの道を歩むべきだという考え方もあり得る。ここは、愛情が変わらないとする後者の説の方が、後の「異心ありて」と女を疑う気持ちにも通じる。

14 河内の国　現在の大阪府南東部。

14 高安の都　現在の大阪府八尾市の辺り。生駒山地の南。

14 出で来にけり　「出で来」の「来」（「来」）の連用形）は、「…し始める、…してくる」という始まりの意を添える補助動詞。

● 六五ページ

1 悪しと思へる気色　男の態度を不快だと思っている様子。

2 異心ありて　「女に浮気心があって」。妻が他の男と通じているのかと疑っている。

2 かかるにやあらむ　「嫉妬もせず、このように気持ちよく出発させるのであろうか」。

3 往ぬる顔　「往ぬる」はナ行変格活用動詞の連体形。行ったふり。妻の浮気心を確かめようとする。

4 風吹けば…　「風吹けば沖つ白浪」は「たつ」の序詞。「沖つ」の「つ」は上代の連体修飾の格助詞。平安時代以降はその働きは失われ、特定の語にのみ残された。「たつ」は「（波が）立つ」と「龍田山」の「龍」との掛詞。「龍田山」は大和の国から河内の国へ行くときに越える山。これによって最初の男女が住んでいたのは大和の国であることが分かる。また、白浪は「後漢書」の「白波賊」から盗賊を表す語としても使用されたので、「盗賊が出るような龍田山」とする解釈もある。「夜半にや」の「や」は疑問。「越ゆらむ」の「らむ」は現在推量で、視界外のことを推量する。「今頃越えているであろう」の意。夜更けに危険な山道を行く夫の身をひたすら案じる歌である。前半部で繰り返される女の思いの

問 ◉**「かかる」（2行目）とは、どのような内容を指しているか。**

答 「悪しと思へる気色もなく」男を送り出す女の行動。

補 他の女のところに行くと知っていながらの行動なので、男はいぶかしがるのである。

問 **「ながめ」（3行目）のここでの意味は次のどちらか。**

(ア)　はるか遠くを見渡すこと。

(イ)　物思いに沈んでぼんやりと見やること。

答 (イ)

問 **「風吹けば」（4行目）の歌に見られる修辞上の技巧を説明せよ。**

答 序詞・掛詞

補 「語句の研究」参照。

問 **「風吹けば」（4行目）の歌に込められている女の気持ちはどのようなものか。**

答 ひたすらに夫を思い、今は旅にあって危険な夜の山道をも行くであろう夫の身の上を気遣う気持ち。

補 「夜半にや君がひとり越ゆらむ」が、夫を気遣う内容になることに注意させる。

問 **「越ゆらむ」（4行目）の「らむ」を文法的に説明せよ。**

答 現在推量の助動詞「らむ」の連体形。

問 **「かなし」（5行目）に漢字を当てる場合、次のどちらがよりふさわしいか。また、「かなし」の意味を答えよ。**

(ア)悲し・哀し　(イ)愛し

答 いとしい。

問 **「初めこそ心にくくもつくりけれ」（6行目）を現代語訳せよ。**

答 初めのうちは奥ゆかしく振るまっていたが。

問 **男が高安の女に「心憂がりて」（7行目）となったのはなぜか。**

答 高安の女が自分で食事をよそったりするという、当時の女性としては、はしたない振る舞いをするようになったから。

補 男が生活に困って通い出した高安の女はそれなりに裕福だったはずである。そのような女性の、気を許した振る舞いが男を幻滅させたのである。

問 **「さりければ」（8行目）の「さ」は、どのようなことを指しているか。**

答 行かずなりにけり。

補 「さ」は指示語。ここでは、直前の男の行動を指す。

問 **「男」はどこに住んでいるのか。**

答 大和

補 「大和人」という表現から分かる。また、高安の女が見ている方向（生駒山）からも推測できる。

問 **「君来むと」（12行目）の歌は、誰のどのような気持ちを表しているか。**

一途さは、男に他に通う所ができても失われていなかった。男にもそれが感じられたのだろう。なお、類歌に「わたの底沖つ白浪龍田山いつか越えなむ妹があたり見む」（「万葉集」巻二）「玉勝間島熊山の夕暮れにひとりか君が山道越ゆらむ」（「万葉集」巻十二）がある。

5かなしと思ひて　「かなし」は、切ないほどに心を打たれ、涙が出るような感じを言う語。①「愛し」、②「悲し、哀し」の両様の使い方がある。ここは①。

6心にくくもつくりけれ　「奥ゆかしく身繕っていたが」。係助詞「こそ」を受けた已然形が、そのまま下に続く時は逆接の意味になる。

7手づから　「自分の手で」。待女などに給仕をさせず自ら行うのは、慎みを忘れたはしたない行いとされた。

7飯匙　飯を器に盛るための杓子（しゃくし）。しゃもじ。

7笥子の器物　「笥子」は飯を盛る器。笥子の用途の容器という意。

7心憂がりて　嫌になって。

8さりければ　そうであったので。「さありければ」のつづまった形。「さ」は「行かずなりにけり」を受ける。

答　高安の女の、来ない男を恋いこがれて待つ気持ち。

補　前の歌に続いて、高安の女の、男に対する思いが詠まれている。

問　**「筒井筒」の段において、結局、男が河内へ行かなくなった理由を二つ答えなさい。**

答　・大和の女の、ひたすら夫の身を案じるひたむきな愛情に心打たれたから。　・高安の女の、奥ゆかしさを忘れたはしたない振る舞いに幻滅し、嫌になったから。

8大和　現在の奈良県。男が住んでいる所。

8見やりて　「見やる」は、遠くの方に視線を注ぐこと。

9見つつををらむ　「見つつ」の下の「を」は強意の間投助詞で、「をら」はラ変動詞「居(を)り」の未然形。

9生駒山　奈良県（大和）生駒市の西方と大阪府（河内）東大阪市との境にある山。

9な隠しそ　「隠してくれるな」。「な…そ」で禁止を表す。懇願のニュアンス。

10来む　本来「行かむ」というところを女の立場から表現したもの。

12頼まぬものの　「当てにしないけれども」。「頼む」はマ行四段動詞で「頼りにする、当てにする」の意。「ものの」は逆接の接続助詞。

12恋ひつつぞ経る　「恋し続けて暮らしている」。「つつ」は継続の接続助詞。「経(ふ)る」は下二段動詞「経」の連体形で、「ぞ」の結び。

鑑賞

「筒井筒」は幼い恋の代名詞としてよく知られる。また、「たけくらべ」は樋口一葉が小説の題に用いた。男も女もお互いにただ一人を想い合って、全く他に心を分けることなく、ついに初志を遂げる。清々しく好ましい話である。だが、彼らの障害は結婚までのものだけではなかった。「女、親なく、頼りなくなるままに、もろともにいふかひなくてあらむやはとて、…行き通ふ所出で来にけり。」とは、貴族社会では、生活は妻の実家で世話をする慣習があったから、女の親が世を去ると、途端に生活が苦しくなる。彼らの愛は過酷な現実の前に光を失って、男は援助者を他に求めることになる。そして、そこからがこの物語の眼目である。

新しい女のもとへ通う夫を、筒井筒の妻は、「悪しと思へる気色もなくて」送り出す。妻が自分の外出に少しも恨みがましい態度を取らないのは、もしかしたら、留守を待って他の男を家に入れるつもりだからではないのか。男はそう疑ったが、事実は全く違っていた。妻は夫を送り出すと、夫が側にいるときと同じように身なりを整え、化粧をする。そして物思いにとらわれた妻の口から漏れた歌は、ただひたすらに自分（夫）の身を案じるものであった。「限りなくかなし」と男は思う。妻のいとしさ、自分の低劣な憶測、そうしてかくあらしめた過去、そういった思いが一斉に男をとらえ、万感胸に迫るというのであろう。ところで、このぞき見た妻の様子について、「古今和歌集」の左注では、「夜ふくるまで琴をかきならしつつ、うちなげきて、この歌を詠みて寝にければ」とある。これだと、孤閨を嘆く妻の様子をかなりの時間、夫は見つめていたことになる。さらに、詠み比べ教材の「大和物語」の一四九段「沖つ白浪」（六七頁）では、

月のいといみじうおもしろきに、頭かいけづりなどしてをり。夜更くるまで寝ず、いといたううち嘆きてながめければ、人待つなめりと見るに、使ふ人の前なりけるに言ひける。

とあって、「風吹けば」の歌が置かれている。これでは、妻の化粧を、夫は、別の男を待つためと、いっそう疑いを強くして見ていたことになる。しかも彼は歌によって妻の真情を知った後も、なおも監視を続けるのであるから、妻が嫉妬をしないという事実を、よほど信じかねていたに違いないが、それは実は「大和物語」の作者自身の疑問の反映であったらしい。この後には、妻が胸の上に据えた金椀（かなまり）の水が嫉妬の炎でたぎるという情景を加えている。快くと見えたのは表面を取り繕っていたに過ぎず、それだけ思いは強く内向していたというのである。ここには女が嫉妬しないなど全く考えられないとする作者の主張が表れていよう。こういうものと比較するとき、「伊勢物語」の純愛の清さ、みやびさはいっそう身に染みるように思われる。女の歌によって男の心が戻ったと言う、歌徳説話の系譜に属する話である。

この後高安（河内）の女の方は、身なりを整えて夫を待った大和の女とは対照的に、自ら食事をよそうという品のない行為によって男の愛情を失う。こちらも大和の女同様、歌を詠むことで多少男の気を引きはするが、それでもそのうち顧みられなくなってしまう。これは、「伊勢物語」の作者が「みやび」という点を重要視していることを表していて、歌のみでなく平素の心がけが大切であることも示していると言える。

コラム　『伊勢物語』の主人公は本当に「男」なのか？

『伊勢物語』は「在原業平をモデルとした「男」が主人公とされる歌物語」だと解説することが多い。それ自体が間違いではないし、極めて穏当な説明だといえよう。一方で、「男」と多様な贈答歌を交わし、物語に様々な表情を与える「女」たちの位相について、私たちは授業の中でどのように説明すればよいのだろうか。ここでは、「筒井筒」に登場する女性たちの位相について考えてみたい。

授業後に生徒に率直な感想を聞いてみると、「高安の女がかわいそうだ」という声を聞くことが多い。前半で展開される男女の淡い恋の物語から一転して、後半では「男」に翻弄される「女」たちの心情のうねりが描かれており、特に「男」の都合で一方的に捨てられる「高安の女」に対する同情は、この教材の読解を通じて最も強烈に生成する感情なのかもしれない。

ここで特記したいのは、作品の主眼が「男」を主人公とした物語ではなく、愛執にとらわれた「女」の物語に転移していく過程についてである。鈴木日出男氏は「時間の経過による風化作用にさらされがちな男と女の関係が、特に女たちの側から、その堪えがたい心情が表現されている」と述べ、さらに「歌をはじめに一首しか詠んでいない男の存在は、物語全体の主題からはやがて後退してしまっているのである」と指摘している（『伊勢物語評解』二〇一三年、筑摩書房）。研究2における問題提起も、女に愛想を尽かした「男」の話から、捨てられる「女」の話へと物語の比重が移っていることに着目した課題であった。

ここで、一歩踏み込んだ話題として、「妻問婚」などの当時の習俗について生徒に紹介するのも面白いだろう。特に、「夫が妻の家に通うことで婚姻関係が成立していた当時の習俗では、実は女が家や財産を相続していて、経済的には主導権を握っていた一面もある」という点に重点を置いて説明してみてはどうだろうか。生徒達は「高安の女」に対して、男に翻弄されたみじめな女という印象を抱いていたかもしれないが、実際には、当時の女性達は世間を生き抜いていくのに十分な力を持ち合わせていたのである。

恐らく、この物語で描かれているのは、男に翻弄される女性達のみじめな姿ではない。むしろ、時の流れによってうつろう恋の諸相を、「女」の視点に寄り添いながら描こうとする物語のあり方にこそ着目すべきなのではないだろうか。時の流れが人の心を変容させていく恋のはかなさ。男との関係を断ち切れない愛執のすさまじさ。一人の女の悲しみを物語の新たな主題に据えてゆくことの意味について、鈴木氏は前掲書の中で繰り返し指摘されている。

『伊勢物語』は、徹頭徹尾「男」の物語としてあり続けるのではなく、「男」の物語の周辺の多様な人間模様を多元的な視点から描き出そうとするところに、一つの大きな魅力があると考えられるのである。

（小林　俊洋）

《板書例》　男と女の歌

「筒井筒」背丈も井筒の高さを越えた。
　↓私も一人前の大人になった。
　↓あなたと結婚したい。
「くらべこし」あなた以外の誰のために髪上げをしようか。
　↓私もあなたと結婚したい。

《板書例》　二人の女の比較

大和の女
- 性格…男に対するひたむきな愛情。純真。
- 振る舞い…たしなみ深い。
- 歌…夫の身をひらすら案じる。
- 修辞↓教養

高安の女
- 性格…男に対するひたむきな気持ち。
- 振る舞い…最初は奥ゆかしかったが、次第にやや自己中心的。はしたなくなる。（男―幻滅）
- 歌…二首とも男を待つ気持ち、男への恋心を詠む。

《板書例》　作風の違い

「筒井筒」
- 歌が多く、歌中心に話が展開する。
- 雅な作風。

「沖つ白浪」
- 具体的、説明過剰でやや露骨。
- 非現実的な設定あり。

深い学びのために

学習のポイントの解答例

1　**「筒井筒」「くらべこし」の歌は、それぞれ相手にどのようなことを伝えているか、まとめてみよう。**

【答】「筒井筒」…自分も大人になったので、あなたと結婚したい。
「くらべこし」…私もあなたと結婚したい。

▼ポイント▲　「筒井筒」の歌は、男の側から、大人として求愛する気持ちの表現であり、「くらべこし」の歌は、それを受けて、女の側も男の求愛を積極的に受け入れる気持ちのあることを伝えようとしている。男は背丈の伸びたことで成長を表現して求愛する。女は髪の長さを示して結婚適齢期を迎えたことを言い、男への愛情を率直に歌う。贈答の形の上でも内容的にも見事に対応しているばかりでなく、男女の成長の表現に極めて象徴的なものがある。

2　**大和の女と高安の女を、詠んだ歌、振る舞いや性格について、比較してみよう。**

【答】
大和の女
・「風吹けば」の歌　山越えをする夫をひたすらに案じる。修辞を用いているところから教養深さがうかがえる。
・振る舞い　嫉妬心を出さない、化粧して男を思う歌を歌うなど、たしなみ深さを擁している。
・性格　奥ゆかしく、男に対するひたむきな思いを持つ純真な性格。

高安の女
・「君があたり」「君来むと」の歌　二首とも、男を待つ気持ち、男への恋心を詠んでいる。
・振る舞い　最初は奥ゆかしかったが、次第にその奥ゆかしさを無くしていき、男に幻滅される。
・性格　品位に欠ける点はあるが、男へのひたむきな思いを持つ点は大和の女と変わらない。大和の女が男の身を案じる歌を詠んでいるのに対し、男を恋う自分の気持ちを中心に歌を詠んでいるところから、やや自己中心的な性格も読み取れる。

▼ポイント▲　男を思う気持ちではどちらもひたむきである。大和の女の歌は、夫の身をひたすらに案じている。序詞や掛詞などの修辞も凝らされていて、この女の教養の顕れと見ることもできる。一方、高安の女の歌は、自分の気持ちを述べることに終始しているものの、修辞に頼らない自然な感情の発露とも見ることができ、歌においては優劣つけがたい。

振る舞いの点では、大和の女の、嫉妬心を表に出さず、化粧をして男を案じる歌を詠むというたしなみ深さに比べ、高安の女は、最初は奥ゆかしくしていたものの、次第にうち解けてはしたなくなり、たしなみを忘れた姿に男の愛を失ってしまう。高安の女は、男になぜ疎まれるのかと言った人情の機微を解す心に欠けていた

のである。

言葉と表現の解答例

1 **次の傍線部の助詞の種類と用法を、それぞれ確認してみよう。**

(1) **聞かでなむありける。（六四・7）**

(2) **君があたり見つつををらむ（六五・9）**

【答】 (1) 接続助詞（打消接続）　(2) 間投助詞（強意）

▼ポイント▲ (1)未然形接続の助詞で、「…ないで」と訳す。

(2)和歌の場合、調子を整えるという働きもある。特に訳さない。

言語活動の解答例

1 **『伊勢物語』と『大和物語』はともに十世紀頃に成立した歌物語である。「筒井筒」（六四～六五ページ）と「沖つ白浪」（六七～六八ページ）は、「風吹けば」の歌を、男が別の女性のところに通うときに、もとの女が詠んだ歌とする物語の骨格は共通しているが、細部にさまざまな違いがある。二つの作品を読み比べてみよう。**

(1) **「筒井筒」と「沖つ白浪」で描写が違う部分を指摘してみよう。**

(2) **「筒井筒」と「沖つ白浪」の作風の違いを指摘してみよう。**

（意図）『伊勢物語』「筒井筒」と『大和物語』「沖つ白浪」を読み比べ、描写の違いを押さえた上で、二つの作品の作風の違いについて理解する。

(1)（手順）

1 「沖つ白浪」の本文を音読し、内容について確認する。

2 グループを作り、「筒井筒」と「沖つ白浪」で描写が違う部分をあげる。

・グループワークをする際、まず違う点をあげさせて、全体で整理する際に、【両作品にあるが、設定が異なっている描写】【「筒井筒」にはあって、「沖つ白浪」にはない描写】【「沖つ白浪」にあって、「筒井筒」にはない描写】に分けると、整理しやすい。また、これらの項目を最初から与えてもよいし、始終分けずに出してもらうやり方でもよい。教室や授業の状況に併せて行いたい。課題としてあらかじめ出しておくのもよい。

【答】

【両作品にあるが、設定が異なっている描写】

◎もとの妻が歌を詠む前に、「筒井筒」では「いとやう化粧じて」になっているが、「沖つ白浪」では「頭かいけづりなどして」となっている。

◎「筒井筒」では、男はもとの妻の「風吹けば」の歌を詠んで河内に行かなくなったが、「沖つ白浪」では、「金椀に水を入れて」胸に据えたのが沸騰したもとの妻の言動を見て、行かなく

なっている。

【「筒井筒」にはあって、「沖つ白浪」にはない描写】

◎「筒井筒」はもとの妻と男との幼い頃からの恋物語、結婚までの経緯があるが、「沖つ白浪」にはない。

○「筒井筒」には、今の妻は「河内の国」と明示されているが、「沖つ白浪」にはない。

◎「筒井筒」には、河内の国の女の歌があるが、「沖つ白浪」にはない。

【「沖つ白浪」にあって、「筒井筒」にはない描写】

○「沖つ白浪」では、今の妻が裕福な家あり、男は「ことに思はねど」通ったという設定になっており、「身の装束もいと清らにせさせけり」と具体的に書かれているが、「筒井筒」には書かれていない。

○「沖つ白浪」では、今の妻に男が行く際、「往ね」という具体的な言葉が発せられているが、「筒井筒」ではない。

◎「沖つ白浪」では、もとの女が金椀に水を入れて、それを胸に据えているのは、嫉妬の炎で熱くなっている自分の体を冷やすためである。

◎「沖つ白浪」では、もとの女の嫉妬心を見た男が、「いかなる心地し給へば、かくはし給ふぞ」という会話があり、また「かき抱きてなむ寝にける」という表現がある。

◎「沖つ白浪」では、今の妻に男が再び行ったのは、女の嫉妬心が大変なものだということが、もとの妻の様子でわかったからという設定になっており、また、行ってからも家に入るのではなく、気が引けて中の様子を見て行かなくなった、という設定になっている。

◎「沖つ白浪」では、最後に「この男は王なりけり」と、男が在原業平がモデルであることを示す一文がある。

▼ポイント▲

以上、例としてあげてみたが、細部になるとまだたくさんあるであろう。あまり細かい違いは追究しすぎず、「主な違い」を授業では押さえ、(2)の活動につなげたい。なお、◎印は主な違い、○印は、細かな違いと考えられ、参考までに付けてみた。◎印の違いについては授業で押さえたい。

(2)（手順）

1　(1)であげたものを参考に、二作品の作風の違いを考える。

・「筒井筒」は歌が多く、物語の中で歌の果たす役割が多い。

・「沖つ白浪」は、具体的な説明が多い。また、「かき抱きてなむ寝にける」等少し露骨な描写に思えたり、金椀に入れた水が女の嫉妬で燃える体の熱さのために沸騰する、等現実にはあり得ない誇張的な描写も見られる。雅さに書けるという見方もできる。

2　生徒の意見を受けて、右のように板書にまとめる等する。最後にどちらの作品が好きかと問いかけて聞いてみるのもよい。

（植田　敦子）

◆読み比べ◆

沖つ白浪（『大和物語』）

要旨

大和の国に男と女が思い合って暮らしていた。その後、女が貧しくなり、男は別の女のところに通うようになった。男を送り出す女の態度に女の異心を疑い、前栽のもとに隠れて見ていたら、女は男の身を案じる歌をうたい、また金椀に入った水が沸騰するほど男を思っていた。その女の気持ちを知り、女をいとおしく思った男は、新しい妻のところには通わなくなってしまった。

構成

段落	ページ・行	段意
第一	初め〜六七・5〈せさせけり。〉	大和の国に住んでいる男女がいて、女はたいそう美しく、思い合って暮らしていたが、女がたいそう貧しくなってしまったので、男は別の妻を作ってしまった。
第二	六七・6〈かくにぎははしき〉〜六七・10〈思ひけり。〉	裕福な女のところに通いなれて、たまにもとの女のところに来てみると、女はみすぼらしい様子をしていて、男がよその女のところに行くのを妬ましそうにもしていない。男が女のもとに泊まろうと思う夜も、「行きなさい」といったので、女がこのような態度であるのは、他の男を通わせているからだろうと男は思った。
第三	六七・11〈さて、出でて〉〜六八・2〈なむありける。〉	男は出ていくと見せかけて前栽のかげに隠れて見ていたところ、女は、月のたいそう美しい夜に、外に出て身だしなみを整えて、男の身を案じる歌を詠んだ。男はそのことがわかり、女のことをたいそういとおしく思った。

第四	六八・3〈かくて、なほ〉～六八・7〈ゐにけり。〉
第五	六八・8〈かくて、月日〉～終わり

さらに男が見ていたところ、女は金属製の椀に水を入れて胸に据え、その水が沸騰したので捨て、また水を入れていた。それを見て、たいそういとおしく思い、走り出して女を抱きかかえて寝てしまった。他のところにも全く行かなくなって、そのまま女のもとにいた。

月日が多く経って、通わなくなった女のことを思い出し、行ってみたところ、女はみすぼらしい服を着て、大きな櫛を額髪にさしていて、自身でご飯をよそっている姿を見て、幻滅し、その後通わなくなってしまった。

品詞分解と現代語訳

（表示は略号で示した。略号については巻末参照。）

①昔(むかし)、大和(やまと)の国(くに)葛城(かづらき)の郡(こほり) に 住(す)む 男(をとこ)・女(をんな) あり けり。②こ の
（に 格助・場所／住む マ四・体／あり ラ変・用／けり 過・終／こ 代／の 格助・体修）

女(をんな)、顔(かほ)かたち いと 清(きよ)らなり。③年(とし)ごろ 思(おも)ひかはし て 住(す)む に、
（いと 副／清らなり 形動ナリ・終／思ひかはし サ変・用／て 接助・単接／住む マ四・体／に 接助・逆確）

こ の 女(をんな)、いと わろく なり に けれ ば、思(おも)ひわづらひ て、
（こ 代／の 格助・体修／いと 副／わろく 形ク・用／なり ラ四・用／に 完・用／けれ 過・已／ば 接助・順理／思ひわづらひ ハ四・用／て 接助・単接）

限(かぎ)りなく 思(おも)ひ ながら、妻(め) を まうけ て けり。④こ の 今(いま)
（限りなく 形ク・用／思ひ ハ四・用／ながら 接助・逆接／を 格助・対象／まうけ カ下二・用／て 完・用／けり 過・終／こ 代／の 格助・体修）

の 妻(め) は、富(と)み たる 女(をんな) に なむ あり ける。⑤ことに
（の 格助・体修／は 係助・区別／富み マ四・用／たる 存・体／に 断・用／なむ 係助・強意(係)／あり 補動・ラ変・用／ける 過・体(結)／ことに 形動ナリ・用）

思(おも)は ね ど、行(ゆ)け ば いみじう いたはり、身(み) の 装束(さうぞく)
（思は ハ四・未／ね 打・已／ど 接助・逆接／行け カ四・已／ば 接助・順恒／いみじう 形シク・用(ウ音)／いたはり ラ四・用／の 格助・体修）

も いと 清(きよ)らに せ させ けり。
（も 係助・同類／いと 副／清らに 形動ナリ・用／せ サ変・未／させ 使・用／けり 過・終）

⑥かく にぎははしき 所(ところ) に ならひ て、来(き) たれ ば、こ
（かく 副／にぎははしき 形シク・体／に 格助・場所／ならひ ハ四・用／て 接助・単接／来 カ変・用／たれ 完・已／ば 接助・順偶／こ 代）

の 女(をんな)、いと わろげに て ゐ て、かく ほか に
（の 格助・体修／いと 副／わろげに 形動ナリ・用／て 接助・単接／ゐ ワ上一・用／て 接助・単接／かく 副／に 格助・場所）

ありけ ど、さらに 妬(ねた)げに も 見(み)え ず など あれ ば、
（ありけ カ四・已／ど 接助・逆接／さらに 副／妬げに 形動ナリ・用／も 係助・同類／見え ヤ下二・未／ず 打・用／など 副助・例示／あれ ラ変・已／ば 接助・順理）

いと あはれ と 思(おも)ひ けり。⑦心地(ここち) に は、限(かぎ)りなく 妬(ねた)く
（いと 副／あはれ 形動ナリ・語幹／と 格助・引用／思ひ ハ四・用／けり 過・終／に 格助・場所／は 係助・区別／限りなく 形ク・用／妬く 形ク・用）

①昔、大和の国、葛城の郡に住む男と女がいた。②この女は、容貌がたいそう美しかった。③年来、互いに思い合って住んでいたが、この女は、たいそう貧しくなってしまったので、（男は）思い悩んで、（女のことを）この上なく大切に思いながら、他に妻を作ってしまった。④この今の妻は、裕福な女だったのである。⑤（この妻のことを）特別に愛しいとは思わないが、（男が）行けばたいそう大切にしてくれ、身にまとう装束もたいそう美しく整えさせなさった。

⑥このように裕福な所に慣れて、（もとの妻の所へ）来てみると、この女は、たいそうみすぼらしい様子で暮らしており、（男が）こうしてほかの女のところへ出歩くのに、嫉妬しているようにも全く見えないこともあり、（男は女を）ひどく不憫だと思った。⑦（女は）内心では、この上なく妬ましく辛く思っているのを、我慢してい

心憂く　思ふ　を、　忍ぶる　に　なむ　あり　ける。　⑧とどまり　な
形ク・用　八四・体　格助・対象　バ上二・体　断・用　係助・強意(係)　ラ変・用　過・体(結)　ラ四・用　強・未

む　と　思ふ　夜も、　なほ　「往ね。」　と　言ひ　けれ　ば、　わ
意・終　格助・引用　八四・体　係助・同類　副　ナ変・命　格助・引用　八四・用　過・已　接助・順理　代

が　かく　ありき　する　を　妬ま　で、　異わざ　する　に
格助・主格　副　サ変・体　格助・対象　マ四・未　接助・打消　サ変・体　断・用

や　あら　む、　さる　わざ　せ　ず　は　恨むる　こと　も
係助・疑問(係)　補動・ラ変・未　推・体(結)　ラ変・体　サ変・未　打・用　係助・区別　マ四・体　係助・同類

あり　な　む　など、　心　の　うち　に　思ひ　けり。
ラ変・用　強・未　推・終　副助・例示　格助・体修　格助・場所　八四・用　過・終

⑨さて、　出で　て　行く　と　見え　て、　前栽　の　中
接　ダ下二・用　接助・単接　カ四・終　格助・引用　ヤ下二・用　接助・単接　格助・体修

に　隠れ　て、　男　や　来る　と　見れ　ば、　端
格助・場所　ラ下二・用　接助・単接　係助・疑問(係)　カ変・体(結)　格助・引用　マ上一・已　接助・順偶

に　出で　ゐ　て、　月　の　いと　いみじう　おもしろき
格助・場所　ダ下二・用　ワ上一・用　接助・単接　格助・主格　副　形シク・用(ウ音)　形ク・体

に、　頭　かいけづり　など　し　て　を　り。　⑩夜　更る　まで
接助・単接　ラ四・用　副助・例示　サ変・用　接助・単接　ラ変・終　カ下二・体　副助・範囲

寝　ず、　いと　いたう　うち嘆き　て　ながめ　けれ　ば、　人
ナ下二・未　打・用　副　形ク・用(ウ音)　カ四・用　接助・単接　マ下二・用　過・已　接助・順偶

待つ　な　めり　と　見る　に、　使ふ　人　の　前　なり
タ四・体　断・体(撥音(無表記))　推・終　格助・引用　マ上二・体　接助・単接　八四・体　格助・同格　存・用

ける　に　言ひ　ける。
過・体　格助・対象　八四・用　過・体

るのだった。⑧(男がもとの妻の所に)泊まろうと思う夜も、(女は)やはり「(今の妻の元へ)行きなさい。」と言ったので、自分がこのように出歩くのを妬まず、(それでいて)他に男を通わせているのだろうか、そんなことをしないなら、きっと(自分を)恨むこともあろうなどと、心の中で思った。

⑨そこで、(男は)出て行くと見せかけて、庭の植え込みの中に隠れて、男が来るかと(思って)見ると、(女は)縁側に出て座って、月が実にたいそう美しい時分に、髪を櫛でとかしたりしている。⑩(女は)夜が更けるまで寝ず、たいそうひどく嘆いて物思いにふけっていたので、(男は)人を待つようだと思って見ていると、(女は)前にいた召し使いに言った。

⑪風吹けば　沖つ白浪　たつた山　夜半に　や
カ四・已　接助・順恒　格助・体修　格助・時間　係助・疑問(係)

君が　ひとり　越ゆらむ
格助・主格　ヤ下二・終　現推・体(結)

と　詠み　けれ　ば、わが　うへ　を　思ふ　なり　けり
格助・引用　マ四・用　過・已　接助・順理　代　格助・主格　格助・対象　八四・体　断用　過・終

と　思ふ　に、いと　かなしう　なり　ぬ。⑫この　今の
格助・引用　八四・体　接助・単接　副　形シク・用(ウ音)　ラ四・用　完・終　代　格助・体修

妻の　家は、竜田山　越え　て　行く　道に　なむ
格助・体修　係助・区別　ヤ下二・用　接助・単接　カ四・体　格助・場所　係助・強意(係)

あり　ける。
ラ変・用　過・体(結)

⑬かく　て、なほ　見　をり　けれ　ば、この　女、うち泣き
副　接助・単接　副　マ上一・用　ラ変・用　過・已　接助・順偶　代　格助・体修　カ四・用

て　伏し　て、金椀に　水を　入れ　て、胸に
接助・単接　サ四・用　接助・単接　格助・対象　格助・対象　ラ下二・用　接助・単接　格助・対象

なむ　据ゑ　たり　ける。⑭あやし、いかに　する　に　か
係助・強意(係)　ワ下二・用　存・用　過・体(結)　形シク・終　副　サ変・体　断・用　係助・疑問(係)

あら　む　とて、なほ　見る。⑮され　ば、この　水、熱湯
補動・ラ変・未　推・体(結)　格助・引用　副　マ上一・終　ラ変・已　接助・順偶　代　格助・体修

に　たぎり　ぬれ　ば、湯を　ふて　つ。⑯また　水を　入る。
格助・変化　ラ四・用　完・已　接助・順偶　夕下二・用　完・終　副　格助・対象　ラ下二・終

⑰見る　に　いと　かなしく　て、「いかなる　心地
マ上一・体　接助・単接　副　形シク・用　接助・単接　形動ナリ・体

に　たぎり　ぬれ　ば、湯を　ふて　つ。⑯また　水を　入る。
格助・変化　ラ四・用　完・已　接助・順偶　夕下二・用　完・終　副　格助・対象　ラ下二・終

⑰見る　に　いと　かなしく　て、「いかなる　心地
マ上一・体　接助・単接　副　形シク・用　接助・単接　形動ナリ・体

走り出で　て、
ダ下二・用　接助・単接

⑪風吹けば…風が吹けば沖の白波が立つというその竜田山を、夜中にあなたは一人で越えているのでしょうか。

と詠んだので、（男は）自分の身の上を案じているのだったよと思うと、たいそう愛しくなった。⑫この今の妻の家は、竜田山を越えて行く途中にあった。

⑬こうしてさらに見ていたところ、この女は、泣き伏して、金属製の碗に水を入れて、（それを）胸にあてていた。⑭おかしなこと、どうするのだろうと思って、なおも見る。⑮すると、この水が、熱湯へと沸き立ったので、（女は）湯を捨てた。⑯また水を入れる。⑰見ているとたいそう悲しくて、（男は思わず）走り出て、「どんなお気持ちになられて、このようになさるのですか。」と言って、（女を）抱きかかえて寝てしまった。⑱こうして、（男はそれ以来）よそへも全く行かずに、

し　給へ　ば、かく　は　し　給ふ
サ変・用　補動・八四・已（尊）男→もとの女　接助・順理　副　係助・強意　サ変・用　補動・八四・体（尊）男→もとの女

ぞ。」　と　言ひ　て、かき抱き　て　なむ　寝に　ける。
終助・疑問　格助・引用　八四・用　接助・単接　カ四・用　接助・単接　係助・強意（係）　ナ下二・用　完・用　過・体（結）

⑱かく　て、ほかへ　も　さらに　行か　で、つと　ゐ　に
副　接助・単接　格助・方向　係助・同類　副　カ四・未　接助・打消　副　ワ上二・用　完・用

けり。
過・終

⑲かく　て、月日　多く　経　て　思ひやる　やう、つれなき　顔
副　接助・単接　形ク・用　八下二・用　接助・単接　ラ四・体　形ク・体

なれ　ど、女　の　思ふ　こと　いと　いみじき　こと　なり　ける
断・已　接助・逆接　格助・主格　八四・体　副　形シク・体　断・用　過・体

を、かく　行か　ぬ　を　いかに　思ふ　らむ　と、思ひ出で
接助・逆確　副　カ四・未　打・体　格助・対象　副　八四・終　現推・終　格助・引用　ダ下二・用

て、あり　し　女　の　がり　行き　たり　けり。⑳久しく　行か
接助・単接　ラ四・用　過・体　格助・体修　カ四・用　完・用　過・終　形シク・体

ざり　けれ　ば、つつましく　て　立て　り　けり。㉑さて、垣間め
打・用　過・已　接助・順理　形シク・用　接助・単接　タ四・已　完・用　過・終　接　マ四・已

ば、我　に　は　よく　て　見え　しか　ど、いと　あやしき
接助・順偶　格助・対象　係助・区別　形ク・用　接助・単接　ヤ下二・用　過・已　接助・逆接　副　形シク・体

さま　なる　衣　を　着　て、大櫛　を　面櫛　に
断・体　格助・対象　カ上一・用　接助・単接　格助・対象　格助・状態

挿しかけ　て　を り、手づから　飯　盛り　を り　けり。㉒いと　いみじ
カ下二・用　接助・単接　ラ変・用　副　ラ四・用　ラ変・用　過・終　副　形シク・終

（この女のもとを）ずっと離れずにいた。

⑲こうして、多くの月日が経って（男が今の妻を）思いやることには、何気ない顔ではあるが、（女が心の中で）思うことは実に大変なものだったのだから、こうして（自分が）訪ねて行かないのを（今の妻は）どう思っているだろうと思い出して、例の女の元へ行ったのだった。⑳長らく行かなかったので、（男は）気が引けて（外に）立っていた。㉑そして垣根の隙間からのぞき見ると、（かつては）自分には美しいと見えたけれど、（今は）たいそうみすぼらしい着物を着て、大きな櫛を額髪につきさしていて、自らの手で飯を盛っていた。㉒全くひどいと思って、（もとの妻のところへ）帰って来たまま、（今の妻の元へは）行かなくなってしまった。㉓この男は王族で

と　思ひ（おも）て、来（き）に　ける　ままに、行か　ず　なり　あった。
格助・引用　八四・用　接助・単接　カ変・用　完・用　過・体　連語（名＋格助・状態）　カ四・未　打・体　ラ変・用
に　けり。㉓この　男（をとこ）は　王（おほきみ）　なり　けり。（第百四十九段）
完・用　過・終　代　格助・体修　格助・区別　断・用　過・終

指導上の注意点

●六七ページ

問 **「思ひわづらひて」（2行目）の主語は誰か。**

答 男。

問 **「ことに思はねど」（5行目）とはどういう意味か。**

答 男が今の妻を特別にかわいいと思っているわけではなかったが

問 **「さらに妬げにも見えずなどあれば」（7行目）とはどういう意味か。**

答 嫉妬しているようにも全く見えないこともあり

補 「さらに～打ち消し」で、「全く～ない」の意味になる。

問 **「とどまりなむ」（8行目）について**

(1)主語は誰か。

(2)「な」を文法的に説明せよ。

答 (1)男。(2)完了の助動詞「ぬ」の未然形で、ここでは強意の意味になる。

問 **「異わざする」（9行目）とはここではどのようなことか。**

答 女が他に男を通わせていること。浮気をすること。

問 **「さるわざ」（10行目）とは何をさすか。**

答 「ことわざ」と同意で、他の男を通わせていること。

語句の研究

●六七ページ

2大和の国　現在の奈良県。

2葛城の郡　現在の奈良県西部の御所市と葛城市の辺り。

2清らなり　美しかった。「清げなり」と比べ、第一級の美しさを示す。

3わろくなりにければ　貧しくなってしまったので。生活が不如意になったことをいう。

4限りなく思ひながら　この上なく大切に思いながら。

4妻をまうけてけり　ほかに妻を作ってしまった。本話では、「今の妻」と呼ばれる。

5せさせけり　整えさせなさった。サ行変格活用動詞「す」の未然形「せ」に使役の助動詞「さす」の連用形「させ」が付いた形。「けり」は過去の助動詞「けり」の終止形。

6にぎははしき　裕福で繁栄している様子。

6ならひて　慣れて。裕福な今の妻のもとにいることに慣れてしまったことをいう。

6来たれば　（もとの女の所へ）来てみると。この一段の中で、もとの女の所へ訪れる折は「来」が使われ、今の妻の所へ訪れる折は「行く」が用いられる。

6いとわろげにゐて　たいそうみすぼらしい様子で暮らしており。今の妻の「にぎははしき」様子に対して、困窮した有様。

7さらに妬げにも見えず　嫉妬しているようにも全く見えない。

7心地には　内心では。

8心憂く思ふを　辛く思っているのを。

8忍ぶるになむありける　我慢しているのだった。「忍ぶる」はバ行上二段活用。他に、「偲ぶ」に由来する四段活用の例（未然形「忍ばず」など）も見られる。

9なほ　やはり。

9往ね　行きなさい。ナ行変格活用動詞「往ぬ」の命令形。本心を隠して今の妻の元へ行くよう勧める。

9異わざするにやあらむ　ほかに男を通わせているのだろうか。

10さるわざせずは　そんなことをしないなら。

11前栽　庭の植え込み。せんざい。『伊勢物語』の「筒井筒」でも「前栽の中に隠れゐて」とあった。

11男や来る　男が来るかと。「や」は係助詞。「来る」はカ行変格活用動詞「来」の連体形。

11端　縁側。

問「前栽」（11行目）の読みと意味はなにか。

答　読み　せんざい　意味　庭の植え込み

問「頭かいけづり」（12行目）とはどのようなことを意味するのか。

答　身だしなみを整えている。

問「いたう」（13行目）について説明せよ。

答　形容詞・ク活用・連用形「いたく」のウ音便化したもので、ここでは「ひどく」という意味を持つ。

問「なめり」（13行目）を文法的に説明せよ。

答　「な」は断定の助動詞「なり」の連体形の撥音便、「ん」の無表記、「めり」は視覚による推定の助動詞「めり」の終止形。

補　前栽に隠れて見ているので「めり」が使われている。

問「風吹けば」（15行目）の歌に見られる修辞上の技巧を説明せよ。

答　序詞・掛詞

補　「語句の研究」参照

問「風吹けば」（15行目）に込められている女の気持ちはどのようなものか。

答　ひたすらに夫を思い、今は旅にあって危険な山道をも行くであろう夫の身の上を気遣う気持ち。

補　「夜半にや君がひとり越ゆらむ」が、夫を気遣う内容になることに注意させる。

問「越ゆらむ」（15行目）の「らむ」を文法的に説明せよ。

答　現在推量の助動詞「らむ」の連体形。

●六八ページ

問「なりけり」（1行目）の「けり」には、男のどのような思いがあらわれているか。

答　詠嘆の助動詞で、自分のことを案じてくれている女の思いに対する感動。

補　「なりけり」の「けり」は詠嘆であることが多い。

問「かなし」（1行目）に漢字をあてよ。またここでの意味を答えよ。

答　「愛し」・いとしい

問「かく」（6行目）のさす内容を答えよ。

答　金椀に水を入れて胸に据えて、その水が沸騰したので湯を捨て、また水をいれる。

問「つれなき顔」（8行目）とは誰のどういう顔か。

答　河内の国の女の何気ない様子の顔。

問「あやしきさま」（11行目）の意味を答えよ。

答　みすぼらしい様子

補　「賤し」の漢字をあてる。

問「大櫛を面櫛に挿しかけてをり」（11行目）という描写は、女のどのような様子を表しているか。

答　女のはしたない様子。

補　人が見ていない時は見るかげもない様子であることを言い、大和の女と対比的に描いたりしている。

13月のいといみじうおもしろきに　月が実にたいそう風情があり美しい時分に。

13使ふ人　召し使い。

15風吹けば…　「筒井筒」語句の研究参照。

●六八ページ

1わがうへを思ふなりけり　自分の身の上を案じているのだったよ。

1かなしうなりぬ　愛おしくなった。「かなしう」は「かなしく」のウ音便。

3金椀　金属製の椀。

5ふてつ　捨てた。『かたこと』（一六五年）に「捨るといふべきを、ふつるといふは如何」とあるが、同時代の用例は確認されない。

5いとかなしくて　たいそう愛おしくて。先の「いとかなしうなりぬ」の感情を再び抱いた。

7つとゐにけり　（この女のそばを）ずっと離れずにいた。

8月日多く経て思ひやるやう　多くの月日が経って思いやることには。「つとゐにけり」という状況で久しく会わない今の妻のことを思いやる。

8つれなき顔　何気ない顔。内心を顔に出さ

ている。

問 **「この男は王なりけり」（13行目）という一文があることは、どのような効果があるか。**

答 「王」はここでは在原業平を指すので、業平が主人公の物語と読めるように、全体が再構成される。

ない。

9ありし女のがり　今の妻の所へ。「がり」は代名詞や人を表わす名詞に付いて、その人の許へ、という意を表す。「があり」「かあり」の変化したものと言われる。

10つつましくて立てりけり　気が引けて（外に）立っていた。

10垣間めば　垣根の隙間からのぞき見ると。

11大櫛を面櫛に挿しかけてをり　大きな櫛を額髪に挿していて。

12来にけるままに　帰って来たまま。

13王　天皇の子や孫で、親王宣下を受けない男子。平城天皇の孫に当たる在原業平（「芥川」語句の研究「昔、男ありけり」の項参照）をほのめかす。

梓弓

（第二十四段）

要旨

昔、ある田舎の男が宮仕えをしに上京して、三年も音信が途絶え、残された妻は、慕い寄る新しい男と結婚をすることにした。その結婚の当日、昔の男が戻って来たが、女に結婚をすることを告げられて、真心のこもった愛の歌を詠んで帰ってしまった。女は、男への変わらぬ思いに動かされて、男の後を追ったが、追いつけずに、とある清水の傍らで、倒れ、岩に指の血で歌を書き付け、死んでしまった。

構成

段落	ページ・行	段意
第一	初め～P六九・6（新枕すれ）	昔、片田舎に住んでいた男が宮仕えのため上京し、三年もの間音信が途絶えた。残された妻は、長年懇ろに求婚してきた男と結婚することにした。
第二	P六九・7（と言ひ出だしたりければ、）～P六九・11（男帰りにけり。）	その結婚の当日、男が戻ってきたが、女に別の男と今日結婚することを告げられて、男は自分の女への愛と新しい夫との幸せを願う歌を詠んだ。女も男への変わらぬ気持ちを詠んだが、男は帰ってしまった。
第三	P六九・11（女、いとかなしくて）～終わり	ひどく悲しく思った女は、男の後を追ったが追いつけずに、とある清水の傍らで倒れ、岩に指の血で歌を書き付け、死んでしまった。

品詞分解と現代語訳

（表示は略号で示した。略号については巻末参照。）

①昔、男、片田舎に　住み　けり。
格助・場所　マ四・用　過・終

②男、宮仕へし　に
サ変・用　格助・目的

三年　来　に、
カ変・未　格助・状態

いと　ねむごろに
形動ナリ・用

契り　たり　ける　に、
ラ四・用　完・用　過・体　格助・時間

戸　開け　給へ。」
カ下二・用　補動・ハ四・命(尊)男→女

③「この
代　格助・体修

歌　を　なむ　詠み　て　ただ　今
格助・対象　係助・強意(係)　マ四・用　接助・理由　副

とて、別れ　惜しみ　て　行き　に　ける　まま　に、
格助・引用　マ四・用　接助・単接　カ四・用　完・用　過・体

ざり　けれ　ば、待ち　わび　たり　ける　に、
打・用　過・已　接助・順理　バ上二・用(タ四・用＋補動)　存・用　過・体

言ひ　ける　人　に、今宵　会は　む　と
八四・用　過・体　格助・対象　八四・未　意・終　格助・引用

この　男　来　たり　けり。
代　格助・体修　カ変・用　完・用　過・終

と　たたき　けれ　ど、開け　で、
格助・引用　カ四・用　過・已　接助・逆確　カ下二・未　接助・打接

て　出だし　たり　ける。
接助・単接　サ四・用　完・用　過・体(結)

④あらたまの　年　の　三年　を　待ち　わび　て　ただ　今
(枕)　格助・体修　格助・経時　バ上二・用(タ四・用＋補動)　接助・理由　副

宵　こそ　新枕　すれ
係助・強意(係)　サ変・已(結)

と　言ひ出だし　たり　けれ　ば、
格助・引用　サ四・用　完・用　過・已　接助・順理

⑤梓弓ま弓槻弓　年　を　経　て　我が　せ　し　が
(序)　格助・経時　八下二・用　接助・単接　代　格助・主格　サ変・未　過・体　格助・体修

①昔、ある男が、片田舎に住んでいた。②男は、（都で）宮中勤めをしに（行く）と言って、（女と）別れを惜しんで行ってしまったまま、三年帰ってこなかったので、（女が）待ちくたびれていた頃に、たいそう懇ろに求婚してきた人に、今夜逢おうと（結婚の）約束を交わしたその日に、この（昔の）男が帰って来た。③（男は）「この戸を開けてください。」と（言って、戸を）たたいたが、（女は）開けないで、歌を詠んで（男に）差し出したのだった。

④あらたまの…三年もの間待ちくたびれて過ごしてきましたが、私はちょうど今夜、ある方と新枕を交わすのです。

と詠んで差し出したところ、（男は）

⑤梓弓…長い年月を重ねて、私があな

ごと　うるはし　み　　せよ
比・語幹　ミ語法（形シク・語幹＋接尾）　サ変・命

と　言ひ　て、　往な　む　と　し　けれ　ば、　女、
格助・引用　八四・用　接助・単接　ナ変・未　意・終　格助・引用　サ変・用　過・已　接助・順理

⑥梓弓（枕）　引け　ど　引か　ね　ど　昔　より　心　は　君
カ四・已　接助・逆恒　カ四・未　打・已　接助・逆恒　格助・起点　係助・区別

に　より　に　し　ものを
格助・対象　ラ四・用　完・用　過・体　終助・詠嘆

と　言ひ　けれ　ど、　男　帰り　に　けり。　⑦女、　いと　かなしく
格助・引用　八四・用　過・已　接助・逆確　ラ四・用　完・用　過・終　副　形シク・用

て、　後　に　立ち　て　追ひ行け　ど、　え　追ひつか　で、　清
接助・単接　格助・場所　タ四・用　接助・単接　カ四・已　接助・逆確　副　カ四・未　接助・打接

水　の　ある　所　に　伏し　に　けり。　⑧そこ　なり　ける　岩
格助・主格　ラ変・体　格助・場所　サ四・用　完・用　過・終　代　在・用　過・体

に、　指　の　血　して　書きつけ　ける。
格助・対象　格助・体修　格助・手段　カ下二・用　過・体

⑨あひ思は　で　離れ　ぬる　人　を　とどめ　かね　我
八四・未　接助・打接　ラ下二・用　完・体　格助・対象　ナ下二・用（マ下二・用＋補動）　代

が　身　は　今　ぞ　消え果て　ぬ　める
格助・体修　係助・提示　係助・強意（係）　タ下二・用　完・終　定・体・結）

と　書き　て、　そこ　に　いたづらに　なり　に　けり。
格助・引用　カ四・用　接助・単接　代　格助・場所　形動ナリ・用　ラ四・用　完・用　過・終

たを愛したように、新しい夫を愛して、むつまじく暮らしなさい。

と（男は）詠んで、立ち去ろうとしたので、女は、

⑥梓弓…あなたの私へのお心はどうであっても、私の心は昔からあなたにお寄せしておりましたのに。

と詠んだけれども、男は帰ってしまった。⑦女は、ひどく悲しく思い、（男の）後について追って行ったが、追いつくことができず、清水が湧いている所（まで行って、そこ）に倒れ伏してしまった。⑧（女は）そこにあった岩に、指の血で書き付けた。

⑨あひ思はで…私が思っているのに、私のことを思ってくれないで離れて行ってしまった人を、引き止めることができなくて、私の身は今、こうして絶え果ててしまうようです。

と書いて、その場で死んでしまった。

学習活動のポイント

展開

学習活動のポイント

❶ 梓弓とは何かを想像する。知技(1)ア
❷ 全文を音読する。思判表B(1)ア
❸ 重要古語の意味・用法を確認する。知技(1)ウ・(2)ウエ
→「言葉と表現」1
❹ 現代語訳する。知技(1)エ　思判表B(1)ア
❺ 四首の歌を解釈する。思判表B(1)イ
→「学習のポイント」1
❻ 男の歌に表された何が、女の気持ちを変化させ、後を追わせたのかを考える。
❼ 血文字で歌を書きつけた女の心情を考える。

❶言葉から来るイメージを描かせる。
【評価】言葉には、文化の継承、発展、創造を支える働きがあることを理解しているか、確認する。
❷範読を聞かせた後、単独読みや一斉読みなどをさせる。音読することによって、全体の構成もつかむ。
【評価】文章の種類を踏まえて、内容や構成、展開などについて叙述を基に的確に捉えているか、音読により、確認する。
❸四首の枕詞・序詞、「わぶ」「うるわしみす」「よる」「かぬ」の意味を辞書で調べさせ、古語と現代語の意味の違いに着目させる。「かなし」「いたづらに」など、主題にかかわる語句の意味にも注意させる。また、係り結びの用法を確認させ、女の困惑した心情を強調していることに気づかせる。
【評価】・序詞、枕詞を調べることにより、我が国の言語文化に特徴的な語句の量を増し、それらの文化的背景について理解を深め、語感を磨き語彙を豊かにしているか、確認する。
・重要古語を辞書で調べる、係り結びの用法を確認させることを通して、古典の世界に親しむために、古典を読むために必要な文語のきまりや、古典特有の表現などについて理解しているか、テストなどで確認する。
・古今異義語に着目させることで、時間の経過による文字や言葉の変化について理解を深め、古典の言葉と現代の言葉とのつながりについて理解しているか、テストなどで確認する。
❹三人（男（夫）・女・新しい男）の関係を明確にしたうえで、物語の流れをつかませる。
【評価】文章の意味は、文脈の中で形成されることを理解しているか、現代語訳により、確認する。
・現代語訳をさせることにより、文章の種類を踏まえて、内容や構成、展開などについて叙述を基に的確に捉えているか、プリント、ノート提出などによって確認する。

❺歌に詠まれた女・男それぞれの心情を読み取る。特に女の気持ちが変化していくことに着目する。

【評価】歌に詠まれた心情を読み取ることにより、作品や文章の成立した背景や他の作品などとの関係を踏まえ、内容の解釈を深めているか、確認する。

❻男（夫）の女への思いやりが、新しい男と生きようとしていた女に、男との深い愛を思い起こさせたことに気づかせる。

❼女の情の深さ、無念さ、諦念などを読み取らせる。

まとめと発展

学習活動のポイント

❶女の死という結末の印象を話し合う。主態 →「言語活動」1

❷女（男）の生き方について考える。思判表B(1)エ

❶女の死が必然のものとして感じられるのは、生の純粋さ、燃焼度の高さによることを気づかせる。女の生きる世界は男との過去でしかなく、死をもって終わることしかなかったことを理解させる。

【評価】学習課題に沿って、「そこにいたづらになりにけり」という結末が「梓弓」をどのように印象付けているかについて、粘り強く話し合っているか、分析する。

❷〝もし自分が女（男）だったら〟と仮定した短い感想文を書かせて、それぞれの心情をより深く読み取らせる。それぞれの感想文を発表し合い、さらに考えさせる。

【評価】作品や文章の成立した背景や他の作品などとの関係を踏まえ、内容の解釈を深めているか、感想文や感想文の発表によって確認する。

指導上の注意点

●六九ページ

問 **「男、宮仕へしに」（2行目）の後に省略されている語句は何か。**

答 「行かむ」。

問 **◉「この男」（4行目）とは、誰のことか。**

答 「宮仕へしに」上京した男。

問 **女はなぜ他の男と再婚することにしたのか。**

答 昔の男から三年間音沙汰がなく、新しい男が親切に言い寄って来たから。

補 「待ちわび」の「わぶ」に着目させ、男への愛はそのままに、新しい男の熱心さに結婚を承諾したらしいことを読み取らせる。

問 **「あらたまの」（6行目）の歌に見られる修辞上の技巧をあげよ。**

答 「あらたまの」が「年」を導く枕詞。

補 「あらたまの」は、「年」「月」「日」「春」などを導く枕詞である。

問 **「あらたまの」（6行目）の歌に込められた女の気持ちを述べよ。**

答 新しい男と今後の人生を送る決意と、よりによって新しい男との「新枕」の日に帰ってくるなんてという困惑が表されている。

補 「こそ…すれ」という係り結びに着目させ、女の驚き嘆く内面を想像させる。

問 **女が、男と顔を合わせることなく、このよ**

語句の研究

●六九ページ

2宮仕へ　宮廷や貴人の邸宅に仕えることで、ここは、そのために都に行ったことを言う。

2行きにけるままに　「行ってしまったまま、行ってしまったきり」。「ままに」は「そのまま」の意の名詞「まま」＋状態を表す格助詞「に」で、「…そのままで」の意。

3三年　「令（りょう）」の戸令（こりょう）に、「已に成ると雖も、その夫外蕃に没落して、子有りて五年、子無くして三年帰らざるとき、及び逃亡し、子有りて三年、子無くして二年出でざる者は、並びに改嫁を聴す。」とあり、夫が消息不明で三年も経てば他に嫁してもかまわない習慣などにより、「三年来ざりければ」としたものと考えられる。ただし、その解釈を否定する見解（黒澤弘光ほか「心にグッとくる日本の古典」ＮＴＴ出版　平二十三）もある。女の待ちわびた気持ちや三年という月日の長さなどを生徒に感じさせたい。

3待ちわびたりけるに　「わぶ」は思いどおりにならずに気落ちしたり、困惑したりする状態を言う語で、補助動詞として用いて、「…しかねて思い悩む、…する気力を失う」の意を添える。「に」は、時間を表す格助詞とする解釈（「日本古典文学大系」ほか）に従ったが、「待ちくたびれて」「待ちわびていたが」「待ちくたびれていたので」など、接続助詞ととる注釈も多い。

4会はむ　「会ふ」は、ここは、男女が夫婦として交わることを言う。

5出だしたりける　外にいる男に歌を出したということで、女が男に会うことなく、事情を伝えたことを表す。

6あらたまの…　「続古今集」恋四に「よみ人知らず」としてあるが、「伊勢物語」からとったものであろう。「ただ」は「直接に、ちょうど、すぐに」などの意の副詞。「新枕」は、男女が初めて共寝をすること。

8梓弓ま弓…　「梓弓ま弓槻弓」の句は、「神楽歌」の「弓といへば品なきものを梓弓ま弓槻弓品も求めず」（一説に「品こそありけれ」または「品こそあるらし」とする）を本歌とするか。「梓弓」「ま弓」「槻弓」は、それぞれ、梓・檀（まゆみ）・槻の木で作った丸木の弓で、「弓」が月を連想させ、「槻」に「月」を掛けて「年」を導く序詞としたもの。なお、先の「神楽歌」をもとに、「し

うな歌を詠み、帰そうとしたのはなぜか。
補 答 新しい男と今後の人生を送る決意をしたから。女は、自分の今の状況を伝えたうえで、男の出方を見たかったのかもしれないことにも触れる。

問 **「梓弓まゆみ槻弓」（8行目）とは何か。**
答 それぞれ梓・檀（まゆみ）・槻の木で作った丸木の弓。

補 「年」を導く序詞。

「槻」に「月」を掛けて「年」の序詞としたもの。「神楽歌」の本歌にも触れるとよい。

問 **「梓弓まゆみ弓」（8行目）の歌に込められた男の気持ちを述べよ。**
答 二人の愛は既に過去のものとなったことを無理に自身に納得させて立ち去ろうとしている。

補 「我がせしがごと」に着目させ、改めて過ぎ去った過去の時の重さを感じていることを理解させる。

問 **「梓弓引けど」（10行目）の歌に見られる修辞上の技巧をあげよ。**
答 「梓弓」が「引く」を導く枕詞。

補 「梓弓」は「引く」「はる」「いる」「音」などを導く枕詞である。

問 **「梓弓引けど」（10行目）の歌に込められた女の気持ちを述べよ。**
答 依然として男への愛は変わらないという気持ち。

補 男の歌を聞き、男との過去を思い出し、自身の真の気持ちに気づく。

なじなのつらいことをしのんで」の意を込めたとする解釈や、弓は男が手に取るものだから、弓を女にたとえて、もとの男が新しい男に「この女を、私が愛したように、あなたも愛しなさい」と言ったものとする解釈がある。「うるはし」は、「きちんと整って端麗だ」の意で、人間関係に用いて、「礼儀正しい、折り目正しい、仲がよい」の意になる。「み」は、形容詞の語幹について名詞化するはたらきを持つ接尾語。

10 梓弓引けど…　「万葉集」巻十二「梓弓末のたづきは知らねども心は君によりにしものを」（「古今六帖」第五にも）、「古今集」恋二に「梓弓引けば本末我が方によるこそまされ恋の心は」（春道列樹）、その他の類歌がある。弓を引くと上下の端（本末）が寄るところから、「よる」と「弓」とは縁語。「引けど引かねど」は、「（あなたが私の心を）引こうが引くまいが」の意で、「ど」は逆接恒常条件の接続助詞。もとの男（歌の相手）が女の心を引く意に解したが、他の男が私の心をと解する説もある。もとの男が「我がせしがごと」と言うのに序とした「梓弓」を受けて、「梓弓」が引くと言っているので、「他の男が」とする解は不自然か。「ものを」には接続助詞と終助詞の用法があるが、ここは詠嘆の意を含んでいるので終助詞。「…なのになあ」という逆接のニュアンスを含んだ詠嘆の意。

11 後に立ちて　「後（しり）」は、物の後部に当たる所や、細長い物の末端を言う語で、ここは、「後ろ、後方」の意。

12 清水のある所　水を飲もうとしたのであろうとする注（「日本古典文学大系」ほか）があるが、それも含めて、激しい活動の後の休息の場として、水辺がふさわしいと思われ、ここでは、それが生の休止の場にもなるのである。

12 指　「名義抄（みょうぎしょう）」に「指、ユビ、俗云オヨビ」とある。

14 あひ思はで…　「あひ思ふ」は互いに愛し合うこと。「あひ思はで」で「私が思っているのに、あなたは私のことを思ってくれないで」の意になる。「とどめかね」の「かね」は「…することができない、…することに耐えられない」の意を添える補助動詞「かぬ」の連用形。

●七〇ページ

1 いたづらになりにけり　「いたづらなり」は「無駄だ、無益だ、空虚だ、むなしい」の意の形容動詞。「いたづらになる」で、死ぬことを表す。

問 **女が昔の男を追うに至る心の推移を述べよ。**

答 新しい男との結婚を一度は決意したが、昔の男の歌を聞いて過去のことを思い出し、自身の男への変わらぬ愛に気づき、帰ってしまった男に逢いたい、男の愛を取り戻したいという熱情にかられた。

問 **「あひ思はで」（14行目）の歌に込められた女の気持ちを述べよ。**

答 男の愛が永遠に失われてしまったことへの嘆きと力尽きて死んでいく女の静かな諦念。

補 「伏しにけり。」（六九・12）「消え果てぬめる」（同・14）に着目させ、清水のほとりで指の血で岩に歌を書き付けて死んでいく女の気持ちを読み取らせる。

鑑賞

この第二十四段と前の「筒井筒」の段とは、同じ「田舎」を舞台とした、男女の三角関係の話である。二十三段と二十四段を比較すると、一人の男と二人の女に対して二人の男と一人の女、主人公夫婦のハッピーエンドに対して女の悲劇的な死の結末、というような対照性がある。しかも、中心は、女の変わらぬ純情が主題となっていて、業平の歌によらない二つの説話をここに並べたのは、このような物語の特性への興味があるように思われる。

第二十三段では、男の心がもとの女に戻ってくるのが歌徳説話による構想に従っているためか、女の純真を印象づけるものが「いとよう化粧じて」しかなく、訴えるものがやや弱い感がある。一方、第二十四段では、ただただその女の哀れに集中していて、女の愛の純一さに心打つものがある。男の音信が途絶えて「三年来ざりければ」「待ちわびて」と、女が三年もの長い間男のことを待ちわびて、思いを残しながらも、「いとねむごろに言ひける人」の求婚を受け入れることになった経緯が語られている。女は、昔の男に対する愛をなくしたり、自分を捨てた男を恨んだりしたのではなく、男への愛はそのままに、「ねむごろに」情愛を示してくれる男と残りの人生を生きていくことにしたと言うのであろう。その新枕を交わすと決めた日に、昔の男が帰ってきたという衝撃の中でも、まずは男と顔を合わせることなく、帰そうとしているのは、女の、自分の後半生の生き方として選び取った現実に生きる、つつましやかな姿である。

「あらたまの」以下の三首の歌は、よくこのときの女の心の有り様を表していて、この段をより魅力のあるものにしている。「あらたまの」の歌は、今宵は新枕を交わすことになっているという事実を単純に伝える表現に、思いがけない成り行きとなったことへの驚きと嘆きを痛切に感じさせる。それに答えた男の歌は、この段であくまでもワキを演じる男らしく、「梓弓ま弓槻弓」という、神秘的な霊威を感じさせるイメージで「年月」を示して、「我がせしがごと」と提示された男との愛の世界は、女をたちまち「昔より心は君によりにし」という思いに引き戻してしまう。「ねむごろに言ひける人」と共に生きようとした現実の生活は、「君によりにし」世界が女にとって真の生であったことの前に、全く意味を失うのである。

去った男の「しりに立ちて追ひゆ」く道行きの間に、女の生は激しく燃焼し尽くしてしまうのであって、清水のほとりで倒れ死んだという結末は、唐突な印象とはならず、女の愛の純一さを描き出したものとなっている。清水のほとりに倒れた女と、傍らの岩に血文字でしたためられた辞世の歌とは、誠に鮮烈な絵となって、女の哀切な死を描き尽くしている。「あひ思はで離れぬる人」には、失われたものへの嘆きが、「我が身は今ぞ消え果てぬめる」には、沈んだ諦念が、しみじみと歌い出されている。

《板書例》「男」と「女」の気持ち

㊛ 枕詞 あらたまの 年 の三年を待ちわびて
ただ 今宵 こそ 新枕 すれ　係り結び
——→・結婚の事実を告げる
・なぜよりによって今夜という思い（驚きと嘆き）

㊚ 序詞 梓弓ま弓槻弓 年 を経て
我がせ 過去 し がごとううるはしみせよ
——→自分は身を引き、女の幸せを願う気持ち

㊛ 枕詞 梓弓 引け ど引かねど昔より
詠嘆
心は君によりにしものを　〜のに
——→夫に対する深い愛を思い知る

㊛ あひ思は 打消 で 離れぬる人をとどめ かね　〜できない
互いに
我が身は今 ぞ 消え果てぬ める　係り結び　推定
——→・夫を失ってしまった絶望
・死にゆく自分への諦念

深い学びのために

学習のポイントの解答例

1 **本文中のそれぞれの歌は「男」または「女」のどのような気持ちを述べたものか、状況を踏まえて考えてみよう。**

【答】 ①「あらたまの」の歌…今宵新枕を交わすという現実を述べながら、そんなときに帰ってくるなんてという、女の驚きと嘆きの気持ち。②「梓弓ま弓槻弓」の歌…長い年月を示し、女への愛情は過去のものとして身を引こうとする気持ち。③「梓弓」の歌…男の諦めの言葉に、女の中には一瞬にして男への愛情がよみがえり、男を愛することが女にとっての真実の生であるという激しい気持ち。④「あひ思はで」の歌…男を永遠に失ってしまったという嘆きと、死んでいく今、静かな諦念の気持ち。

▼ポイント▲ ①「ただ今宵こそ新枕すれ」の係り結びに込められた女の気持ちを読み取らせる。②「我がせしがごと」という過去表現に込められた男の気持ちを読み取らせる。③「昔より心は君によりにしものを」に込められた女の気持ちを読み取らせる。④「今ぞ消え果てぬめる」に込められた女の気持ちを読み取らせる。

《板書例》「男」と「女」の気持ち

㊛ 枕詞 あらたまの 年 の三年を待ちわびて
ただ 今宵 こそ 新枕 すれ　（係り結び）
——→・結婚の事実を告げる
・なぜよりによって今夜という思い（驚きと嘆き）

㊚ 序詞 梓弓ま弓槻弓 年 を経て　（過去）
我がせ し がごとうるはしみせよ
——→自分は身を引き、女の幸せを願う気持ち

㊛ 枕詞 梓弓 引け ど引かねど昔より　（詠嘆）
心は君によりにし ものを　（〜のに）
——→夫に対する深い愛を思い知る

㊛ あひ思は で（打消） 離れぬる人をとどめ かね（〜できない）
我が身は今 ぞ（係り結び） 消え果てぬ める（推定）
——→・夫を失ってしまった絶望
・死にゆく自分への諦念

言葉と表現の解答例

1 **本文中から係り結びを起こす係助詞を抜き出し、その結びの語を指摘してみよう。**

【答】 ①係り「なむ」（六九・5）・結び「ける」　②係り「こそ」（同・6）・結び「すれ」　③係り「ぞ」（同・14）・結び「める」

▼ポイント▲　係り結びは単に語句として捉えるだけでなく、そこに強い思いが込められていることを読み取らせる。係りの言葉は基本的にその上の語を強調する。「歌をなむ詠みて出だしたりける。」では「なむ」が「（戸は開けないで）歌を」という意を、「今宵こそ新枕すれ」では「（新しい夫と新枕を交わす）よりによって今夜」という意を、「我が身は今ぞ消え果てぬめる」では「今まさに」（消え果てようとしている）、という意を強調している。

言語活動の解答例

1 **「あひ思はで」の歌を書きつけた後、「そこにいたづらになりにけり。」（七〇・1）という結末は、この話をどのように印象付けているか、話し合ってみよう。**

【意図】 女の生の純一さ、燃焼度の高さを印象付けていることに気づかせる。

（手順）

1　「あひ思はで」の歌の解釈を確認する。

私が思っているのに、私のことを思ってくれないで離れて行ってしまった人を、引きとめることができなくて、私の身は今、こうして絶え果ててしまうようです。

2　「そこにいたづらになりにけり」とはどういうことか確認する。

女は歌を書きつけてそこで死んでしまったことを確認する。

3　この結末が、この話をどのように印象づけているか、ペアなどで話し合う。

4　話し合ったことを発表する。

感想として話し合う設問で、二〇〇字から四〇〇字程度の鑑賞文を書くような扱いにしてもよい。

▼ポイント▲　女の死が、一連の心情の流れの結末としてしっかりと納まっていることを感じさせて、そのように必然のものと感じられるのは、女の生の純一さ、燃焼度の高さによることを味わわせたいところである。女の生きる最後の世界は、男との過去に向かって走ることしかなかったわけで、死をもって終わるしかなかったのである。

（植田　敦子）

古文の窓❸

平安文学の恋

教材のねらい

『伊勢物語』と『大和物語』の学習をふまえて、平安文学の恋のあり方について体系的に総括する。「かいま見」や手紙のはたす役割を知り、当時の結婚に関わる制度および慣習についても学習する。

解説

『伊勢物語』初段や『源氏物語』若紫巻など、「かいま見」は平安文学の恋の始まりとして描かれる。「かいま見」は「垣間見」の字の通り、垣根の隙間などから中の様子をのぞき見ることを言う。当時は高貴な身分の男女が直接顔を合わせることは稀で、物語において恋の契機となるのは「かいま見」であることが少なくなかった。身分違いの恋の場合は特にそうである。この単元で学習した「筒井筒」の「前栽の中に隠れゐて、河内へ往ぬる顔にて見れば」や「沖つ白浪」の「前栽の中に隠れて、男や来ると見ればば」という一節も、目的は異なるが「かいま見」である。文学手法としての「かいま見」については「参考」に掲げた吉海直人『「垣間見」る源氏物語―紫式部の手法を解析する』などに詳しい。

物語における「かいま見」は読者に印象づけられる場面が多く、『源氏物語』若菜上巻において、以前から女三の宮に恋心を抱いていた柏木がその気持ちを決定的なものとするのも、蹴鞠の場面で唐猫が御簾を引っ張り女三の宮の姿が見えるという「かいま見」であった。この巻を象徴する場面として絵にも多く描かれている。「かいま見」は源氏絵の重要なモチーフである。

「かいま見」とともに当時の恋のやりとりで重要なのが文（手紙）であり、そこでは文面に加え、和歌・筆跡・紙・折枝など、多くの要素で差出人の教養とセンスが問われた。もちろん、返信者側にも同じものが期待されることになる。手紙はお互い顔を合わせない中で、恋のかけ引きの道具として用いられた。『蜻蛉日記』や『和泉式部日記』の冒頭は、いずれも恋文によって二人の距離が縮まる様子を描く。平安文学における手紙の場面を紹介した上で、今日のメールやＳＮＳを通じたやりとりとの差異を生徒に考えてもらうのもよいだろう。当時の恋文のやりとりを考える上では、届ける役目を担う童達の活躍にも注目したい。また、先に挙げた柏木と女三の宮の恋についても、二人の密通が露見するのは、柏木の恋文を光源氏が女三の宮の寝所で見つけてしまったためで、手紙は物語を大きく揺さぶるアイテムでもある。

当時の結婚について学習する際に注意すべき点にも触れておきたい。

『源氏物語』の紫の上は光源氏の妻であるか。この問いに対し、もちろん妻だと答える方は平安時代は一夫多妻制であったとの考えを持っていると思われる。妻でないと答える方は、一夫一妻制の立場に立つということだろう。

平安時代の婚姻制度は一夫多妻制であるとの見方は多くの書籍に示されている。たとえば、藤井貞和『タブーと結婚―「源氏物

語」と阿闍世王コンプレックス論」のほうへ』（笠間書院、二〇〇七年）における、

いま、結婚慣行を見てくる限り、本来、正妻とそれ以外という区別は全体としてありえないんですよ。そういう正式の手つづきをほかの所でもとったとすれば、二人の妻ができてきて、どちらも正式の婚姻だということになります。もし区別があるとしたら、どちらが先かということ、それは厳然たる事実として出てきます。

などの主張である。それに対し、工藤重矩氏は、『平安朝の結婚制度と文学』（風間書房、一九九四年）などにおいて、養老律令の戸令や戸婚律（『万葉集』巻十八に引用される逸文）の婚姻規定を基に平安時代の婚姻制度は一夫一妻制であったと主張した。同氏の『源氏物語の結婚―平安朝の婚姻制度と恋愛譚』（中公新書、二〇一三年）から引用する。

平安時代の婚姻制度は、法的に妻として扱われるのは一人のみという意味で一夫一妻制である。したがって、結婚ということを厳密にいえば「妻」との関係のみを指すべきであるが、同時に「妾」と称される女性の存在も世間的には容認されていた。ただし、妾はあくまでも妾であって妻ではない。だが、継嗣や遺財処分等に関して妾及びその子の存在を認めた運用規定が存在していた。それで、平安貴族の婚姻状況の実態としては一夫一妻多妾ともいうべき状態であった。ここにいう一夫一妻多妾とは、法的な妻は一人だが、妾がいても世間的には容認されるという意味であり、妾が必ずいるとか、多くいるとかの意ではない。

夫婦は原則として同居することから、「通い婚」についても婚姻制度上は不適切な用語とされる。

一夫一妻制説の根拠となる「戸令」第八の条文を掲げておこう。

凡そ男の年十五、女の年十三以上にして、婚嫁聴せ。

凡そ女に嫁せむことは、皆先づ祖父母、父母、伯叔父姑、兄弟、外祖父母に由れよ。次に舅従母、従父兄弟に及ぼせ。若し舅従母、従父兄弟、同居共財せず、及び此の親無くは、並に女の欲する所に任せて婚主と為よ。

凡そ結婚已に定まつて、故無くして三月まで成らず、及び逃亡して一月までに還らず、若しくは外蕃に没落して一年までに還らざらむ、及び徒罪以上犯せらむ、女家離れむと欲せば、聴せ。已に成りたりと雖も、其の夫外蕃に没落して、子有るは五年、子無きは三年までに帰らず、及び逃亡して、子有るは三年、子無きは二年までに出こずは、並に改嫁聴せ。

凡そ先づ奸して、後に娶きて妻妾と為らば、赦に会ふと雖も、猶し離て。

『伊勢物語』の「梓弓」（六九ページ）に見られる「三年来ざりければ、待ちわびたりけるに、いとねむごろに言ひける人に、今宵会はむと契りたりけるに」の一節は、この条文に基づく慣習に由来すると考えられる。

また、「戸婚律」逸文（『万葉集』巻十八所収）には、

妻有りて更に娶る者は徒一年。女家は杖一百にして之を離せ。

との重婚禁止規定がある。少なくとも律令上は平安時代も一夫一妻制であり、一夫多妻制説を採る場合は、こうした規定が有名無実化していたと考えることになる。紫の上と女三の宮、あるいは

『蜻蛉日記』の道綱母と時姫をどのような関係として作品を読み取るかということにかかってくる。

工藤氏が述べるように、葵の上の死から女三の宮降嫁までと、女三の宮の出家後は、その間ずっと紫の上が共にいたとしても法的には妻が不在の状況ということになる。紫の上の「上」は正妻格を示す言葉だが、正妻のみを指すわけではない（ちなみに、明石の君は正妻格でもないため、古注以来よく用いられる明石の上の呼称は適切でない）。紫の上は妻ではなかったと考えることで、女三の宮の降嫁による動揺と物思いの深刻さがより切実なものとして了解されるのではないか。また、現実の平安時代社会においても、道綱母を妻と見るか否かにかかわらず、その子道綱（九五五―一〇一〇）と、時姫の子である藤原道隆（九五三―九九五）・道兼（九六一―九九五）・道長（九六六―一〇二八）の出世のスピードの差は歴然で、それは母の立場の違いにも関係すると考えざるを得ない。

平安時代の婚姻制度を紹介するなら、「妻」「結婚」などの語を教室でどのような意味で用いるかについて予め整理しておかなければ生徒は混乱するだろう。たとえば「沖つ白浪」の「この女、いとわろくなりにければ、思ひわづらひて、限りなく思ひながら、妻をまうけてけり、この今の妻は、富みたる女になむありける」という一節のように、「今の妻」を迎えて二人の「妻」がいると解せる文章が古典には存在する。教科書でも「ほかに妻を作ってしまった」など、「妻」の語を用いて注釈することになるが、これを字義通り「妻」と見るか、律令上の「妻」とは異なる事実上・慣習上の「妻」（今日でも籍を入れない形での結婚を指す「事実婚」や「内縁関係」といった言葉があり、それを結婚・妻・夫と呼ぶこともあろう。入籍の有無は制度の問題であって愛情の深さには関わらないはずである）と解すかによって、一夫多妻制か一夫一妻制かという相反する立場へと容易に分かれてしまう。用語の定義が重要と述べるのはそれゆえであり、「一夫多妻制」「一夫一妻制」という立場表明のみでは、この時代の婚姻制度を説明したことにはならない。

参考

恋文の返事を待ちわびる平中こと平定文（『今昔物語集』巻第三十、平定文仮借本院侍従語第一）

「只、「見ツ」ト許ノ二文字ヲダニ見セ給ヘ」ト、「絡返シ泣々ク」ト云フ許ニ書テ遣タリケル使ノ、返事ヲ持テ返来タリケレバ、平中物ニ当テ出会テ、其ノ返事ヲ急ギ取テ見ケレバ、我ガ消息ニ、「「見ツ」ト云フ二文字ヲダニ見セ給ヘ」ト書テ遣タリツル、其ノ「見ツ」ト云フ二文字ヲ破テ、薄様ニ押付テ遣タル也ケリ。平中此レヲルニ、弥ヨ妬ク侘キ事無限シ。

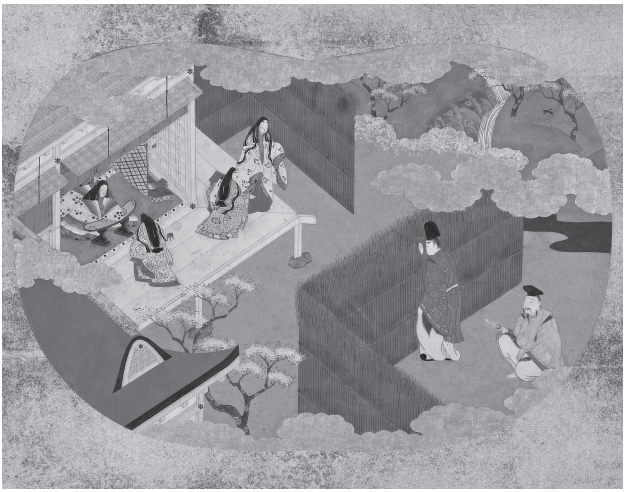
紫上と新枕を交わした後、三日夜餅の場面（『源氏物語』葵）

君、南の方に出でたまひて、惟光を召して、「この餅（もちひ）、かう数々にところせきさまにはあらで、明日の暮に参らせよ。今日はいまいましき日なりけり」とうちほほ笑みてのたまふ御気色を、心とき者にて、ふと思ひよりぬ。惟光、たしかにもうけたまはらで、「げに、愛敬のはじめは日選（えら）りして聞こしめすべきことにこそ。さても子（ね）の子（こ）はいくつか仕うまつらす

べうはべらむ」とまめだちて申せば、「三つが一つにてもあらむかし」とのたまふに、心得はてて立ちぬ。もの馴れのさまや、と君は思す。人にも言はで、手づからといふばかり、里にてぞ作りゐたりける。……のたまひし餅、忍びていたう夜更かして持て参れり。少納言はおとなしくて、恥づかしくや思さむ、と思ひやり深く心しらひて、むすめの弁といふを呼び出でて、「これ忍びて参らせたまへ」とて、香壺の箱を一つさし入れたり。「たしかに御枕上に参らすべき祝ひの物にはべる。あなかしこ、あだにな」と言へば、……

参考文献

吉海直人『「垣間見」る源氏物語―紫式部の手法を解析する』笠間書院、二〇一四年。
小松茂美『手紙の歴史』岩波新書、一九七六年。
久曽神昇『平安時代仮名書状の研究　増補改訂版』風間書房、一九九二年。
井上光貞・関晃・土田直鎮・青木和夫『律令』（日本思想大系）岩波書店、一九七六年。
高群逸枝『招婿婚の研究』（講談社、一九五三年。一九九六年に『高群逸枝全集』第二巻所収（理論社））
関口裕子「律令国家における嫡歳妻・妾制について」『史学雑誌』第八十一巻一号、一九七二年。
梅村恵子「摂関家の正妻」『日本古代の政治と文化』吉川弘文館、一九八七年。
工藤重矩『平安朝の結婚制度と文学』風間書房、一九九四年。
工藤重矩『源氏物語の結婚―平安朝の婚姻制度と恋愛譚』中公新書、二〇一二年。
藤井貞和『物語と結婚』（創樹社、一九八五年。一九九五年にちくま文庫所収）



「源氏物語画帖」（国文学研究資料館蔵新日本古典籍データベース）
https://kotenseki.nijl.ac.jp/biblio/200014736/viewer/7

単元の言語活動４

視点を変えて、物語を書き換える

活動のねらい

物語は、複数の視点で描かれることもあるが、多くの場合、ある視点によって書かれている。物語に描かれる話を立場の異なる登場人物の視点で捉えなおしてみることにより、物語への理解を深めようというのがねらいである。このような作業は他者の立場になって考える、批判的思考力を育成することにもつながる。

タイトル・序文の解説

何らかの関係が終わった際に、当事者二人の捉え方が異なる場合がある。いっぽうは円満に解消したと感じ、もういっぽうは解消したことによって傷ついていると感じる場合もあることだろう。出来事としては同じであると考えられても、立場が変われば捉え方が異なることがある。そして異なる捉え方を理解することができれば出来事の対処の仕方に幅が広がることになる。そして、物語でそのような試みを行うことは物語を深く理解することにもつながるのである。

「課題」の解説

課題　**視点を変えて「梓弓」の物語を書き換え、「男」の心情を表現してみよう。**

「梓弓」は女性の視点から描かれた物語である。相手の男性については行動や和歌は書かれているものの、心情については書かれることはない。物語の場面、場面で書かれていない男性の心情を想像して物語を違う視点から書き換えてみよう。

「活動」の解説

1　**「梓弓引けど」「あひ思はで」のそれぞれの歌を詠んだときの「女」の心情を、表の中に整理してみよう。**

和歌の前までの物語のストーリーを踏まえたうえで、二つの和歌に込められた「女」の心情を考える。

「梓弓引けど」の歌には女の、元の男を思う気持ちが込められている。

帰って来ない元の男をずっと待ち続けていたが、三年が過ぎ

て、心を込めて言い寄って来る別の男を受け入れる気持ちになった。しかし、それは元の男とは永遠に会えないと考えたからであった。そこに元の男が帰って来た。いったんは理性的に別の男との経緯を歌にして伝えたものの、愛情が続いているとの元の男の返歌を読んで自分の本当の心に気づく。つまり、自分は今でも元の男を愛しているということであり、それを歌に詠んだのである。「女」の心情としては

・帰って来た元の男のことを今だに愛している
・待ちくたびれて別の男といっしょになろうとしていた
・別の男との約束は守らなければならないと思っていたが、

そこには元の男以上の愛情はないことに気づいた

等が考えられる。

「あひ思はで」の歌には「女」の、絶望が込められている。お互いに今でも愛し合っていたのに、元の男は女がその思いを告げる前に姿を消し、追いかけたものの追いつかず、「女」の気持ちを伝える術は永遠になくなってしまった。自分の正直な気持ちがはっきりと分かった以上、この先、元の男を思い続けながら、別の男と生きていくことはできないと考え、「女」は死を決意することになる。「女」の心情としては

・元の男のことを今でも愛している
・愛する気持ちをすぐに伝えなかったことを悔やんでいる
・元の男が去っていった今はもう生きてはいけない

等が考えられる。

思判表B(1)イ

2　「梓弓引けど」「あひ思はで」のそれぞれの歌に対して、「男」はどのような心情を抱いたかを想像し、表に書き込もう。

「女」の二つの和歌に対して、それを元の男が目にしていたらどのような気持ちを抱くのかを想像してみる。その際に1で考えた和歌に込められた「女」の心情も参考にする。

「梓弓引けど」の歌には、可能ならば「女」ともう一度やり直したい気持ちを抱いたのではないだろうか。

新しい別の男と幸せに暮らせと返歌はしたものの、元の男も実際はまだ「女」を愛しており、「女」と暮らすために一人で都でがんばってきたのだから、できればもう一度やり直して幸せに暮らしたい、自分も昔から心はあなただけとともにあると思っている。また、事情はあるものの三年間、連絡をしなかったことを悔やんでいると考えられる。

・私も本当はまだあなたを愛している
・今は新しい別の男との幸せを願おう
・三年も連絡しなかった自分が悪い

等が考えられる。

「あひ思はで」の歌には、死なないで欲しい、これからもともに生きていこうという気持ちを抱いたのではないだろうか。

男が「女」の追う気配を感じて、振り返り、清水の元に倒れ込む「女」を見つける。死のうとしている「女」を見て、死なせてはならないと思い、自分の、まだ「女」を愛している気持ちを確認し、愛しいと思い、これからもいっしょに生きていきたいと思う。

・追いかけて来てくれたことを嬉しく思う気持ち
・今でも「女」を愛している

・これからはずっといっしょに生きていこうという気持ち
等が考えられる。　思判表B⑴イオ　主態

▼評価のポイント▲　1、2はワークシートがあるので、それを記入後に集めて確認することができる。物語からは導くことが難しい心情が書かれていたら理由を聞いてみるとよい。事前に想像していた以上のストーリーを生徒が考えている場合もある。丹念なやり取りをしたい。

3

「男帰りにけり。」以下を「男」の物語に書き換えよう。

①　グループを作り、ひとりひとりが考えた「男」の心情についてグループ内で発表し、意見をまとめる。

グループを作った後、それぞれで元の男の心情の経緯を考える。その際、

ⅰ「この戸開け給へ。」と戸をたたいた時
ⅱ「あらたまの」の歌を聞いた時
ⅲ「梓弓ま弓槻弓」の歌を返した時
ⅳ「梓弓引けど」の歌を聞いた時
ⅴひたすら「女」の家から離れようとした時

というように場面を分けて、それぞれの場面での心情を考え、参考にする。最後に「あひ思はで」の歌を聞いていたとしたらどのように思ったかも付け加えて考える。個人の作業終了後、場面ごとに心情を検討し、グループの意見をまとめる。

②　グループでまとめた意見に従って、「男」の心情に基づいた「男」の行動を考える。

物語では大まかな行動しか示されていないので、もう少し詳細な行動を付け加えて行く。例えば、戸をたたいて待っている場面では「じれったく思い、足踏みをしている」、「待ちきれなくて何回も戸をたたく」などと付け加えていく。①で考えた心情とここで考えた行動を参考にして、後半の部分を書き換えていくことになる。

③　「男帰りにけり。」（六九・11）以下を「男」の視点の物語に書き換える。

「男帰りにけり」以下の部分は「女」の描写しかない。それと並行している元の男の物語を、現代語でよいので書いていく。それぞれで書いてグループでまとめてもよいし、初めから相談しながら書き進めてもよい。「梓弓引けど」の歌は「往なむとしければ」とあるので、元の男が帰ろうとしているところに詠みかけていると考えられる。和歌を耳にしていながら元の男はどのような心情で去ろうとしたのか、「女」のまだ愛しているという心情がわかっているのにそれほど急いで離れようとするものなのか、等考えるポイントはたくさん見つかるであろう。それらを書き進めていくことになる。

例えば次のようなストーリーが考えられる。

男は「女」の「梓弓引けど」の和歌を聞いていたが、「女」の

新しいスタートのことを考え、身を引こうと考えて、「女」の家を離れる。しかし、「女」のことをまだ愛しており、気持ちは「女」の家の方にある。「女」が家を出て、追いかけてくる気配がする。元の男は「女」を愛しいと思う気持ちがまだ強いことを確信するが、心を鬼にして、歩みを早める。しばらくして、「女」の気配が消えていることに気づき、戻ってみると泉の側に「女」が倒れており、傍らの岩に血で歌が書きつけられている。その歌を読み、お互いがお互いを求めていることが分かり、「女」を介抱すると、「女」は奇跡的に息を吹き返し、ふたりは固く抱き合う。もうひとりにはしないと元の男は「女」に言って、ふたりで家に帰る。その夜は別の男が来るかもしれないので扉を固く閉ざして、息を殺していた。

思判表B⑴イオ

4　「男」の視点の物語を発表しよう。

①グループでまとめた「男」の物語を発表する。

元々は悲劇的結末で終わっていたが、男の視点で考えることによって、現実離れしているかもしれないものの、ハッピーエンドの結末を迎えるように読みかえることができた。

このようにハッピーエンドを考えるグループが多く、似たようなものとなるかもしれないが、視点を変えて物語を捉え直すことが狙いなので気にしないようにする。視点を変えるという考え方があることに気付かせることを重視したい。そして視点を変えると行動の仕方次第で、ふたりの絆が深まる方向に進む可能性も見いだせることが分かるとよい。

②発表を聞いて、共感できる点をあげる。

それぞれのグループの発表を聞いて、共感できる点をメモしよう。その中で自分たちが考えられなかった行動や心情があった場合にはその妥当性を検討してみよう。あくまでも元の物語があっての書き換えなので、元の物語から発展するのに無理がある話になるのはあまり好ましくない。

知技⑴ア　思判表B⑴オ　主態

▼評価のポイント▲　グループで作成したストーリーはワークシートや発表で確認する。物語に即した範囲でユニークなストーリーを考えたグループには高評価を与えてもよい。また、多くの生徒から共感する部分があったとされたグループにも高評価を与える。

評価規準

〔知識・技能〕⑴ア　言葉には、文化の継承、発展、創造を支える働きがあることを理解している。

〔思考力・判断力・表現力等〕B⑴イ　「読むこと」において、作品や文章に表れているものの見方、感じ方、考え方を捉え、内容を解釈している。

〔思考力・判断力・表現力等〕B⑴オ　「読むこと」において、

作品の内容や解釈を踏まえ、自分のものの見方、感じ方、考え方を深めている。

〔主体的に学習に取り組む態度〕　進んで昔の人の恋のあり方について理解し、歌物語に親しみ、今までの学習を生かして、想像力を働かせ、人物の心情を考えようとしている。

◎学習指導要領の言語活動例との関連

〔思考力・判断力・表現力等〕　B⑵エ

（畠山　俊）